

史料紹介 「大和家蔵書」所収「大館伊予守尚氏入道 常興筆記」

木下 聡

はじめに

本稿は、前号に引き続き、山口県図書館所蔵「大和家蔵書」のうち、第一～五巻の「大館伊予守尚氏入道常興筆記 大和大和守晴完入道宗恕追加」五冊の翻刻を行う。この五冊は、室町幕府奉公衆・御供衆で、足利義晴將軍期には、内談衆として重きをなし、多くの武家故実を伝えた大館尚氏の手になり、それを大和晴完が書写し、一部追加を施したものである。その追加部分が具体的にどこか、今後検討せねばならないが、まずは翻刻して紹介しておきたい。記主の大和晴完及び「大和家蔵書」の概要については、前号で述べているので、ここでは省略させていただく。

本稿で紹介する「大館伊予守尚氏入道常興筆記」五冊の内容は、一冊目が、書札礼・官位事、鹿苑院住持との応答、制札・禁制などの文書の書き方などについて、二冊目が、諸階層への書札礼、「大館常興

書札抄」にもある官途等類事など、三冊目が、御礼など応対についての条々問答、服、細川高国の書札など、四冊目が、書札礼、御成、諸家進物、官途唐名など、そして五冊目が、年中行事・垵飯の出仕事、衣装、常興の知る幕府に関する故事、文書案などで構成されている。最後になるが、翻刻の許可を戴いた山口県図書館に御礼を述べさせていただきます。

〔付記〕 本稿は二〇一七年度科学研究費補助金（若手研究スタートアップ）による研究成果の一部である。

〔凡例〕

- ・ 翻刻にあたって、旧字体は適宜現在通用の字体に改めた。
- ・ 改行は原則として追いつみとし、傍書・挿入箇所も適宜本文中に追いつみとした。改行や行間が空いている場合は、一行空けた。また読点および並列点を適宜加えた。
- ・ 闕字は適宜存した。
- ・ 系図の関係線は本来朱であるが、印刷の関係上黒で表記した。

大和家蔵書一

(表紙表題)「大和家蔵書 一」

中表紙

(付箋)「大館伊予守尚氏入道常興筆記 一」

大和和大守晴完入道宗恕追加 一

(朱印「明治十四年改」)

書札事

一 第一の賞翫の書様にハ、此旨可有御披露とも、可預披露」とも、又ハ可得御意ともありて、恐惶謹言とも書て、其内」の被官人にも、家子などにも、あて所を書事、子の」かたより父のかたへも如此なるへし、恐惶を恐々謹言と」書事も可有之、あて所肝要也、

一 某殿人々御中と書事、第二也、

一 進覽、又進献など、書事、第三、

一 御宿所と書事は、第四、御宿所と書事ハ、このまし」からぬ儀也、然共近代如此のミ在之間、不及是非云々、

一 進之候、第五、むかしハ等輩への書様進之候にて候へ共、」近代にいたりてハ、下手へのミ如此在之、


一 打つけ書、第六、究下也、うちつけ書とハ、名字官まで」かきて、御宿所とも、進之候とも、何共不書候を、打つけ」かきと申ならハし候、此段ハ被官人など、又ハ下々之」儀たるへし、

一 謹上書の事、肝要のやうにむかしより其さたあり、」我より上手へも、又等輩へも、下手へも、おしわたりての」かきやう、しんさうによりて故実在之と申ならハし候、」仮令我より上手への時、謹上かやうにいかにもしんに」すミを黒く書へし、等輩へハ謹上、凡此

趣、下手へハ謹上、」かやうに書くへしと申ならハし候、きん上書の時ハ、うハかきの」名乗の上に官を書へし、無官の時は名乗はかり也、」おくの日の下にも名乗の上に官をかく也、しゆりやう」ならハその受領を書へし、官と申候へハ、受領の外のミ」申やうに心得候人も在之、かならずしも其儀にあらず、」受領をも官と申段勿論候云々、内官・外官と申候ハ、」禁中に百敷と申候を内官と申、諸国の受領を外官と」申なるへし、将又無官の人も、一段賞翫のかたへハ名上の」上に氏をかく也、但しやうくわんのかた同氏ならハ、斟酌ある」へし、和哥の懐昏などにハ、公方様にての御会の時、」源家ハ上の御氏に恐たてまつりて、氏をかきくわへさるも」此心得なり、又謹上書の時ハ、礼昏とて在之、つねのことく」ふうせすして、白き紙一枚にて上を巻て、其上をたち」ふミにする也、次うら書の事ハ、惣別書札の法にいたりてハ」か、さる、いんきんの儀也、我と称号を書事ハ、自由のいたり」なるへし、されは公家かたにハ、いまにいたり其分也、昔」弘安礼節とて、弘安年中に書札法式をさためおかれ、」公家かたハもつはら其旨をちかへす、た、いまにいたりて」も被相調之也、然共武家方の事ハ、中古今河了俊と」申せし故実ならひなき人ありしか、申おかれし趣とに」あひ残て、公家方のかかりてもちひきたれる也、近代ことに」うら書のなきを、武家方にかきりてハ、自由緩怠のよし」御沙汰におよふ間、誰もうら書を調なく候、かやうの事ハ」時世にしたかふならひ、いかにも於于今其分可然也、三職を」はしめて御相伴の大名などハ、裏書のなきをきか」せらる、段、其分なるへし、

一 進上書の事

書状のした、めやう、謹上同前なるへし云々、

一細々申通なかはにてハ、或ハ床下・足下、又ハふミの心得」にて
 など、書事、法の外の儀なり、さらに「くる
しからす云々、

一公方様詔などの書状事、た、うちつけ書とのミ」心得候て調事、
無故実儀也云々、殿中仁牀により用捨」あるへき事也、か様の時も
謹上可然也云々、

一被仰出事の御請にも、謹上又ハ進上書も可然事也、

一料紙一かさねに書て、面にてかきとむるにハ、日付のおくにつかハ
す」所の名を書へし、又うら紙にてかきとむるにハ、日付のおく
に」名をかくに不及也、但此段ハこしふミの時の事也、たてふミ
の」時ハ、うらにてかきとむるといふとも、日付のおくに」名を書
へし、

一公家かたにハ、とむる所にて可得御意候と被認候ハ、其分可有」御
心得候と被申る心也、武家方に可得御意と調候ハ、可有」御披露候
と申心得にて、うやまい候かたにのミ認候也、此段」公武により相
かハるへき儀にあらずといへとも、かやうにのミ」もちいきたられ
る間、いまにいたりへちきあるへからす候歟、

一武家方にハ、称号を名字といひ、名字を名乗と申、」公家衆にハ、
名字を称号といひ、名のりを名字と申也、」是又さやうに公家によ
り、雖不可有相違、如此のミ申き」たれる也、

一僧家への書札事

長老へ恐惶謹言とも、敬白とも書て、寺の名を書て、」侍者御中、
或ハ侍者禪師など、いかにもうやまい書へし、」西堂分大かい同前、
但長老程ハあるへからす、はいにかくへきを、」少さうに書、侍者
御中とあるへきを、尊床下・」玉床下・足下など有へし、時宜によ

り、事によるへし、」縦平僧たりといふ共、一寺の住持とならハ、
そのかとあり、」賞翫も勿論也、

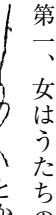
一公家方の事

一撰家・清花などへハ、其所の殿上人にても、諸大夫にても、」又ハ
侍にても、祇候の人にあて、可書之、直札にてハあるへ」からす、
縦賤官たり共、高家を賞翫の故実也、其外」のかたハ、或は
人々御中、或は進覧などともある」へし、但例式の公家衆たり共、
大臣にならせ給ひ候は、」直札ハ斟酌あるへし、次常の公家衆中に
ても、いまた」五位・六位の方などへハ、人々御中なとなくとも、
進」覧なども可然候哉云々、然者恐々謹言なるへし、



一門跡方の事

青蓮院・聖護院・梶井殿など、申たくひの御事、撰家」同前心得也、
其外れきハしも」の儀、大概公家方」おなし、但法中の事ハ、
さのミ官位をす、まさるゆへに、」聊用捨有之云々、

一女中衆の事

第一、女はうたちの名を書てらうのく、たれにても
 とかくも、人々同事也、

第二、あて所ならて其人の名を書てらうのく

第三、、第四、

第五、、第六、、又らうと書事もあり、

第七、

大かた此趣也、上臈分の御かたへハ、めしつかハれ候女房達」の名
をかきてらうのく、可然、惣別相当の段ハ、」へちにこ
れあるといへとも、女中かたの事ハ、一きハ」うやまい申段故実

云々、

一女中かたへひふつなとまいらせ候に、女はう詞にて候とて、「鯛を御ひら、鮭をあか御まなとか、さるか可然也」、「鯛をハたい、鮭をハさけとした、めたるか」よき也、

一諸大名などに、或ハ馬・太刀、或ハ折樽など遣候に、目録の「書様事三職へハ、御太刀と御字をくわへたるか可然云々、馬も御馬と」あるへし、進上とハあるへからず、おくに名乗、かたに名字「官あるへし、其外の事、兩種の内御太刀一腰・馬一疋・御樽」五荷・折十合など、一色ハ御字をくわへ、一色ハくわへさる「か故実也、おくハ名乗はかりにても、又名乗をハ略して、」名字官計にてもあるへし、其段ともかくも不苦云々、樽・折の時ハ、まつ折を前に書て、おくに樽可然也、又「同輩・下々へハ、何も御字をくわへす、おくの名をか、す」して、目録はかりの儀勿論可然也、等輩にても、或は「宿老、又は別而賞翫もあるへきと存候方へハ、右に申」ことく、一色に御字も可然なるへし、
一条々趣凡如此、相心得而、少ハいんきんなよろしきと申「御かたへ候也、

右様牀本々及承候分也、定而相違之儀可有之歟、「御用捨可為

肝要者也、

御内書并官位其外書札事

一三職以下被成遣御様牀、至于今無相違御事也、

一御所々々の御事、らるへしと御座候、又ハらるとも「被遊候由承候、其内にても南御所の御事ハ、らる」御座候様に、もとく承候也、御寺号大慈院と申候間、「大し院とのへとも、又ハ南御所とも被遊候て、らると」御さ候へき、其下に御

名字^{御名乗事也}を上^{事也}の御字をかなに、「下をまなに可被遊也、御文言にハ、

御寺領などの御事にて「御座候者、在所の名御座候而、御知行相違あるへからず」など、被遊候へき也、其外の御所へも、縦令らると「御座候を、らるへしなど、被遊候へきにてこそ候へ、御様牀ハ」此趣同事なるへし、

一長老達への御事、諸五山何も恐惶謹言と被遊候と「存たてまつり候、又ハ恐々敬白とも御座候と存候、御あて所ハ、」其寺の名を被遊て御名字御さあるへし、南禅寺・天龍寺などハ、侍者御中など、も御座候由承候、其外「の事もしつし被思召候、長老へハ、侍者御中・侍者禪師」など、被遊候御事も、先例御座なきにあらず、御文言も「此趣にしたかひて、御賞翫勿論の御儀と存候、

一公家方への御事・親王家への御事、誠恐謹言・」人々御中と御座候て、御名字御さあるへし、

一撰家への御事、当官大臣にて御入候ハ、恐惶謹言と「御さ候て、居所の名けりやう、近衛殿とも、又ハ一条殿」とも被遊候て、人々御中など、ハ御座候ハて、御名字御さ「あるへし、又こなたの御儀も、おなしほと御高官」にて御座候ハ、恐惶とハ被遊候ハて、恐々謹言と御座「あるへし、

一清花への御事、大かい同前の御趣なれとも、諸篇撰家「よりハ御もちいの様牀少からく御座候也、就其御内書」の趣も聊御用捨御座あるへし、大臣、殊相国などに「御成候ハ、其官位にしたかふ御礼節御座ある事に候」条、一段の御儀也、次た、うち者、大納言・中納言以下の「事ハ、此御所様へ御家来の分にて御入候間、大方ハ三職」などに今すこしおもく被遊なさる、御事に候、但「大納言の官にいたりてハ、又其かとある御事にて候間、」謹言とも、又ハ恐々

謹言などとも御座候やうにうけ給候、」そうしてハ、弘安礼節と申候て、昔弘安年中に「さため」をかれ候法様御入候、其段は、於公家ハ是を用られ候、至」武家方候てハ、不及其儀事にて候、然共此礼節をふ」まへて書札之事可相調申段、尤可然事由承候、

一 武家方諸侍等書札事、

武家方にてても四品仕御方へハ、五位・六位の諸侍より恐々」謹言と書事ハ、無謂やうに申事にて候、恐惶謹言」とあるへき事也、然をかやうにのミ相調候、慮外之儀候哉、」地下の五位より四位雲客への儀、弘安礼節此趣勿論也、

一 於武家方用來候次第の事、

書札を遣所の家子にてても、被官人にてても、あて所をかき候」事、賞翫之第一也、

其次、人々御中と書事、第二其次、進覽又ハ進献、」第三其次、御宿所、第四、是ハおもはしからぬ書様なから、」近代誰々も用來る也、其次、進之候、第五其次、打つけ」書、第六、是は書状を遣候所の人の称号官を書いて、」進之候共、何共不書事也、かやうに次第をたて候に、うち」つけ書の事、究下の分候、御宿所とかき候ハ、大かい」同輩の趣にて候、然時は御供衆の中にてても、御紋を」仕る方なとへハ、ひら待などの身にては、御宿所と可書事、」其意得あるへき事也、或は人々御中、或參・進覽」など、可有之哉、將又御紋せられ候人々の事、何も同事」とハ申なから、御とも衆にめしくわへられ候ハ、別而一かと」ある御儀也、仍如此也、

一 謹上と書事、うやまい候方へも、又同輩へも有書様、

一 被仰出事の御請などにも、必謹上とあるへき事也、」然を不及其儀、打つけ書にのミ仕候事、不審の儀也、」又注進など言上の儀にも、

謹上書なるへき事也、謹上」を進上と認る事勿論也、

一 返事の認様の事、賞翫の方へハ尊答・尊報又」貴報・御報などとも書之、同輩、又下手へハ御返報と書之、」於下手へハ御返事とも書へき也、此趣何もく」共以前前」の事なから、有つけたる様牀也、此段も賞翫の方へハ」真に書、同輩・下手へハ、さうにも調候なるへし、又かやうに」書に及はすして、人々御中、其外進覽など、書事も」勿論也、返事の段は文言に相見候間、又ハ如此也、將又御」報とハ、同輩へも可有之、

一 同朋衆書状之事、御供衆のうち御紋をもせられ候方へハ、」被官人あて所にした、め候、又ハ人々御中なとも可有之、」御供衆にかきらす、御紋の人々へハ其意得あるへき事也、」是併上をたつとミ奉る覚悟也、其中にてても聊浅深ハ」勿論也、

一 門跡方の御内書御事、青蓮院殿・聖護院殿」などのたくひ、准后に御成候ハ、撰家同前の御事にて候由」承候、僧正ハ、官位相当なとにハ大臣などの任官にハ不及」様に御入候哉、准后ハ一段の御儀也云々、將又宮門跡の事ハ」准后同前、

一 女中方への御内書の事、知行などを御内書にて」被下候事、**有**も御座候段勿論也、御あて所の被遊やう、」御佐子のつほねへと御さあるへし、御文言にハ、なにと申」さい所ちきやうあるへく候とも、ちきやうせらるへく候共」被遊也、大上臈へハ、上らふの御つほねへと御座候、大上臈」少そのかと御座候、それもた、上らふのつほねへと、御の」字を略候事も御さあるへし、何もめしつかハれ候うへ」にて、少御用捨御座候也、將又中臈への御事、左京大夫の」つほねへと御座候、御文言にハ知行せらるへく候とは」御さ候ハて、知行すへく候とも、知行あるへく候とも御座」あるへき也、

女中かたへかなの御内書にも、知行など」の事に被成にハ、御日付、同御判をすへられ候事」勿論也、

一貴賤によらず御内書を被成下事、等持院殿・宝篋院殿」御時までハ、於御陣中ニ、いかなるいやしき輩にも、事によりて」被成下事も毎々御さありけるよしうけ給候、鹿苑院殿様」以来、御様躰いさ、か相かハリ奉て、さやうの御用捨在之御」事也云々、如此段も、事により時宜にしたかふ御事共也、

一御内書にて御座候とて、あさ／＼と御ことはすくなにのミ御さ」あるにてもなし、事により、ことこまかに御座候事も勿論御儀也、一連署の事、官より名乗まで書つ、けて、いく人たれ」にてもおしならへて書之也、仍其次第ハ、をくに書候を」上首と定めし間、日の下より次第におくを賞翫の心なり、」判形ハ名乗のとをりのうらに仕也、又名乗をかきて、かたに」称号・官など書付候ハ、おもてに判形仕候、かやうのをハれん」判と申、奉行衆意見状などハ、うらに判形在之、

一貴人へ捧愚札ニ名乗のわきに上文字を付る事、進上に准する」心也云々、公家衆などの進物のもくろくに、名乗のわきに」上文字を被書申事古ニ在之、其時ハはしに進上とハ」御書候ハて、か様に被調候かた／＼毎々の儀なるへし、至武家方ハ、本」はしに進上と書申也、然吉良殿にかきり進上をも不被書」申、又名乗をも書のせず、た、目録計にて御入候、昔より」彼方のしつけにて候由うけ給候、次先年石橋尾張守治義と」申人、細々出仕など、ある時、慈照院殿様より仰ミ、義字を」下におきたる事如何事候哉の由、御不審をなされ候処、」わか家に如此之趣被申、不及是非其分也、其家々のなら」ハしにより、か様の儀在之、其段も又事により時宜に」したか

ふなるへしと云々、先年桃井治部少輔政信と申し、」二番の番頭にて候つる、先祖に左馬頭ニ拝任の例有とての」そミ申処ミ、此頭の事ハ公方様御初官にて、誰々をも」不被成候分にて御座候とて、不及御領状、御元服ニ両様」御座あり、公家の御元服武家の御元服如此也、将又公家方」の輩ミ、此頭に拝任の儀あり、それハ各別の事也云々、

一官位の事、左衛門督ハ大中納言の兼官たる間、一段の官」にて、武家方にいたりてハ、さうなく是に不被任、畠山」家に惣領一人拝任のよしうけたまはり候、次左衛門佐、」是ハ殿上人任官に候間、打まかせて誰にも被任之儀」無之、於武家方も、御紋の衆少々被任候也、次郎左衛門尉、」是ハ諸侍上下共以任之分也、衛門の唐名、督・佐・尉、侍」何も金吾と申也、

一右衛門督・同佐・同尉、大かい左衛門ニ同、但右衛門督ハ左よりハ」かろし、然共武家方にてハ、山名家惣領一人拝任の分也、唐名同前、

一左兵衛督・同佐・同尉、大かい衛門ニ同、但左兵衛督ハ、於武家方ハ、」鎌倉殿・斯波殿被任之間、一段の様ニ御用也、又佐ハ、左・右衛門佐」より誰々にもなされざるやうに御入候、兵衛のから名武衛也、」次世和に申候、三職之内武衛とのミ申候ハ、此官に代々ならせ」給ひ候によりての事也、称号を斯波とは申へからず、玉」堂と申へきにて候由、先年織田大和守などハ申候し」か共、斯波殿と申ならハし候間、先以此分也、

一左京大夫・同亮・同進、此大夫事ハ誰々もうちまかせて」不被任候、但諸大名其例多之、次亮・進諸侍以下誰々にても」任之、唐名京兆・一右京大夫・同亮・同進、何も左京同前、但此大夫の事ハ、細川」家

一人外、他家に不可被成由にて、代々細川惣領一人被任之分也、」
唐名同前、

一修理大夫同前、但其廉有由承候、唐名匠作、亮同、進同、

一大膳大夫・同亮・同進、何も同前、但此大夫ハ、京兆・匠作よりハ少」かろしと云々、唐名光禄、此四の大夫をハ四職大夫と申也、」四品相当たるへき中に、大膳大夫少かろきにより、五位相当」共申と云々、

一彈正大弼・同少弼・同忠、此大弼にハ、於武家方ハ近代無其例、」少弼ハ少々被任之、うちまかせてたれ」も不被任之、忠ハ」諸侍各任也、唐名霜台、此官」候任候時ハ、ひた、れ・こすわう」なと、も、くろく紋にハてうこを付也、扇六ほね也、鞆も」くろきを
用也、同事ながら、忠はさまでなし、

一左馬頭・同助・同允、此頭ハ、公方様武家の元服の時の」御官たる間、於武家方ハ、一向に誰々にても不被任之、次」助も、誰々も可任様」ハ無之、少々ハ拜任也、允ハ諸侍」以下任之也、唐名典厩、

一右馬頭・同助・同允、何も同、但此頭にハ拜任のかた多之、それ
も」うちまかせてハ無之、少々被任之分也、から名同前、

一兵庫頭・同助・同允、何も大かい同前也、唐名武庫、此助ハ」左・

右馬助よりハかろし、諸侍も任之也、

一縫殿頭・同助・同允、何も大かい同前、からな尚衣、
シヤウイ

一玄番頭・同助・同允、同前、から名鴻臚典寮、
ゴウワシヤウ

一掃部頭・同々・同々、洒掃、

一雅楽頭・同々・同々、協律、大楽、

一図書頭・同々・同々、秘書、
ヒシヤウ

一大炊頭・同々・同々、道令、大倉、
タウリヤウ

一木工頭・同々・同々、工部、工道、
クホウ

一主計頭・同々・同々、計部、金部、又度支、
ケイホウ コシホウ タクシ

一隼人正、同佐、
フコ
布護、

此内にて、掃部頭にハたれ」も不被成、あなち高官之」儀にてハ無之、此官にかきり成つけたる家在之、助・允には」諸侍以下たれ」も任之也、

一判官、唐名廷尉、是ハ高官にてハなし、然共なりつけたる」家少々在之、其輩ならてハ不被任、直垂已下彈正官同前也、

一監物、唐名侍御、諸侍誰々も任之、
シキヨ

一將監、同々、親衛、同前、但左・右近將監などにハ諸侍も任する」成へし、大夫將監ハ少々其かとある事にて、たれ」も任するやうにハ無之、

一勘解由、唐名勾勘、諸侍已下任之、
コウカン

一帯刀、同々、内率、同前、帶劍
タイソツ

一藏人、同々、侍中、諸侍も藏人丞などニハ任する也、

一八省の事、

中務卿・大輔・少輔・丞、唐名中書、

式部卿・大輔・少輔・丞、同 史部、
リホ

治部卿・大輔・少輔・丞、同 礼部、

民部卿・同・同・同、同 戸部、

兵部卿・同・同・同、同 兵部、
ヘイホ

刑部卿・大輔・少輔・丞、同 刑部、

大藏卿・同・同・同、同 大府、
タイフ

宮内卿・同・同・同、同 司農、

八省卿ハ公家方被任之、其内にて中務卿・式部卿ハ親王」家なら

せ給ふ間、此両卿にハ公家の人々も拝任なし云々、」殊式部卿の事、取分しつしおほしめしける由承候、大輔・」少輔にハもつはら武家の輩拜任候、然に御紋の衆の外ハ、」諸侍などハ其家に成つけさるハ更以不被任之、其内にも猶」以式部大輔ハ一向に武家方衆にハ不被成之、又治部大輔ハ等持院」殿様ならせまし／＼たるとて、うちまかせてハ不被任之、吉良殿・」斯波殿などハもつはら被任之、其外ハ不被拜任也、八省丞にハ」諸侍たれ／＼も任候也、そうして八省輔の事ハ、しつし思召候」官也、又或ハ中務大夫、或ハ式部大夫・彈正大夫・掃部大夫など、」申候ハ、けりやう中務丞・式部丞・掃部助・彈正忠など、申候か」五位に叙候へハ、則大夫と申候儀にて候を、例式の官途を申やうに」望申事、いかやうにハ候へとも、武家方の申さた故実ならひにて、」かやうにのミ申儀にて候、将又兵部卿も親王家被任候へ共、此」兵部卿の事ハ、中務・式部などのやうにハ候へて、誰々も被」任候也、誰々もとハ公家方の事也、一受領の事

此三ヶ国、四職大夫程の御用也、

陸奥守 奥州、武蔵守 武州、相模守 相州、
此三ヶ国、左衛門佐・右衛門佐程事也、

伊予守 与州、阿波守 阿州、讃岐守 讃州、

此七ヶ国ハ、八省輔程の御用也、

尾張守 尾州、上総介 総州、安房守 房州、

淡路守 淡州、播磨守 播州、伊勢守 勢州、

摂津守 摂州、

此受領の事ハ、其例なき諸侍などにハ被成さる也、コノトコロハシキレ
に」武蔵守ハ、細川家外任官近代無之、此外の受領共事ハ、」諸

侍・諸家被官人にいたるまで任之間、御用趣左衛門尉・」右衛門尉・兵庫助以下同事也、

大和守 和州、山城守 城州、伊豆守 豆州、
出羽守 羽州、越後守 越州、因幡守 因州、
丹波守 丹州、丹後守 丹州、備前守 備州、
備中守 備州、備後守 備州、伯耆守 伯州、
出雲守 雲州、但馬守 但州、河内守 河州、
美作守 作州、近江守 江州、美濃守 濃州、
飛騨守 飛州、隱岐守 隠州、常陸介 常州、
上野介 上州、下野守 野州、伊賀守 伊州、
加賀守 加州、甲斐守 甲州、紀伊守 紀州、
下総守 総州、土佐守 土州、佐渡守 佐州、
和泉守 泉州、若狹守 若州、信濃守 信州、
三河守 三州、遠江守 遠州、駿河守 駿州、
沓岐守 沓州、安芸守 芸州、石見守 石州、
能登守 能州、越前守 越州、越中守 越州、
周防守 防州、長門守 長州、筑前守 筑州、
筑後守 同、豊前守 豊州、豊後守 豊州、
大隅守 隅州、日向守 日州、薩摩守 薩州、
肥後守 肥州、肥前守 肥州、対馬守 対州、
志摩守 摩州、

受領をハ、外官とも、あかたとも申也、又百官をハ、も、敷」とも、
内官とも申也、百敷と申候、是必百の官にてハ」なく候へとも、数
のお、きかたにとりなして、百しき」など、申ならハしたるよしう
け給候、右にしるし」申候大和守以下の受領ハ、少の捨別可在之と

申候へとも、「大かい諸侍も任之段別儀なし、此内ニ上総守・上野守・」常陸守此三の守には、親王ならせたまふあひた、ほん」にんのなるへき事、かつてもつて不可在之事とて、「此三ヶ国をハ介に任之儀也、介をもかミとよミ候由承候、」そうして諸国に守と介と在之、介ハ守よりハかろき」事なれとも、一かとある事候間、うちまかせてハ守と」なされず候儀也、人々家々の例によりて介を望申事、「これなきにあらずのよし承也、

一 還任と申事、はしめ左・右衛門佐、又ハ八省輔などにて候か、「受領候て、又其後此受領を辞、はしめの官になるを申也、」細川家ニ代々公方様武家の御元服の時、加冠の所役に」被参候時、右京大夫にて候を、武藏守かり受領にて、其後」又武藏守をしたい申されて、もとのことく右京大夫と」御任候、如此の事を還任と申也、細川家にかきらさる」事也、此還任一段ハ略任候也、

一 御奉加帳の御判を被成候時、征夷大將軍と被遊て御判を」すへられ付箋「万松院殿御奉加帳に、大納言と被遊候て御判ありし事」度々儀也、当御所様へ御判をさせ被参候つる時ハ、左中將」などにて御判を被載候つる儀、見及申候也

し御事も御座候、先年常徳院殿様さ様に」被遊候御事、毎々御さ候し、或ハ天神の名号の御筆」を申請候に、如此被遊候て、御判御座候御事も見及奉候也、

一様と申事、必々書奉候ハてハ不叶様ニハ御入候ハす候、け」りやう勝定院殿様と書奉候を認候ハぬとて、自由緩怠」とはならざる御事にて候よし、もとくより御沙汰ニ」および候つる、奉行の調申候奉書などにも、様と申字をハ」書不申候のミにて候、昔より如此御儀にて候云々、

右条々、依仰書進上申候也、御使晴光也、

大永八年三月十二日 進上之、

右此一冊者、為 上意大館伊与入道」常興被相尋之、書進上也、公方様江」申請奉書写之訖、不可有他見而已、

大和刑部少輔 朱印

晴完

鹿王院潤仲和尚へ

一 僧家への書札之事、 第一、賞翫之所へは謹呈と」書て、其寺号、或又院号書事第一也、侍衣禪師・侍衣」閣下・侍者御中、何も同前也、平僧の時ハ、道号を書事」賞翫也、西堂長老よりハ、院号又寺号を書事賞翫也、」拝上・拝献・拝進とも書て、其名を書同心也、惣別僧の一番に」出世を瑞世と云、此時は、袈裟の緒と坐具とを替也、」諸山の西堂と云也、其後十刹の西堂と云、此時は袈裟と」坐具と替、衣ハ黒也、其後ニ平五山の長老と云ハ黄衣也、」其後南禪寺の位紫衣也、紫衣ハ南禪寺・天龍寺、其」外ハ無之也、相国寺ハ官寺也、官寺とハ公方様を賞翫」被申儀をもつて紫衣を被着也、大徳寺の長老ハ、」等持寺と同前也、経を被送時、等持寺の次ニ被置也、鎌倉」五山の内建長寺ハ相国寺の上也、五山へ御成之御時ハ」御膳碗也、碗のふち上計をたいまいにせらる、折敷ハ」少足を被付、是もふちの上計たいまい也、御配膳の」喝食ハ兩人也、御相伴のハ十人也、御はいせんの喝食は」俗姓を被撰也、南禪寺・相国寺・天

龍寺・三合院・鹿王院へ」御成也、此外二ハ無之云々、十刹の西堂、
等持寺・臨川寺」・真如寺、等持寺内東也九条・安国寺・宝幢寺・普門寺・広覺寺・
仁和寺妙光寺、

鹿苑院春寂和尚尋申

先例共不書して、上書ニ謹呈と書て、其院号又は其寺」号を書事一段賞翫也、或ハ^一拝上・^二拝進・^三拝献共書也、」字の心あるへし、さて侍衣閣下と書事第一也、其次侍衣」禪師、其次侍者御中也、さて恐惶敬白と書事第一也、」恐惶謹言第二也、

一諸五山并諸禪家へ書札の事、いかにも敬儀也、

御入院之儀、珍重存候、仍何一事致参拝可得御意候、誠恐謹言、

二月廿三日

名乗

拜呈 建仁寺 侍者御中

拜上 東福寺 侍衣禪師

諸五山へハ如此、五山之内ニ南禪寺の位ハ勅願寺の最上たる間、」一段の賞翫也、南禪寺の位にて候へハ紫衣也、猶参拝之時」可得尊意候誠恐敬白なと可在之、

一侍者禪師・衣鉢禪師・侍鉢閣下・侍者御中、此四大略同事也、」侍鉢閣下より衣鉢閣下、侍者の居住の閣を指て申事也、」侍者御中より勝候、常ニハ侍者禪師普通之事也、

一五山の外諸塔頭へハ、少々差別可在之、一寺号、一院号又」庵号を可書之、不然ハ又道号を可書也、首座・藏主・侍者ニハ」何も可有心得也、

一ふれ折紙書へきやうの事、

次第不同

一一殿

二一殿
三一殿
四一殿
五一殿

明日十三、於 殿中御一献御座候、可有御参之由、被仰出候、

正月十二日

大和守

杉原なとおりかミにして、其子細を書へきに、いついくか」に可被参之由如此書也、次第六借により次第不同と」書事故実也、又事によりて恐々謹言とかきて、」名乗かたに名字官まで書て、判形をもすへし、

一被仰出儀を承て触申時ハ、此由被仰出候恐々謹言と」書て、うちつけ書にすへし、但又其人により、打付」書にハ不調儀もあるへし、又被仰出候とはかり調」事もあるへし、いつれも事によるへし、

一連判之時、若輩程日下判形あるへき也、奥次第賞翫也、」又書状ニ判形を二人三人するニハ、上の名乗ハ賞翫人を」書也、又裏書も奥あかり也、常に人の裏書はしあかる」よし申候へ共、相違と云々、

二階堂中書被申候也、

一折紙目録調様事、

鳥ハ何鳥にても前に書へし、次第ならハ白鳥一・鵠一・」雁五・雉十なと、あるへし、何鳥にても数あるへし、魚をハ」次に書へし、鯛十・鮒五十なとあるへし、何魚も大かた」数を書へし、但鯛一折・鯉一折なともあるへし、鯉五」喉なと書ハわろし、喉字ハあるへからず、又一懸なとも」わろし、鮭ハ一尺・二尺・五尺・十尺なと書へし、又荒巻ハ」数を二十・三十と書之、折紙にいく色もあれ、

樽の候はん」時ハいちおくなるへし、

一精進の物、魚鳥にあひならへて参候事、不見及聞にも、」前後の儀何にても不苦候哉、但精進の物前にてあるへき」かと存候、白鳥・まんちうなどの時ハ、白鳥前たる」へき也、口伝在之、

一桶ニ入し物進物に書候にハ、一桶・十桶など、調候、百桶、か様ニ」可在之、

一御折・樽折紙調様事、

御盆台数ハ不定へし、御折十合数ハ不定へし、押物五合数ハ不定へし、御樽十荷、柳ならハ柳何荷と書」へし、御字あるへからず、又天野ならハ、御樽天野五荷」などあるへし、

一進上折帟調様の事、

御太刀一腰銘 御馬一疋印毛あるへし

万疋万の字、何も同事ながら、例式此万字を書へし、折帟二ハ、た、万疋・五千疋・千疋とハかり書之、

又

御太刀一腰銘 御絵一幅筆 御香合一堆 金欄一端色付 御盆

三枚堆

又

進上

御太刀一腰行平 御香合一副紅 御盆 一枚金糸

如此引合を香合の下二付らる、も
あり、是ハ引合を
そゆれハ、四色たる間如此、

以上

又

御太刀一腰銘 御小袖五重練貫 御弓二十張 鐙子二十 引合十帖
何も此書様にて心得らるへき也、是ミな公方様へ」進上の分也、私さまハ又あひかゝるへき事也、可有用捨、

一御台へまいり候折紙調やうの事、

しん上

御かうはこ一 御ほん一かなの時ハ数の字ハあるへからず、た、一又ハ二・三とあるへし、
三千ひき 以上

名字官途又ハしゆりやう、かなの時ハ名のり上の字をかなに」書候、又下の字をハまなに書之、

一殿文字品々あり、

殿賞 同 改等輩 々下様へ
如此書也

これを書乗と云々、又仮名にとのと書、仮名に書たるハ」不書程の事と云々、

一名乗の下のそはに上の字書事、殊なる賞翫也、状と云」字を書、是ハ少賞翫の儀也、又請文と云字をそはに書」事ハ、返答の儀也、

一日付よりものけて奥にた、書事、是又さけたる」事と云々、

一壁書可書様、

壁書名字官途名乗 申 国 庄事、」当知行之地也、掠申輩有之者、尋承可申明者也、」仍壁書如件、

年号月日

一 国 庄事、有訴詔之輩者、尋承子細可申」披、仍壁書如件、

一 状の奥を折事、一寸八分計ニ可折云々、深く折事」狼藉也云々、

一 制札事、

禁制 安国寺

一 甲乙人等乱入事

一 諸人押而居住事

一 伐採竹木事

右条々、若有違犯族者、可被処嚴科之由候也、仍下知」如件、

年号月日

官氏朝臣判

かやうにせいさつにハ名字をハカ、すして、官より氏を「書て判形あるへし、但無官の人ハ氏名乗はかり成へし、」将又二人三人、又ハいくたりも判形あらハ、次第にをくある也、

きんせい たういち庵

一をしかいの事

一ふつうにこ、ようきやくせいせんのこと

一こうろんのこと

一かたきうちのこと

一しせ□たうそくあるへきを、かくしおくへき事

右てうく一事たりといふ共、いはいのともからあらは、「かたくさいくわせらるへき者也、仍下知如件、

年号月日

官一判

所により、かやうにかなに書事も一の故実也、

一せいさつの書様の事、其所又ハ事によりて、条々ハ」かハるとも、

かさやうハおなしかるへし、

禁制 所名

一甲乙人等濫妨狼藉事

一喧嘩事

一博戯事

一所質事

一成旅人煩事

一雖レ為ニ豊年ニ令^{ムル}高直^{ナラ}米穀^{ウリ}沽酒等^ヲ

事^{アキナイ}付諸商物等、雖^レ無^ニ子細^ト一、
令^二高直^一事

右条々、堅被停止之訖、若有違犯之族者、」速可被処罪科者也、仍下知如件、

天文十八年十一月三日

かやうに日の字の下は、つれのとをりを
おくへよせて、受領にても、官途にても、
かきて判をすへし、

能登守

沙弥

入道の時かやうにかく也、

かやうに禁制の禁の字のかしらと、一文字と、右といふ」字のかしらと、いづれもおなしとをりを也、

一寺社かたのせいさつハ、はしつくりかやうにあるへし、

禁制 円通寺境内付塔頭

一甲乙人等号見物致狼藉事

一伐採竹木事

一放飼牛馬事

右条々、堅被停止訖一

禁制 一宮境内

条数ハ書度事を書へき也、

禁制 正法寺境内

一軍勢甲乙人等乱妨狼藉事

一伐採竹木事

一相懸人夫課役事

右、誰々——

ヲトナノ事也

誰々にても申うくる制札のほか、家司^{ケシ}の人々にも、其手の「軍兵きんせいのため所望する事あるへし、さやうの」時ハ奥に、

右条々、当手之軍兵中、堅令停止之訖、若有違犯之」族者、速可処

罪科者也、仍下知如件、

天文十一

越前守

又しやうはいの事など、あまりにこま／＼しき事の「制札ハ、所によりてミくるしき也、守護所其外可然」所にてハ、其所の代官などよりあひふれて可然也、又「いかにこま／＼敷事成とも、肝要の儀におきてハ、尤「書のすへき事也、わたくしの領中にてハ、其りやう」し内の被官におほせてたつる事もあるへし、又「自身の名をもかく事あるへき也、

一過書書様事、

若州下向人六拾人^{在之}、興式丁・馬十疋、諸関渡無其」煩可勘過之由、所被仰下也、仍下知如件、

天文十四年五月三日

沙 弥 判

前丹後守平朝臣判

右立文一枚也、上包在之云々、

一かん状の書様の事、

今度於 在所名 合戦之時、敵数輩被討捕、得勝利之」段、感悦之至、併忠節無比類之至、子孫可申伝候、恐々謹言、

月日

名乗判

某殿

凡此趣也、是ハわかよりき・被官などの、下手への様牒也、」同輩・少下手などへのならハ、忠節と云文言に御忠節と、」御字書加へし、さやうの用捨、万ニ心得ある事成へし、」前にも申ことく、かやうのふんしやうも、一篇にハさた」まるへからず、こと／＼やう／＼により、さま／＼可有之、

一知行分の代官職人々申合時、領主よりのふにんの」事、

補任

山城国——代官職之事

右、限参ヶ年申合者也、年貢諸公事物已下、」嚴蜜可有執御沙汰、万一有御無沙汰之儀者、雖為年記」之内、任御請文旨、可改易申者也、仍補任之状如件、

年号月日

名字
名乗判

某殿

大かた此分也、我より下手への儀ならハ、とり御さた」とあるを、とりさたとかき、御うけふミとかくを、うけふミと」かくをうけふみとした、むへし、下手へと申も、被官」などの事ハもとより、其外にても一段下手への儀」なるへし、

一代官方よりのうけふミのかきやうの事、

預り申御知行分山城国——御代官職之事、」御年貢諸公事物等、嚴蜜可致執沙汰、若聊^モ無沙汰」之儀在之者、雖為何時、可有御改易、其時不可及一言」子細者也、仍請文如件、

年号月日

名字
名乗判

是又凡此分也、年記をさす事、或ハ三ヶ年、又ハ五ヶ年」など、其時の申合ニよる事也、又年記に不及申合事候、」様牒ニより勿論也、又補任も請文も一かきにて、条々を」書たて候て、申合事も時宜ニより在之、まつ通法の」趣如此也、

一主人へ進上之書状之様牒之事、

畏言上

抑当所之事、任守護方打渡之旨入部之処、」百姓等則出合、祝儀共申候、千秋万歳、目出度存候、」猶重而可申上候、此等之趣預御披露候者、尤可畏」入候、恐惶謹言、

月日 官名字判

此趣なるへし、書様一へんにハ有へからず、然共如此也、「か様の
状ハふうせすして、白紙一まいにて巻て、さて」立文^ニして、上か
きもかやうにある也、謹上・進上かき」何も其分也、此白昏をらい
しと云也、こふミの時ハ、「らいしちいさくもするなるへし、進
上・謹上かきなら」ねは、らいしにするに不及也、

一 主人より御札を給たる御返事、

御書謹而拜見仕候、先以忝畏存候、抑被仰下候子細、「即可申付候、
地下人等定無疎略可致其沙汰候、若」難渋之族在之者、急度可注進
仕候旨、宜預御」披露候、恐惶謹言、

月日 官名乗判

進上 某殿

主人にかきらす、一段貴人などへハ凡同前趣也、「進上とか、すし
て、あて所はかり書事も可在之、

一 同輩への書状之事、

其後者久不能拝顔候、背本意存候、何等御事共候哉、「御憚之時分、
可参申入候、又此辺御次候者、光臨所仰候、」諸事期面上之時候、
恐々謹言、

月日 名判

某殿 御宿所

同輩なから、少上下此分なるへし、一段賞翫ならハ人々御中、「又
少賞翫ならハ進覧となるへし、又御宿所の上にらる」と云一字
をまかく也、

一 同人のかたよりの返事の事、

御状之旨令拝見候、喜悅之至候、近日清水寺辺御」物詣之由示給候、

尤珍重候、必々可御供申候、毎事」期其時、令省略候、恐々謹言、
月日 名乗判

某殿 御返報

御報とも貴報・尊答など、も書也、是は敬かたへ」書之、

一 他家ひふつ書状の書くわふる様牀之事、

貴札委細致拝覧候、抑雁一・鳥五・鯛十・御樽三荷」被送下候、祝
着之至、賞翫無比類候、併御懇志難申尽候、「仍比興候へ共、折節
見来候間、鞆二懸令進入候、旁以」参上可申入候、可得御意候、
恐々謹言、

月日 名乗判

某殿 参貴報

先日者預御使候、殊更重宝拝領、於于今畏入存候、「将又鴨五・鯉
二・塩引三尺・貝蛸一折令進之候、心事」如面拜可申承候、恐々謹
言、

月日 名乗判

某殿 進覧候

一 上所肝要之其様牀之事、

恐惶謹言、^一恐々謹言、^二恐惶と書候へ共、草に書候へハ、「真の恐々
に准候、^三恐々と書候へ共、真に書候へハ、草の恐惶^三」准候、^一真・
行・草分別して、相手上中下へ調候て可然候也、

一 公家方も官位により 晴完恐惶謹言、^二晴完」恐々謹言、此段猶以賞
翫之心にて、官位によるとハ、大中」納言等の御事にて候、

一 あて所書事、

宛所書^二人々御中^三進覧候^四進献之候」御宿所^五進之候^六打付書^七
是も真・行・草分別肝要候、猶以故実と申ハ、参の」一字を書加へ

らるへく候、此段右之うちにての、少賞翫」あるへきかたへの故実にて候、

一返札之事、是も^一宛所書^二尊答^三尊報^四貴報^五御報^六御返報^七打付書^八御返事

是ハ被官之類へ相調申候、此条も真・行・草肝要」たるへく候、賞翫あるへきかたへハ参を可加也、分別」同前、

一知行方之儀以下ニ、百姓地下人等之類へ、直の折昏遣」事不可在之、被官中可為折昏也、

一御同宿御中 御同宿中 御坊中

一僧官位 僧正・法務・僧都・律師ハ官也、」是を正真の僧綱とす、

法印・法眼・法橋ハ位也、

一僧俗対判事、

後醍醐天皇 宣旨

大僧正 准大納言 正僧正 准中納言 権僧正 准参議

以上 建武四年御法

龜山院 宣旨

一法印 僧都 准四位殿上人 律師 准五位 凡僧 准六位

諸寺三綱 准地下四位諸大夫 凡僧 准同五位云々

以上、龜山院・後醍醐院両御代、各被定其法宣旨取合」記之、

僧正 可准参議 法印 法務 僧都 可准四位殿上人

法眼 律師 可准同五位 凡僧 可准同六位

諸寺 三綱及八幡社務

僧綱 可准地下四位 諸大夫 凡僧 可准同五位

諸大夫、但日来殿上人五位不可有上所、

威儀師可准五位下北面、従儀師可准同六位

西班 平寮トモ祖元トモ首座

西堂 前堂 後堂 書記 藏主 知客 侍者 沙弥 喝食

東班 西堂トハ首座間也

都聞 都寺 都寺 監寺 副寺

其所ノ開山

本尊ノ左方ヲ主位ト云、右ヲ賓位ト云也、

上 石性謹言 次 石性謹言 下 石性謹言

宮内太輔源晴完

大和守源晴完

大和前司

前大和守

散位

從四位下源晴完

四品時懷帝書様如此、広橋大納言殿「国光卿へ尋申訖、

進上 日野殿進上 御折 三合

御折 十合 御樽 三荷

柳 十荷 以上

愛子丸上

以上

愛子丸

ちまき 一折 しん上

かん	一	たい	一おり
またい	一折	くい	一おり
柳	五か	昆ふ	一おり
以上		柳	三か

朱印

従四位下源晴完

大和家蔵書二

(表紙表題)「大和家蔵書二」

中表紙

(付箋)「大館伊予守尚氏入道常興筆記

大和守晴完入道宗恕追加

二

(朱印「明治十四年改」)

一公方様へ御請之書様之事、

謹言上

抑彼在所口入之事、委細被仰下之趣畏」承候、堅申付之、重而可令言上之段、先以可然」様可預御披露候、恐惶謹言、

正月 日 左衛門佐尚氏判

進上 御奉行所

凡此趣なるへし、書様一へんにハあるへからす、」其様躰、被仰下通、先以謹以承候、則申付候、其趣」重而可致言上候、可然様預御披露候者、可畏」入候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

伊勢守殿

かやうにもあるへし、御請と申事、奉書など被成下、」被仰出之儀也、何もくうら書あるへし、日付の下に」官を書時ハ、うらかきハ名字ハかり、日付下に名乗計」の時ハ、うらかき名字官可書之、又無官の時ハ、進上」書にも日下名乗計にて、うら書にハ名字」ゑほし名可書也、

一撰家への書状之事、直札にてハ有へからす、

——此等之次第、宜預御披露候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

大膳大夫殿 是ハ近衛殿祇候之諸大夫也、

此趣也、諸大夫かたへの書状なるへし、又ハ殿上人「其外侍方へも如此たるへし、時宜にしたかひて、宛所」何にてもあるへし、

一 清花への書状事、

大概撰家同前たるへし、

一 撰家と申ハ 近衛殿 九条殿 二条殿 一条殿 鷹司殿、此御家之事也、

一 清花と申ハ 転法輪殿 徳大寺殿 花山院殿 「久我殿 西園寺殿

菊亭殿 大炊御門殿^{東院殿事也}

一 日野殿への書状事、

——可令申候、此等之趣、宜令申入給候、恐惶謹言、

正月 日 名乗判

日野殿参人々御中

凡此趣なるへし、但日野殿御事ハ、公方様御外跡たるに「よりて、常々公家衆の中にてハ、取分賞翫申儀也、如此直札」も勿論なれ共、大概ハ清花なとほに、各其あつかひあるなり、

一 三条殿大かい日野殿同前也、

可令申旨、被仰出候、可得御意候、恐惶謹言、

正月 日 左衛門佐尚氏

謹上 三条殿

三条殿 人々御中

如此もあるへし、うら書の事ハまへに申分なり、又「恐惶の上に名乗書事、日野殿なとへも勿論也、」是ハいかにも賞翫の書やうなり、又進上書・謹上」書にハ、白帟まいにて、上を巻て其上を立ふミ

に」するなり、此白帟を礼帟と申なり、小ふミなども」如此、其時ハ礼帟をも其たてにきり合てまくなり、」小ふミの時ハ、礼帟のひろきハ紙なから計につゝむる」なるへし、

一 勸修寺殿 冷泉殿 飛鳥井殿などのたくひ」公家達への事、

——可得御意候、恐惶謹言、

正月 日 名乗

勸修寺殿人々御中

凡此趣也、これも恐惶の上に名乗を書へき事も」勿論也、大納言・中納言などに御なり候へハ、一段賞翫也、」勸修寺殿にかきらぬ事也、

一 殿上人への書札の事、

——御会、撰家門跡少々御参候、為御配膳可有」御祇候之由、被仰出候、可得御意候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

甘露寺弁殿 進覧候 凡此趣也、

一 ——以参上可申入候、可得御意候、恐々謹言、

正月 日

^{御方} 飛鳥井殿 進献之候、

か様にかたに御方共付也、これは親父御入候時の事也、」御親父御入候へ共、飛鳥井中将殿なと、書て、御方」と不付事も勿論也、又か様に進献之とも書也、」進覧同程の事也、

一 殿上人と申ハ、くらい四位以下の人たちの事なり、」公卿と申ハ、三位已上の事也、公卿の内にも、大中納言ハ」一段賞翫、猶大納言ハしやうくわんなり、然るに撰家・」清花ハ、縦四位以下にて御入候へ共、浅官のさたに不及、」まへに申如く賞翫申儀也、又た、

うちの公家たちも、」大臣に御なり候へは、清花のことく賞翫申也、
一諸大夫事、

——為家門御使光臨、其恐千万候、以參上御礼」可令申候、宜預御
意得候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

修理大夫殿進之候

凡此趣也、同諸大夫ながら、三位などになりたるをハ」又賞翫也、
進覽なども書へし、撰家の諸大夫ハ」くわしよく也、清花の諸大夫
ハさやうにハなし、大かいハ」同程の事也、

一外記官務事、

大かい諸大夫同趣也、

一社家方の事、是も諸大夫大かい同前也、此内にて」も、吉田二位な
とハ少賞翫趣也、

一医・陰両道事、是も大かい諸大夫同趣也、

一門跡事、

——申入候、宜令申入給候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

伊与法印御坊進之候

凡此趣也、撰家大かい同事也、青蓮院殿坊官也、」又出世人、又ハ
侍法師方へにても、時宜にしたかひて」の書状たるへし、必坊官計
に可遣にてハなし、

一御持僧と申ハ、聖護院殿 大覚寺殿 「実相院殿 花頂殿 円満院
殿 三宝院殿」など也、門跡家高のうちにてハ、此御門跡たちに
て」御入候也、下河原殿・浄土寺殿など也、何も撰家同御」事也、
一宮門跡ハ取分一段御賞翫也、御室 梶井殿 「青蓮院殿 妙法院殿

也、

一脇門跡事、

——可得御意候、恐惶謹言、

正月 日 名乗判

定法寺殿御坊進覽候

凡此趣なるへし、但其身宿老にて、大僧正などに」御成候ハ、
人々御中と可書事可然也、
一脇門跡と申ハ、定法寺殿 住心院殿 尊勝院殿 「岡崎殿 若王子
など也、

一出世と申ハ、無量寿院 妙観院 花徳院」など、申たくひ也、

——以参賀可申入候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

無量寿院御坊中 凡此趣也、

一坊官への事、

——何様又可参申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

南坊御房

一侍法師への事、

——如此令申之、猶期向顔之時候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

備中法眼御房進之候

凡此趣也、侍法師ハ坊官よりハ下也、
一五山長老へ可進入書状之事、
——以参拝可申入候、此旨可得貴意候、恐惶敬白、

正月 日 名乗判

南禪寺 参侍者御中

諸五山可為此分、南禪寺之事、五山の上たる間、「公私共ニ一段御賞翫なり、然共大概同事なるへし、」敬白を謹言共あるへし、

一五山と申ハ、南禪寺 天龍寺 相国寺「建仁寺 東福寺 万寿寺、此分也、

一鎌倉五山 建長寺 円覚寺 寿福寺「浄智寺 浄妙寺 一西堂へ之事、

——可申入候、恐惶謹言、

正月 日

名乗判

等持寺 侍者御中

凡此趣なるへし、

一首座・藏主などへの事、

——令省略候、恐々敬白、

正月 日

名乗判

玉公首座 禪師 足下

凡此趣也、道号を可書事猶可然也、又ハ一寺之「住持ならハ、其寺号或ハ軒号など可書也、

内々——宜預御意得段所仰候、恐々謹言、

正月 日

名乗判

喜公藏主 禪師 床下

凡此分たるへし、是も寺号・軒号あらハ、それを「可書事可然也、道号又可然也、出家にいたりてハ、」俗姓ハいらさる段めつらしからぬ事なから、又其御身「一段の家高などの事ハ、縦侍者の位にて御入候共、」長老・西堂のことく賞翫申て、書状等調事も「古今の習也、殊公方様御連枝など如此、仍れんき・」万松などへハ、直札にてハ無之、祇候の御僧への書状「たるへき也、かやうの趣併故実

云々、

一浄土宗長老事、

——猶可参申候、恐惶謹言、

正月 日

名乗判

三福寺 侍者御中

凡此趣也、禪家長老と浄土宗長老と公儀御「用之様躰ハ、五山長老ハ一段御賞翫也、年始など参賀」之時も、五山長老をハ御縁迄□をくりありて「御礼あり、其外ハ不及其儀、

一時宗上人之事、

——可参賀候、恐々敬白、

正月 日

名乗判

金光院 御同宿中

凡此趣なるへし、金光院と申ハ七条道場の寺「号也、かやうに寺号を可書也、大かい浄土宗長老」同前の心得なるへし、下々の衆への事ハ、何阿弥陀仏「進之候など、あるへし、又床下なども可書之、一武家方三職への書札事、

先日以奉行被仰出候間之事、急度被加御下知候者、「可然被思食之段、得其意可令申之由上意候、」此等之趣宜得御意候、恐惶謹言、

正月 日

名乗判

右京大夫殿 参人々御中

凡此趣也、

従御屋形雁二・鳥拾・鯛一折被送下候、「祝着畏入候、御意得候而、御申所仰候、恐々謹言、

正月 日

名乗判

安富筑後守殿

かやうにも可有候、惣而ハ三職へも直札たるへき段勿論也、「然共、事により細々の儀なとハ、被官中へ之状之分に」認也、披露にあつかるへく候共、自然書事あり、又「かやうに可為喜悅なと、何となく書事も故実也、

一三職と申ハ、斯波殿武衛之事也 畠山殿 細川殿、「此三家也、何も同前也、

一吉良殿 渋川殿 石橋殿之事、

三職へのことく大かい同事也、此内にて吉良殿ハ一「段御賞翫也、然間被官中へ書状に、可有披露之由」文言可然也、

一山名殿 一色殿 細川讃岐守殿 畠山修理大夫殿」への事、

先度如被仰出候、御用之子細——得其——意可令申之由、宜得御意候、恐々謹言、

正月 日 官名乗判

謹上 一色殿参

凡此趣也、かやうに謹上書に参といふ字ハ、書三不「及事なれ共、賞翫の一かゝに書くハ、ふる事故実也、」謹上と書事、人々御中よりハ下也、然共謹上ハ、我「より上へも下へも、又同輩へもわたりての書やう、書札の」かんにやうといへり、賞翫へハ、いかにも真にかき、同輩へハ「さのミしんならず、又はさうになき程にかき、下手へハ」いかにもさうに書也、山名殿・讃州・匠作、何も同前也、貴札旨令拝見候、仍御轡三口御進上候、則「致披露候之處、被悅思召之由、得其意可申段、」被仰出候、可得御意候、恐々謹言、

卯月十一日 彈正少弼尚氏判

謹上 山名殿尊報

御轡二口拝領、一段見事、且過分至、畏入候、「委曲猶村上遠江守

可被申入候旨、宜得御意候、」恐々謹言、

卯月十一日 尚氏判

右衛門督殿参進覽候

又如此、右衛門督殿とハ山名殿之事也、人々御中」と書事もあるへし、

一赤松殿 大内殿 京極殿への事、

御太刀一腰・鳥目二千疋拝受、祝着之至候、仍「御太刀一振・馬一疋鹿毛進覽候、猶浦上美作守」可被申候、恐々謹言、

九月廿六日 彈正少弼尚氏判

謹上 赤松殿

杉原十束拝受、一段畏悦之至候、委曲猶上原「対馬可被申候、恐々謹言、

十一月十三日 尚氏判

赤松殿参進覽候

凡此趣共也、大概一色殿なと同前なるうちにて、「少ハかろし、大内殿・京極殿も是おなし、参と云字ハ、」不及書事も勿論也、

一土岐殿への事、

御札旨拝見候、抑御太刀一腰・鳥目万疋送給「之候、尤以祝着至候、仍太刀一振信國・馬一疋雀毛印令進之候、併表祝言計候、委細猶遠藤丹後守」可被申候、恐々謹言、

十一月廿日 尚氏判

土岐殿御報

ゆかけ五具拝受、一段畏悦之至候、猶宇都宮「石州可被申候、恐々謹言、

十二月七日 尚氏判

左京大夫殿 進覧候

此趣共也、左京大夫殿とハ土岐殿事也、御宿所」と書時も有之、又参といふ一字をしせん書加事も」あるへし、

山名相模守殿 和泉両守護 武田殿 「仁木左京大夫殿 六角殿

山名中務少輔殿」富樫殿などのたくひ、何も土岐殿へのことくなるへし、」大かい大内殿 赤松殿 京極殿同前趣也、

一御供衆へ之事、

——致披露之处、意得候て可申之由、御気色候、猶」期拝顔存候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

右馬頭殿 参進覧候

——以拝顔可申入候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

細川上総介殿 進覧候

——御床敷存候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

赤松伊豆守殿 御宿所

凡此趣共也、御供衆中にてハ、細川典厩ハ取分」賞翫の様也、上総殿とハ備中守護事也、淡路守殿・」因幡守護など同前也、又ハ御宿所共書之、次赤松」豆州、其外伊勢守殿など同前也、

一外様衆之事、

年始御出仕之事、貴所御儀者、被准国持之段」勿論御事候条、御盃可有御給之儀、無余儀存候、」猶以面上可申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

細川陸奥守殿 御宿所

凡此趣也、伊勢仁木殿・丹波仁木殿、其外御」もんせられ候方々数多有之、仍同前也、

——猶期拝顔候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

仁木次郎四郎殿 御報

——委細猶岩山濃州可被申候、恐々謹言、

七月廿日 尚氏判

完道兵部少輔殿 御返報 凡此趣也、

一番方への事、

——併期面拝時候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

桃井治部少輔殿 御宿所

桃井殿ハ二番頭也、自余同前也、

——猶期面上候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

高越後入道殿 御宿所

於番方も、高殿・長井殿・大和守殿・佐々木」大原殿、諸大名同名衆などハ、取分賞翫之趣也、」其外賞翫の方も可有之、進之候共又如此も可書也、」又進之候と如此さうに書もあるへし、

——可令申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

門真新左衛門尉殿 進之候

——以面上可申承候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

進士美作守殿 進之候

凡此趣共也、何もうら書ハ名字官可然也、無官ならハ「名字ゑほし
なたるへし、

一奉行衆事、

——猶以面可申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

松田丹後守殿進之候

凡如此也、うら書同前、すゑのわかき奉行へハ、うら「かき名
字計にても、官計にても可有之、それも」名字官まで書てもよし、
一御末祇候諸侍并御台様御被官衆事、何も」進之候也、うらかきハわ
かき奉行衆への趣なるへし、

一社家方之事、

——御供可申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

善法寺殿御坊進覽候

——可參候由承候、可參申候、恐々謹言、

正月 日 名乗

松梅院御坊進之候

同事ながら、善法寺ハ御賞翫也、松梅院なとハさも」候ハす候、御
坊進之候と書候を、御坊中と計も可」然也、

——得其意候、可參申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

吉田二位殿進覽之候

神主方にてハ、吉田ハ賞翫の様也、但いまた官位」す、まさる息な
とへハ進之候もよし、

——御意得所仰候、恐々謹言、

正月 日 名乗

松下三位殿進之候 凡此趣也、

一同朋衆事、

——御雜談候者、可為喜悅候、恐々謹言、

正月 日 名乗

吉阿弥陀仏進之候

凡何も此趣成へし、

一諸家之被官衆事、

天野五荷・熨斗蛇五百本・鯛一折送給候、「賞翫此事候、猶使者可
申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

遊佐河内守殿進之候

凡此趣也、三職被官ハ少賞翫也、次むかしハまつ「かやうにたるを
書也、近代ハ先さかなをかきて、さて」樽を書候也、

——祝着候、猶使者可申候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

垣屋越前守殿進之候

凡此趣也、諸家少つ、其かとありといへとも、何も大かい」同こと
く可書也、

一我被官かたへの事、

先日申付候間之事、調法之由候、喜悅候、殊以如存」分、近日可事
行之段本望候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

何かしとのへ

凡此趣也、謹言とも書也、恐々を略して、た、「謹言とはかりも書
段勿論也、又かやう恐々謹言」と、草にも勿論なるへし、

一感状事、

今度粉骨無比類候、併感悦此事候、弥可被抽「忠節候也、恐々謹言、

正月 日 名乗

富森左京亮とのへ

此趣也、殿字をかやうにもかき、又殿か様にも書へし、

一御供衆中にてハ、細川典厩ハ前に申ことく取分「賞翫分趣也、

細川上総介殿

畠山宮内大輔殿

一色兵部少輔殿

山名七郎殿

上野民部太輔殿

畠山播磨守殿

一色五郎殿

細川淡路守殿

畠山中務少輔殿

山名治部少輔殿

為犬追物射手、可有御参之由、被仰出候之处、「被成其御覚悟之旨、

御申尤珍重候、猶期拝顔「令省略候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

山名左衛門佐殿御宿所

いづれも御もんせられ候御供衆、凡此分たるへし、「御宿所を進覧

候と書時もあり、

赤松伊豆守殿

富樫中務太輔殿

伊勢守殿

同備中守殿

赤松有馬殿

赤松左衛門佐殿

伊勢因幡守殿

来十日、於 殿中可有一献御座候間、「可令祇候之段蒙仰、畏

存候趣、「御意得所仰候、恐々謹言、

正月 日 名乗判

伊勢守殿御宿所

此人数いづれもく此趣也、

一畠山式部少輔殿、是も御紋の衆同前可書之、

一外様衆事

前に如申候、御紋の衆、細川陸奥守殿のことく「書状した、むへし、

上杉右衛門佐殿 京極加賀守殿 土岐池尻殿「佐々木尼子殿 黒

田殿 倉智殿「武田中務少輔殿

かやうの人も御宿所可然也、けりやう「御宿所をちとさうに

可書也、

江見殿 益田殿 土肥殿「佐々木田中殿 永田殿

かやうの方へハ進之共あるへし、又ハさうに「御宿所もくる

しからず、

一評定衆事

摂津殿 二階堂殿 波多野殿「町野殿

是ハ同事ながら、御宿所と京極加賀殿などへ「のことくありて

可然、又進之候共あるへし、「何も御宿所可然なり、

一奉公方番方之事也事、

番頭ハ、申ことく桃井殿如書へし、其外御もん「せられ候奉公衆、

何も御宿所と可然也、

小笠原殿へハ、

——折三合・樽三荷進覧候、御賞翫候者、可為「祝着候、恐惶謹言、

月 日

名乗判

かやうにありて可然、小笠原殿之事ハ、弓馬師匠たる「間、いかにも賞翫候て、恐惶謹言と書事可然なり、」但人々御中までハ不書して、御宿所といかにもしんに「可書之、進覧候共あるへし、さりながら、弟子にもならざる」人ハ如此ハあるへからず、長井殿などとの心得「なるへし、何もたとひ弟子にならずといふ共、小笠原殿」計ハ一段賞翫可然也、

高殿 大和殿 曾我殿 長井殿 「大原殿 鏡殿 宮殿 宇都宮殿」三浦殿 土岐峯殿 千秋殿 小田殿 「星野殿 岩山殿 佐竹殿」田村殿 武田兵庫頭殿 結城殿 大内修理亮殿 「小早川殿

かやうのかた／＼へハ、御宿所をちとさうに書て、又ハ「進之候も勿論也、乍去御宿所可然也、

安東殿 門真殿 佐脇殿 海老名殿 「富永殿 吉田殿、かやうの人ハ進之候也、但」さうに御宿所も可然也、まつ進之候のミ也、進士殿 岩堀殿 横瀬殿 初井殿 「堤殿 蟻川殿 沼田殿 坪和殿」大草殿 有元殿

かやうの人々へハ進之候也、又ハ御宿所共さうにある「事もあり、惣て番方ハ、人数おほき事、何も／＼其家々の」きせい、われも／＼と被存事共也、更いつれを上、いつれを」下と可申事ニあらず、雖然、時にあたり宿老など賞翫」の事もあり、又もと／＼より参会の時ちとしやうくわんあり、」来れるかた／＼見及分あら／＼注之

也、

一 御状と書ハ下手へ返事の詞也、

一 芳札・珍札などハ御状の上也、

一 貴札ハ芳札などの上も、御札、貴札同之、

一 尊札ハ貴札の上也、

一 御書と書ハ尊札の上也、

一 御懇札とも御懇書共書事ハねん比なり、ふみの「返事などに如此もしせんあり、これハ貴札・尊札に」わたりたる程のことはなり、

——猶期面候、恐々謹言、

正月 日

名乗判

飯尾近江守殿御返報

朱印

一番頭之事

一番 細川左京亮入道殿

二々 桃井治部少輔殿

三々 上野民部太輔殿

四々 畠山中務少輔殿

五々 大館陸奥守殿

むつのかミ殿への書状の趣ハ、まへにしるす、その外「番頭へ

ハ、いつれも恐々謹言と書て、御宿所と」書へし、

一 官途等類事武家方、

一 (朱書)

左衛門督 右衛門督 左兵衛督 右兵衛督

大かい同程の趣也、御用如此、

二(朱書)

修理大夫 左京大夫 右京大夫 大膳大夫 「左衛門佐 右衛門佐
左兵衛佐 右兵衛佐」 左馬頭 右馬頭 同程の御用也、

三(朱書)

彈正少弼 中務太輔^{少輔} 式部太輔^{少輔} 治部太輔^{少輔} 「民部太輔^{少輔}
兵部太輔^{少輔} 刑部太輔^{少輔} 大藏太輔^{少輔}」 宮内太輔^{少輔} 兵庫
頭 掃部頭 図書頭 「縫殿頭 玄蕃頭 雅樂頭 大炊頭」 主
計頭 木工頭 左馬助 右馬助
同程の御用也、

四(朱書)

采女正 造酒正 隼人正 市正 「主水正 正親正 内膳正、同程
の事也、

五(朱書)

兵庫助^允 掃部助^允 縫殿助^允 図書助^允 「雅樂助^允 大炊助^允 玄
蕃助^允 主計助^允」 木工助^允 左馬允 右馬允 左衛門尉 「右衛
門尉 左兵衛尉 右兵衛尉 修理亮^進」 左京進^亮 右京進^亮 大膳
亮^進 中務丞 「式部丞 治部丞 民部丞 兵部丞」 刑部丞 大
藏丞 宮内丞 彈正忠 「采女佐 正親佐 隼人佐 造酒佐」 主
水佐 内膳佐 市佐 判官 「藏人 將監 勘解由 帶刀
同程の趣也

九郎殿

常興判

従番方対諸家書札法様之事、但於「番中も勝劣在之条、不可為一
篇、雖然、以」大方之趣令注申者也、

一青蓮院殿・三宝院殿・聖護院殿・若王子等之事、「於法中如此御門
跡への儀、不可為直札、出世・坊官又ハ」待法師、何にても其人に

対之可為書狀、次若王子事、「是ハ聖護院御門下の人也、非御門跡
類、仍為直札」若王子殿人々御中、又ハ御坊中など可在之、当「官
僧正ならハ、恐惶謹言可然也、

一撰家・清花、其外勸修寺殿・広橋家・冷泉家・「伯家・日野殿・飛
鳥井家・烏丸家・阿野家・坊城家・」中御門家・藤兵衛督家の事、
撰家・清花の御事ハ、不可為「直札、其内の殿上人にても、諸大夫
にても、又ハ侍にても、」其方への可為書狀也、次日野殿儀ハ、公
方様依御外戚、「以世被賞翫申之間、清花などの心得故実也云々、
其外」勸修寺家以下の事ハ、直札にて人々御中と被調之「方も可有
之、又進覽など、書給ふ人もあるへし、又清花」などの如く直札な
らず、宛所に被認輩も可有之也、「いづれも恐惶謹言可然、又ハ其
時の官位によるへし、」大納言・中納言など、何も公卿の位へハ一
かと礼儀在之事也、「又一向いまた五位・六位の殿上人の位たらハ、
其用捨」分別在之、將又冷泉家・飛鳥井殿両家の事ハ、哥・鞠の「
為師範之条、取分賞翫被申儀も古今故実也、

一吉良殿・石橋殿・洪川殿事、直札ならず宛所可然、「但人によりて、
直札にて人々御中、又ハ進覽など、被調之」儀も可有之、此うちに
て吉良殿御事ハ、公儀にいたり「ても別而御賞翫在之趣也、仍其用
捨可有之、

一女中方、大上臈・小上臈・中臈・御下・御美女事、大上臈・「小上
臈へハ、直札にてハなくて、めしつかわれ候女房達への」あて所に
て、まいる申給へ可然、女中かたへの書札も、名のりを「書てうら
かき勿論也、名のり書やう、女中かたへハ、上の」一字をかなに、
下の一字をまにに書事也、法鉢よりハ、「上の字まにに、下の一字
をかなに書事なり、法鉢よりハ、」上の字まにに、下の字かななる

へし、中臈への事、」大かい小上臈同前に可調之、然共直札の時ハ、
「假令」春日殿へ被遣候書状、かすか殿御局まいる申給へにて」ある
へし、又里の名を、つとの、御局へまいる申給へともある」へし、
さとの名をかく事ハ、慥其御名をかく事ハ少」賞翫の儀と云々、次
御下への事、假令はりまとのへの」書状ならハ、はりま殿御方へ申
給へとあるへし、御下の」事ハ、中臈へもうちつ、く事あり、まい
る申給へとも」あるへし、人によりてまいるへしとも、まいるとハ
かりにても被調之」かたも可有之也、次御美女の事、其内にも、
御上ひてうと」申ハ、御しもに打つ、く事あり、しら川とのへの書
状ならハ、」しら川との、御局とも書たまふへきなり、そうして」
つほねといへる事、女中方上下によらず申詞也云々、」然ニ御ひて
うへハ、局といふ字、御下知などにハ不認之由、」右筆方申之旨
内々及承候、然共御下知の事ハ、相」かハるへき否之段、たしかに
無覚悟、又人によりてまいると」ハかり書給ふも可在之、まいると
ハかりある事ハ、まいるへしと」あるよりハ、少下手への書やうと
承候也、又まいるへしよりハ、」まいるとはかり在之事ハ、少ハう
へたるよし申かたも」ありし、然共まいるへしよりハ、下たるよし
各申されし也、」又人によりまいり候へく候とはかりも可在之、ま
いり候へく候ハいち」下手のかきやうなり、

一長老・西堂・首座・書記・藏主・侍者等之事、長老」ハ其寺の寺号
を書いて、侍者御中とも、侍者禪師」など、も有へし、恐惶敬白とも、
又恐惶謹言とも可」有之、西堂も大方同前、但長老よりハかろし、
床下・」足下なともあるへし、床下書に玉床下、又ハ尊床下など」
書事、少うやまり心也、参と云一字を書くわへ」らるへき段も勿論
也、書記・藏主・侍者への事ハ、床下・」足下なとたるへし、そう

して出家の上には、俗生ハさたに」不及事とも申ならハしたる段勿
論たりといへとも、」かやうの藏主・侍者などのうへにてハ、こと
に俗性に」より賞翫申事、古今其例在之、出家とハ申なから、」猿
楽・田楽子などハ、立合ましきよし、先年於相国寺」も、一山内々
申さる事のよし承及候也、又侍者・藏主の」御位たりといへとも、
万松軒などの御事、其御身竹園」御儀にても、しかも公方様御連枝
御分たる間、諸一段」賞翫被申事勿論也、かやうの御かたへ書札の
事ハ、直札」にてハなくて、祇候の僧への書状たるへし、寺中法事
の時、」次第をおひて令給事ハ、出家のうへにての通例なり、」書札
にいたりてハ、右に如申たるへき也、

一三職事、直札にてハなくて、内衆へ宛所たるへし、但於」番中も、
人により直札にて被申事も可在之、大略ハ」何もあて所同前なるへ
し、あて所にかく時、をくの書やう、」此旨可然様可預御披露とも、
又ハ宜得御意とも、又可被」申入など、もかきとむる事、常の儀也、
一山名方・一色方・讃州・能登守護などハ、大かい同ほと」調やう
たるへし、是も大かいハ三職同前也、然共人により」直札たるへき
段、三職よりハあまた可在之歟、或ハ人々」御中、或ハ謹上なども
可有之、

一赤松方・土岐方・淡路守方・京極方・武田方・大内方・」富樫方・
大友方・菊地方等之事、直札にて人々御中、」又ハ進覧・謹上など
も勿論也、但又直札ならす宛所に」被調之儀も可在之、惣別さし渡
りたる法様ならねとも、」或ハ其人の知行分の国守護、又ハ別而子
細ありて」令賞翫、あて所などに書給ふも、古今のならひなり、」
又ハ故実共申ならハしたる事也、

一仁木方・上杉方、其外の外様衆への事、仁木殿事ハ其」かとある間、

人々御中、又ハ進覧なともあるへし、その「たくひ外様衆の内にても可在之、其余の方々事ハ、」大略御宿所となるへし、

一御供衆中への事、様躰同前、御供衆にも、国知行候」方もあまた在之、淡州も代々御供衆也、将又右典厩」事ハ、別而御用之趣也、伊勢守方より右馬頭殿への「書札ハ、直札にてハ無之、あて所にか、れたる儀もありし、」以之可有御勘弁候哉、

一申次への事、大略外様衆可為同前、

一右筆方への事、大かい御宿所書也、進之候と被調之」方も在之、

一同朋衆事、大方同前、

一御末男衆事、進之候、又御宿所も可在之哉、

一在富卿・有春朝臣事、御宿所など勿論也、

一上池院・二位法印事、大かい同前、

一善法寺・松梅院事、御坊中など被調事勿論候哉、」但善法寺事ハ、むかし御外跡かた／＼、別而御賞翫の「趣也、御相伴衆にも参勤候、又息女祇候へは、小」上臈分にめしつかわれ候、法住院殿様御代にハ、大上臈」分に候つる、如此之間、例式社家方よりハそのかと候、」若王子など同前に可有之哉、善法寺覚悟ハ、」猶以其よりハ可為上之様被申候つる、然共官位段、」若王子ハ大僧正にも被成事候条、如此也、

一三職之内年寄衆への事、進之候にても可有之、」然共多分御宿所と被調候、又ハ人にもよるへく候、

一同馬廻衆事、大かい同前、

一評定衆事、外様衆同前、惣別評定衆と申候ハ、」摂津・二階堂・波多野・町野等也、何も外様衆分也、

右条々、雖斟酌、不少御懇望依難去、令書」進之候、定相違之儀

可有之哉、一切不可及外見者也、

天文二年七月 日

常興在判

小田太郎殿

一巢鶴三連致進上候、可然之様御披露所仰候、」恐々謹言、

六月十一日

美濃守頼貞

謹上 伊勢守殿

物により申次まで謹上書にて、以内々進上候事も」在之、年始、又八朔の外如此の鷹、又ハ馬風情の時ハ、」謹上書不苦候、

一巢鶴三連御進上之旨、則致披露候、尤御自愛」不斜候、恐々謹言、

六月十四日

伊勢守貞宗

謹上 土岐美濃守殿

謹上書の時ハ返事も如此、披露状の返事此分也、」馬・鷹などハ、御自愛など調申也、公儀の外ハ祝着と」可有之、

一御鷹二白・御馬一正^{黒毛}致進上之候、此等之趣、宜」預御披露候、恐々謹言、

四月三日

^{上杉也}
民部太輔政辰

謹上 伊勢守殿

謹上書ハ何も如此也、謹上書ニ恐惶謹言とハ」あるまじきなり、

一三職并敬方へ付状の調様にハ、就次郎殿御元服御礼儀、御太刀一腰^{友成}・馬」一正^{口口}令進覧之候、此等之旨、宜預披露候、恐々謹言、

四月十八日

貞宗

遊佐河内守殿

一三職へ伊勢守方よりハ如此太刀計に御字有、馬にハ」御字無之候、

仍諸家其家々貴人へ可捧書状にハ如此也、

一 此旨可有披露候 此旨可被達貴聞候

此旨披露所仰候 此旨宜令披露給候

此旨可得御意候 此旨宜預披露候、此文言「相計て可調也、御披

露とも、事によりて可在之、

一 付状に恐惶と書事、無其理、雖然、其宛所の人「正得恐惶と書程の

位ならハ、さも可有也、申次の」事ハ、我と同輩なれ共、貴人へ可

捧書状の間、恐惶と可「書と覺悟候事誤也、付状ニ恐惶ハ頗直札也、

就之」子細あり、又高下の位可在之、表御札計也宜令披露」給候

恐々謹言なとハ、三職よりおとりたる方へ認候也、

一 事、此旨可得貴意候、恐惶謹言、

正月廿八日

霜台尊公參人々御中

如此唐名を書て人々御中と調候事、一段の賞翫也、」上様ハ何も可

得御意候、又ハ可得尊意候、又可得貴意候、」又ハ可得尊慮候など

書事、定レル法也、

一 如此名字を略して官計を書事、賞翫之儀也、

左衛門督佐殿 足下人々御中

如此も可書、一段の賞翫之付状にも可准歟、主君同名、」又ハ主君

の兄弟へハ、雖可為付状、事により直札も「捧候者、如此もあるへ

し、

一 歳末・歳暮・左暦、何も同事也、又嘉例の儀」をは、文言にも載候

事可然候、

一 惣領よりハ、其同名中へハ大略進之候也、乍去又ハ人に「よるへく

候、此上を相計可書事也、

一 父の方より其子の方へも進之候也、又打付書ニも可「在之、

一 何かし殿 何かし殿 何かし殿

進之候

進之候

進之候

何如此可心得、草字の恐々謹言、我名をも墨うすに「草字也、

一 進之候と書程の方へ、返札にも進之候と書也、御報・」御返報など

不可書之、

一 内者に可遣状の事、

為年始之礼儀、太刀一腰・馬一疋到来、喜悅候、仍「太刀一振遣之

候也、謹言、書之 謹言

正月廿五日

貞宗

饗庭大炊助殿

野田掃部助殿

内者に可遣状ハ草字たるへし、候と云字をあまたハ「不書候、二三

にハ不通候、何も草字たるへし、饗庭」大炊助とのへ、ともあるへ

し、

一 聖家へ書札の事、何も敬儀可在之、

上 松林院 御同宿御中 墨厚

中 花台院 御同宿中 薄如常

下 円頓院 御坊中

実相院 童子御中

如此童子御中と書ハ、一段の賞翫也、又院号など殿「文字同前也、

然者院号・寺号ニ殿文字ハあるましき」事ながら、門跡などへハ御

内書ニも殿文字在之、」聖家へハ依人躰殿文字可在之、禪家へハ殿

文字」あるましき也、

一 東国の面々、今川 蘆名 伊達 南部 最上「秋田 大法寺 湊、

此等ハ大略同位也、但南部事ハ、一度奥州探題を存知之間、少賞

翫也、然共今ハ」探題を不存知之、又探題ヘハ別而賞翫也、付状也、」氏家殿とあるへし、

一北国衆の事、何も直参の外ハ国人ニ可相当なり、」直参の衆ハ五ヶ番ニ可准拠也、

一佐渡衆の事、何も御家人也、一国皆以本間と名乗也、」彼国ハ前細川殿分国、その後高存知也、

一諸国々人并御家人、或ハ直参の衆、或ハ国大名以下、」近代書札相替事共多也、在国の面々、上古に違高」官の衆多以在之、可依官位歟否の事、官途昇位」よるへし、御前の諸役にしたかふへき也、

能々可有分別、」三職之御衆、更高官の衆無之、
宛所に付て心得共事
一梅窓下 西窓下 雪窓下 吟窓下 書窓下

時節ニ随て常にも可書也、殊更隱遁の衆も可書、」指非賞翫之、
一律家・浄土宗への書札大概同事也、

侍者御中・大徳御中共可在之、何も可為敬儀、
戒光寺 侍者御中

一時宗への書札の事、

何——事、宜得御意候、恐惶謹言、

二月廿三日 名乗

遊行 近習御中

他阿上人御時衆御中共 西堂の准拠にて候、若者もそれにしたかひ候

進上 藤沢上人 一寮

遊行へハ、いかにも敬儀可在之、他阿聖人共あるへし、」上人の事、聖人共御座候間、遊行に限りたる事」なるへし、遊行への文言ニ、無他事候など、申事可嫌之、」誠恐謹言・誠惶謹言共可在之、

四条道場事也
金蓮寺 当番御中

浄阿上人 御時衆御中

金蓮寺とハ、四条の上人の事也、浄阿弥陀仏と代々」申也、是も一段の賞翫たるへし、時衆の内ニも上人にあら」さる方へハ、

西阿弥陀仏 玉床下

蓮阿 床下など、可在之

一上所の事、

誠惶誠恐敬白 誠惶謹言 誠恐謹言 一恐惶謹言 恐々謹言 謹言
此次第、能々可有分別、墨の厚薄ニも可依也、謹言、」是を長く引程さかりたるへし、又恐惶頓首など賞翫也、

一床下 座下 座右 此三八進之候よりハ勝候、」又御宿所よりハさかり候、出家中へも位によりて可書也、」玉床下ハ又賞翫也、但指て非賞翫候、机下ハ少劣候、」足下ハ又賞翫也、僧俗共此分也、唐ニも賞翫之由申之、」玉案下、是又賞翫也、出家中へも可用之、

一讓状の事、

讓与

右——一跡之事、所令讓与也、所々領知并」職等可令存知之者也、仍讓与状如件、

年号月日

某殿子のかたへハ名字ハか、さる也、

一闕字事 神社 仏名 勅定 勅語 綸旨 綸言 一宣旨 公方 上意 御内書 御成 大方此分也、

一書切て墨をつくへからさる也、人の名の内 寺号 一所の名 御太刀 御馬 大方此分也、

一山門本院執行代 御中 山門西谷執行代御中

山門楞嚴院別当代御中 西塔閑籠衆徒御中

一園城寺衆徒御中

一根來寺満山衆徒御中

一金剛峯寺衆徒御中

一東大寺衆徒御中 興福寺同前

一豊原寺満山衆徒御中

一平泉寺満山衆徒御中

一山たる所への惣中へ書札、如此在之、

一官途の時、口 宣申狀調事、

申 大和守

宮内太輔

晴完杉原を二にをりて、中程に申と書て如此調也

申 宮内太輔

大和

晴完無官の人ハ、かたに名字計可書也

一頸之注文書事、

去月廿九日午刻於原田口討捕頸注文

頸一 名字官

被太刀疵二ヶ所
某討捕之

頸一 名字官

被鐘太刀疵二ヶ所
名字官討捕之

頸一 名字官

被太刀疵五ヶ所鐘疵二ヶ所
名字官討捕之

頸一 名字官

何かし中間次郎五郎討捕之

首一 名字不知共

何かし被官三郎次郎討捕之

以上

頸の注文調やう、此方此分候、ちうもんニハ、頸の次第ニ書也、

とりての位にハよるへからず、

一御内書と御判御教書差別の事、御内書ハ、「備中引合一重かきて、

常の書狀の如し、御判の御教書ハ、」杉原一枚に書て不封表ヲ、只

押折て墨を不引、御内書ハ」月日計也、御教書ハ年号月日をつ、け

て書也、

一已前発向京都也、急馳参致忠節者、本知行之」地不可有相違之上、

有功者、可抽賞之狀如件、

観応三年三月八日

宝篋院殿
御判

中興三郎とのへ

半切料帋也、縁もちいさき也、惣別杉原鳥子うすやうに調之、

一上の墨を引事のなきハ敬儀也、尊宿へハ被成御内書ニ」恐惶と被遊

之間、表ニ引墨無之、

建長寺方丈 義一

一是ハ鎌倉殿へ被遣御書也、是にハ墨を引、

左兵衛督殿 義一

うすやう半切、奥の吉良殿へ也、御書少あけて書、」殿の字如此、

太刀一腰金・鎧一領白糸・馬二疋河原毛褥給之、悦入候、」仍太刀一

振金糸・鎧一領淺黄糸・香合一・段子」三端・食籠一・盆三枚進狀如

件、

八月十二日

左兵衛督殿

一御進上白布廿端・蠟燭五百挺、即致披露候、」仍御書并段子一端・

盆一枚被遣候、目出候、兼又」蠟燭百挺拝領候、恐悦候、絵一幅・

小盆一枚進之、」此由可得御意候、恐々敬白、

二月十五日

貞国

遊行上人

御返報

一 仍以執達如件 恐々謹言よりハ少勝也

至極敬人ニ書之 言上如件

恐惶之位人ニ如此 上啓如件

執啓如件 同

誠恐頓首謹言

至極敬人ニ書之 誠恐謹言

恐惶謹言 敬人の礼也

某誠恐謹言 某字ハ尚貴人敬人ニ加之

某恐惶謹言

狀如件 謹言同程也

某謹言

不具謹言

不宣謹言

恐々謹言 等輩書之

如此礼節ともあり、人の尊卑ニよって書事也

一 法中へハ謹上書ハ不見及也、又入道してハ謹上書」は勿論也、

一 過書之事、

若州下向人六十人 荷物・輿式丁・馬十疋、諸関「渡無其煩可勘過之

由、所被仰下也、仍下知如件、

天文十四年五月三日

沙 弥判

前丹後守平朝臣判

如此下知と書之、名判を日の下ニハ不書して、輿ニ書之、」一行ニしてのくる也、

從四位下行大和守源朝臣晴完判 朱印

大和家蔵書三

（表紙表題）「大和家蔵書 三」

中表紙

（付箋）「大館伊予守尚氏入道常興筆記 三」

子息大館隆興守晴光証判

（朱印）「明治十四年改」

条々問答

一 公方様御成、又ハ撰家・清花入御時、立砂有之歟事、

尤立砂あるへき事勿論也、

一 立砂之事、三職其外大名たれ／＼程の人御入候時、同「立すなあるかの事、

三職其外大名などの人々御入候時、同立砂是又勿論也、」又ハ其家作りにしたかふ事にても有之間、縦大名」などの人にてなく共、可有来臨に立砂事勿論、家作三」したかふと申儀ハ、中門車よせのある所にハ、必中もん」のまへに立砂有之、ちうもんとハ常に輿なとよせて」女中のり給ふ所の事たり、又中門車よせのなき」家作にも、こしをさしよせ候へき座敷の、ゑんのまへに」立砂をおく事もあり、

一 諸奉公衆小笠原などへの書状調様并参会帰候時可」被送申様牀之事、書札の事ハ、細々書状にハ或は御宿所、或ハ進覧之候、」又ハ床下・玉床下なども、その人々の高下によるへし、」御番方にもせうれつある事也、惣別武家方ハ、」謹上書肝要といへり、賞翫のかたへも、等輩へも」下手へも、をしわたりての事やうなるへし、うやまう」かたへハ、いかにもしんに書也、等輩へハ如常、又下

手へハ」謹上、此趣にいかにもさうに書給ふべきこと也、随而」

小笠原事、信濃国の守護は国もちたる間、大名」分也、御番かたに祇候の小笠原ハ、弓馬の御師範たる」上者、諸奉公中にて少かとある事勿論也、其意得を」なされて、書札をも可被調事可然云々、次参会帰候時」可被送申様躰之事、大かいゑんまで被送申也、時宜三」よりゑんにて二度被送申も故実云々、

一三職并御相伴大名・国持・御供衆・外様衆・奉行衆・御末」の衆已下御私宅へ来入之時、いつくまで被出合申内へ」賞し可被申哉、又上意御使などの時ハ、常にハ相かハるべき哉」之事、

三職御事ハ、一段被賞翫申事也、仍庭上へ被出向申て」可被賞入申、ゑんより五六けん・十けん計も出向ひ、御申」あるべき事可然云々、先年赤松殿へ細川龍安寺殿」を招請被申猿樂ありし、其時如此庭上へ出向被賞入」申候き、か様の趣を以可有御勘弁、将又御相伴衆の大名」も、大かい同事ながら用捨勿論、か様のかた／＼ハ、ゑんへ出」向ひ、賞し入被申へし、ゑんにても、少とをくにて出合被申」へし、かやうの段、其所の様躰ニよるべき事也、何も此」御意得をもつて用捨可有之、次国持の事、大かいおなし事」なから、少しかろし、又御供衆事、細川典厩ハ少其かと」有之、又御供衆中にも、国所持のかたも少々有之、大かた」同前、其外ハ不及被出向、座敷にての御式儀たるへし、」かやうの事も地はんの御意得にて、其時の趣により、とも」かくも可有之云々、次外様衆、大かい御供衆同前、又奉行衆・」御末衆以下の事ハ、被出向のさたに不及事也、将又上意」御使などの時ハ、太相かハるへし、それも又仁躰により、ちう／＼」有之、御供衆中にて、御紋せられ候方御使ならハ、庭上」へ出むかハれて可被賞入申、

御紋せられさる方ならハ、ゑんへ」出むかハれて可然云々、其外御番方衆并奉行衆など、為」御使来入たらハ被出向ニ不及、随而被送申候次第之事、常の」時ゑんまで被送候人爲御使者、庭上まで可有御送、又庭上」まで被送申方爲御使者、庭上にて二度御送たるへし」云々、又ゑんまでも、又ハ座敷の中にて、被送に不及候」輩爲御使ハ、次の座敷までにて、ゑんまでにて御送ある」へし、一重之賞翫の趣、公儀をたつとミ被申によりて也、」かやうの儀ハ、様躰を覚悟ありて、当座の時宜よきやうに」用捨くるしからすといへり、

一仁躰により先座敷へ被賞申、其後被召出、御礼なと被申儀も」有之哉之事、

尤これ故実、もと／＼よりの儀也、可然云々、

一御帰候時いつくまで可被送申哉事、

三職ハ、庭上にて二度可被送申、其外諸大名ハ、庭上にて」可為一度、御供衆ハ、ゑんまで少ふか／＼と可被送申、ゑんにても」二度も可有之、又ハ御供衆中にて、細川典厩、其外国」所持之方なとハ、庭上までも可有之、かやうの段も時の」様躰により用捨もあるへし、将又番方の衆ハ、何もゑん」までそと被送申也、奉行衆同前、但奉行衆中にて」引付の衆御免候奉行ハ、ゑんまで御送候、評定衆に」被召加候奉行も少々有之、猶以其かとある事也、然者評定」衆・引付衆ハ、其衆中にての賞翫云々、此両条に不被加」召候奉行ハ、被送候ニ不及の由承候き、但時宜にもよるへし、

一扇をかけにおき参上事、御相伴之時も可為其分歟之事、惣別、扇をかけにをきて御前へ参上事、更に得其意事」と、もと

くより申あつかはれ候儀也、扇ハ凡尺の心得にて候、「然間公家かたにハ、手にもちて被参て御礼被申候、官外記」の輩などハ、こしにさしたる扇を、御前にてぬき出して、「手にもちて御礼申候し、然共武家方事、扇をかけに」置いて御前へ被参候儀、近年儀にあらず、もとくより如此」あり来候間、於于今其分也、公家方にて、細々被祇候」候ハ、少々扇をかけにをかれ候方も有之、心へさる事とハ申」なから如此、然間御相伴之時も、扇をかけにおかれ候段其分也、「又ハこしにさして御相伴に被参候、大名も御入候つる、」慈照院殿様御代、細川讃州などハこしに扇をさして被参候」を見及候き、然時ハ、こしにさしなから可有参勤事、自由」などのかたへハならさる儀と存候、殊讃州ハ功者の御事候、

一三職并大名其外へ御礼候時、扇被持候歟いか、の事、

公方様御前へ之様躰ハ、右ニ如申也、私宅候にての事は、「いかにも扇を被持て、自他御礼勿論也、又手に不被持して、「御礼ある段も其分也、何様もくるしからす云々、惣しては、「手に可被持事、大名などハ猶可然也、

一撰家・清花入御之時、何も可為四方歟事、

何もく可為四方也、但撰・清の外たり共、其時の官大臣」たらハ、同四方たるへし、撰・清の外の公家、大中納言のかた」くハ三方也、

一御門跡并禅家なども、撰家・清花の御家ならハ可為四方歟」之事、

御門跡方之事、其門跡の位によるへし、或ハ公方様」御連枝、或撰家などの御息なり御つけ候青蓮院殿・」聖護院殿など、申たくひの御事ハ、四方勿論也、いかに撰家・」清花御息にて候共、くらゐたか、らぬ脇門跡などにならせ」給ひたらハ、四方にてハあ

るましき御事也、それくの」門跡にしたかふ成へし、将又撰家事ハ、面たちてハ撰家」などの御息、縦又公方様御連枝にて御さ候共、長老など同座」候時ハ、四方などの御儀に不及事也、内々の一献などの時ハ、四方」勿論也、大名方御私宅などへ、かやうの御かたく入御候ハ、尤」四方たるへし、

一冷泉殿・飛鳥井殿等かたく来入候時、可為三方歟、足付以下」御盃かくにても不苦歟之事、

此かたく三方勿論也、足付にてハあるへからず、但或者」和哥会、或者鞠などの会に、諸大名など私宅へ来入候に、「武家方同ことく、足付などの事も毎々在之、此段ハ」略儀にてこそ候へ、法様を申候て三方たるへし、次盃をかくに」居事、さやうの儀もなきにハあらず、但かやうの公家」参会候ハ、盃ハ三方猶可然云々、又時宜にもよるへし、

一如此御客人之時、御湯つけなど木具・土器、但供御計ぬり物」くるしからす候歟之事、

そうしての法様ハ、如此之時ハ、くこをも五と入などの」かハラけにあるへき事勿論也、乍去ゆつけ供御計をハ」ぬり物に調事、毎々諸家其分たり、殿中などの御一こん」の時ハ、曾以無其儀、御湯つけも五と入也、

一御膳ハ御座敷仁躰によりあけ被申時、二三四五までも本せんに」くまる、歟の事、

此儀、公方様にて三職已下御相伴之時、御相伴膳をくまれ」候てあけられ候、然二ことくくむやうにハ無之、如形」くミよき物を本膳にくみてをかれ候、惣別公方様へ御相伴」の供御、又ハ御ゆつけにても、御膳ハ五までも参候へハ、御そうはん」衆ハ三

のせんまで也、將又諸家参会之時ハ、かやうにくまる、^二不及、被官衆など相伴仕候輩ハ、くミテ可然也、又ハ時宜^一にもよるへし、

一御盃三と入あいの物五と入、初より何まいるかの事、

初献にハ三と入まいりて、^二こんめよりあいの物まいる也、五と入^一まいる事ハさうなふ無之、下^二諸家参会之時ハ、やかて^一五こんめなとより、五と入を被出事毎々儀也、公方様一献^一にハ、御盃の台などに、五といりを被居事ハ勿論、献々にハ、「うちまかせてハ無其儀、又初こんより」あいの物始終まいる事も勿論也、自然諸奉公人々ニ御通被下^一時ハ、五と入にて被下之儀も勿論、其段ハ又各別儀也、

一曆々の御客人之時も、観世大夫・金春・桂已下同御座敷^一たる敷の事、

さやうの時も、観世大夫・今春など同座敷也、いちすえ座に^一在之、中酒の時、相伴の被官衆などまで酌とる人、めい^二に^一盃をてうしに取そへて、其まへ^二へもちめくり候、然者^一猿楽・田楽などにハ、さやうにもちめくり候ハて、例式めし出し^一などのことく、酌とる輩一所に候て、一人つ、まかり出て、「中酒を給候、いち後に罷出候、猿楽盃をとりて罷立候也、」次桂事、無別儀とハ存候へ共、さやうのさしきにての相伴^一不及見候也、何も猿楽などのことく盃儀不可有之、細々の^一様躰其分也、

一御成之時、つしかためも様の事、

むかしハ、はれの御成之時、諸大名御路の町々を相かためらる、^一各家々のまくをうつ也、はうもちも有之、各其方の^一諸侍、小太刀をもちて敷皮にて在之、主人ハ御成之砌に^一まくをあけて

罷出、尊居あり、又私宅へ御成を被申ての^一つしかための事ハ、其近辺可然在所見合て、まくをも^一うちて可有之、ことなる儀なし、

一撰家・清花、其外納言以下公家衆御礼之次第、自然来臨^一之時ハ、

いか様に出あひ可被扱申哉、同御帰之時、いか程可被罷出^一哉之事、撰家御事ハ、一段御儀、公方様御連枝などの御心得たる^一へき哉、惣別の御位ハ、猶以不及申御事也、清花ハおなし^一事なから、撰家よりハかろし、次例式の納言以下之事ハ、^一其時の官位ニしかひて軽重あるへし、大・中納言ハ^一一段儀也、又四位・五位の殿上人ハかろし、撰家などの御出と^一申事ハ、さうなう無之事也、然共若御出之事^一あらハ、門外へも被出向申て、可被賞申也、清花も同事^一なから、三職などの時のことく可被出向申、例式の納言ハ、^一ゑんまで出向ひ可被申、又ハまつ座敷へ賞し入被申て、^一已後亭主被罷出、礼など可有之段、尤可然、併故実^一如此云々、將又御帰之時ハ、撰家・清花ハ門外まで被送申^一へし、但同事なから、清花ハ門外之様躰あさく可有之、^一次大・中納言以下堂上の公家へハ、庭上まで送被申て^一可然云々、

一聖道家并八幡田中・善法寺、北野松梅院、吉田神主、^一賀茂社務等、いか程可被送申哉之事、同書札等被調様^一、^一うら書以下の事、

聖道家ニいたりてハ、先条にも申ことく、青蓮院^一御門跡などの高家のたくひ、あまた御入候、さやうの御門跡ハ、^一撰家・清花同前之趣也、或は脇門跡、或ハ出世の人々の^一事ハ、殿上人などほととの儀云々、出世又ハ坊官ハ、諸奉公方^一など大かい同様躰たるへし、將又社家方・八幡田中^一善法寺事、脇門跡之趣凡同前、其うちに善法寺事ハ、^一鹿苑院殿様御母儀、八幡善法寺通清息女

たるに」よりて、別而御執しありて、一献などに祇候之時は、「御相伴衆にめしくハへられ、公家のれつに着座也、わか」坊へ御成を申て、三職御相伴之時ハ、膳なども大名同」ことくに有之、次田中事も、其かとありといへ共、御相伴」などにも不参候間、善法寺ニ少ハおとりたる分たり、又」北野松梅院は、毎年北野御経に彼坊へ御成雖有之、一献之御相伴にも不参也、諸奉公方大かい同程之事たり、「善法寺を御送りハ庭上あさく」と可有之、田中ハゑん迄」ふかくと可有之、次吉田神主・賀茂社務等之事、「吉田之社家ハ、かやうの諸社之中にてハ一かと有之由、」申つたへたる事也、むかしハ称号を室町と申たるを、「鹿苑院殿御代御所望有之て、至于今公方様御称号」室町殿と申たる儀也、侍従と申官は、かろき官たりと」いへとも、公家堂上のかた被任候初官にて、地下諸人ニハ」不任之、然を吉田家にハ至于今も任侍従之段勿論、」仍可被送事、賀茂社務以下此類、ゑんまてたるへし、」其内に吉田ハ一かと有之間にても、少ふかくと礼儀たるへし、又ハ庭上までも也、同事ながら、二位などに叙」たる儀たらハ、庭上までも可有之、又ハ時宜ニもよるへし、」次書札事、か様の輩へハ御宿所、又ハ進之候・進覽なども」一向無之、只打つけ書も可然、其時ハ上所の書様肝要、」吉田など二位・三位などにて候者、上所恐惶謹言たる」へき也、大かた法様共雖有之、武家方ニハ、さ様之儀に」不立入、被相調之のミ也、次うら書事、公家方ニハ、上下」によらず、うら書をせさるのミ也、然間こなたよりの書札、」かやうのかたへハ、うら書無之も可然也、一五山長老、其外諸寺東堂・西堂・平僧、いかやうに可」被送申哉、同書札うら書等之事、

長老ハ、庭上までふかくと可被送申之、西堂ハ、すこし」かくあるへし、ゑんにて二度なども可有之、平僧は」ゑんまて也、但法様ハ如此たりといへ共、或ハ撰家、或は」公方様御連枝などにて御入あらハ、いかにも庭上まで可然也、」けつくハ門外迄も可被召出、法の外の故実とハかやうの儀候云々、」将又縦雖為平僧、一寺相統住寺などたらハ、」礼之趣少其かとありて可被扱事可然也、次書札」うら書事ハ、ありてもなくとも不苦、但かやうの僧かたへハ、」賞翫あり度方へハうら書可然、そうしてうら書といふ事ハ、」われとわか称号を書あらハす事ハ自由之由、公家方ニハ」被申之、古にうら書無之、武家方ニハさやうの不及分別、」調つけたる様牀也、

一撰家・清花より御使等、如何様に扱送可被申敷之事、

御使之仁牀にもよるへし、殿上人を御使に被遣候ハ、庭上」まで可被送申、被出向て賞し被申にハ不可及也、又諸大夫」并侍なとを御使に被遣候ハ、ゑんまて可被送之、

一富樫・波多野・撰津・二階堂已下書札并参会之時」礼儀等之事、

富樫事ハ、加賀国守護たる間、先条に申諸大名しゆ心」勿論たり、波多野・撰津・二階堂・町野事ハ、むかしより評定」衆と被号て、公事辺などの儀奉行衆、又如此之人数にも」意見を被尋下事有之、町野と申て今一人此類有之、」此四人内にてハ、撰津もつはらの儀也、四人何も外様衆分也、」此人数之事、例式外様衆にハかハりて所役とも在之、撰津ハ」神宮頭人・地方頭人、至当時も此分、町野ハ問注所と号」して、これも所役の儀也、波多野・二階堂ハ当時無所役」政所頭人と申事、伊勢守と二階堂打かへに令存知之、」近代ハ伊勢守政所頭人、於于今其分也、仍外様衆中」にて

も、少其かとありて、礼儀可有之事可然云々、次書札事、「謹上書可然也、又ハ如常も可有之、

一賞翫の人々・等輩の人・下手の人、送可被申様之事、

一段賞翫のかたをは、庭上まで可被送申、等輩の人をハ、「ゑんまで、下手の輩をハ、座敷のうち次間までも、又ハ」被送候に不及も可有之、何も時宜にもよるへし、

一寢殿と云事、其亭主による歟之事

下／＼の儀、さ様之家作りにてハあるへからす云々、然といへ共、「御成を申などの方ハしんでん有之、山名方之内垣屋宿所」は、近代までも如形相のこりて見及し事也、然^ニむかし「御成を申たる由にて、寢殿作り趣にてありし、かふき」門など、申事も御成を申ほとの人々にハ可有之云々、「彼かきやもかふき門にてありし也、

性安所望

条々問答

御ふくの御事

一御若年御官大納言までの御儀ハ、或は常の御染小袖、「或はおりすちなとをもめされ候事勿論也、

一御官大臣より已後の御事ハ、常の御そめ小袖・おりすち」などハめされす、或はつむき、或ハほけん、又ハあや平絹など、「地をあさき、其外き茶など、何色にてもそめさせられて、「御紋をとこ／＼に紫・もゑき・赤ねなとませ合て」染たるをめされ候、御うらハこき紫也、織物白あやなと」御もちい、もつはらの御事也、其内にて

も白あやハ、細々にハ」めされす云々、おり物も御うらハ紫同前、但赤き御おり物ハ」御うら白き也、

一御はたの事、御若年之御時ハ、御ねりぬき・御こうはい」以下御用也、これも大臣已後の御事ハ、常の平絹にて「御座候、御あわせめされ候、四月一日など此御分也、御十五の」うちハ、四月にハはたん・うの花をもめさる、也、卯のはなど」申ハ、御うらをもゑきにそめたるを申也、

一御帷の事、御若年にてハ紅染のをめさる、段勿論也、「こん地しろもつはらの御儀云々、紅そめハ、けんこ御若年」の御儀也、其後ハ白きをも御用勿論、又たうぬのなども」めさる、儀も在之云々、梅染已下同前、

一御直垂之事、或は紫、或ハもゑき・こうなど毎／＼御用也、「白きも勿論の御儀、正月中ハ必白きをめさる、なるへし、」御若年の御時ハ、御色をこく、御年たけさせ給ひ候に」したかひ奉りては、御色をうすくさせらる、也、

一布の御ひた、れの事、更御用なし、但長徳院殿様最初、「御折糸ほしにぬの、御直垂、又布の御上下をもめされ候也、御紋」むらさきそめにて御さ候よし、申つたへし御事也、然間「下／＼の人々、むらさきの入たる上下、ゆめ／＼あるましき」事也と申儀也、小袖の事ハ、更不及御沙汰、すあふ・はかま・「ひた、れなとにかきりての御事也、先御代にも長享三年^{濃州より}」御上洛の最初ハ、御紋紫に被染たる御布、ひた、れ」にて御さりし也、

一御織物事、もつはら肝要也、拝領せすして着用の儀」あるましき事也、正月一日可被用之由、被仰出之て、一かとに「御相伴衆の大名并御供衆^ニも下され候段、毎年の御規式也、」拝領のかた／＼は、

家の面目きほと仕きたれり、

一 常興親にて候教氏ハ、慈照院殿様御代始、御供衆并申次」にも参勤、毎年御ふく拝領仕候き、殊正月一日申次をハ、」むかしハ必一番よりはしめさせられ候、伊勢備中守貞藤」今の備中祖父也と教氏相番に候て、一番にて候、然に貞藤もへつして」御供衆めしつかハれ候やうに候て、御ふくをも被下候、両人正月」一日の申次披露はしめ、御ふく令着用勤申候、公私御」祝儀之由、貞藤もしるしをかれ候つる、さやうニ候て、寛正四年」まで教氏は存生にて候、然間常興事ハ、其時十歳にて、」一向童部之事候条、いまた御供衆にも不参候、又同名」陸奥守政重朝臣も、其比は十四歳と存候、是もいまた」御供衆に不参候、さやうに候て、三四年めに文正に改元候て、」文正元年四月に土岐方へ御成之時、はしめて政重ハ御供衆ニ」めしくハへられ候て、其あくる正月御ふくを被下候由承候き、」さやうに候て、其次の年応仁に改元有て、大乱出来候て」より已後の御事ハ、御ふくなど被下候御儀式、よろつうちおかれ」候て、そのまゝ今にいたり此御分也、其已後惣次の御儀式にてハ」候ハねとも、政重別而慈照院殿様めしつかハれ、御ふくをも」毎々拝領勿論也、常興も常德院殿様御ふく毎々被下段も」勿論候、從慈照院殿様も、長享二年冬、又延徳元年両度」拝領仕候き、かやうの御時宜共申事、返々いか、と存候へ共、一向」御服なともとく不拝領仕身にてなと、しせん無案内」之人なと、取なしもや候へきと存候間、常興は年罷寄候、」各は不可有存知候条、末代の心得に、事の次をもつて」ひそかにしるし付也、

一 慈照院殿様御代始、申次一番教氏・貞藤にて候、教氏已後は、」別人をくハへられ候に不及、一番ハ貞藤一人にて、応仁まで被」勤申

之也、其後は貞藤も、十二人之衆にて御かまへを退出、」又畠山播磨守・同名中務少輔ハ、右衛門佐殿一味候により、」これも退出候、然間其已後ハ、申次御人数も相かハリ被仰付候」御事とも也、

一 正月一日御盃頂戴之時、三職をはじめ候て、御相伴衆之大名并」国持之外様、其外御供衆まで、御練貫被下之也、三職へハ」二重つ、其外は一重つ、拝領候、其様躰、御盃頂戴有て」可能退時分、伊勢守、又ハ同名にても御前へ令持参渡申」之時、御盃をた、ミにをきて、両の手にてうけ取奉て、則」頂戴候て、た、ミにをきたる御盃をとりそへて退出なり、」御衣を右のかたにかつくと申事候へ共、さやうにハ候ハて、た、」両の手にもちて被退なり、

一 年始には、大名・御供衆ニかきらす、御練貫一重被下輩有之、」又御太刀金伏輪被下人数も在之、如此御儀式ハ、応仁乱」前迄之御事也、一御興ニ御たて薙と申事有之、雨雪などのよこにふり入る」時の御用也、其時ハ、御立むしろを引出して、上にかきあるへきニ」かけ申て、御すたれをおろし可申候、御たて薙を引出して」かけ申時にかきりて、御すたれをおろし申事故実也云々、

一 御こしのゆたんと申事、めしの御輿にかきりて無之御事」にて候よし、貞藤瑞笑軒しるしおかれ候物のうちに有之と」存候、女中かたのこしには、ゆたんと申事在之云々、

一 かたひらにたう布の事、から物たるあひた、下くの人々不」可有着用との儀にてはなし、かたひらにいたりてハ、たう」ぬのもくるしからすのよし、瑞笑貞藤軒事也しるしおかれ候物に」見及候し也、

一 おりかミの事、千疋にても、いか程にても、しせん進上の時、その」おり帯を引合にても、杉原にても、十てうの上にすへて」進上仕哉否之事、必十帖の上にすへ候にてハ無之候、毎年」二月一日、

諸大名千疋つゝの折帟を持参候て進上候ニ、十てう」の上にすへおかれ候事、更なく候、たゝおりかミはかり進上」にて候、そうへつのき、しせん時宜ニより、十帖にすへられ候」事もあるましきにてハなく候、そうしてハ、すへ候に」およはさる事にて候、二月一日進上などハ、必おりかミ計」にて候、将又正月御会所にて、そこ一こん御座候時、」御台様も御座候、其外南御所・しゝう院殿・そうち院殿」御三御所御さ候、千疋つゝの御おりかミを御進上候、仍公方様」より御引出物として、御ほんにしゆすゝとんすのたくひ、何」にてもすへられ候て、御三御所へ被進候、さやうに御さ候て、及晩」御にしむき松の御庭にて、松はやしを觀世にさせられ候を」御けんふつ候、その時日吉大夫并田楽、庭上に二三人しこう」させられ候て、見物させられ候、さやうに候て、御所くゝより」まいりたる御おりかミを、日吉大夫・田楽に下され候、御折帟」如此被下候段ハ、伊勢守取次で遣之候、自然又勢州不参候」事候へハ、御供衆中たれにても取つかせられ候て、」被下之也、御会所へは当職^{管領事也}其外公家には日野殿」被参候、さやうに候て、松の御庭の松はやしをも、此御兩人」見物させられ候、次けんけう共十四日ニ参候、御会所にて」平家申させられ候て、公方様より御ねりぬき二重つゝ、」被下候、其時の上手とも四五人にはすきす候、二三人祇候」仕候事も候、其内惣檢校は、上手にて候ハねとも、必参上仕候、」かやうの次第共、去応仁大乱まへまでの御事也、以上、花の御所」にての御儀式ともなり、其已後乱中ハ、正月十三日御せち」一献御座候て、必觀世に御能させられ候、其時ハ管領」など御しこうに不及候、和泉兩守護^{細川民部太輔 細川刑部太輔}、毎年」被参候、依仰也、此兩人ハ、常徳院殿御さん所さんし被申候、」さやうのゆへに祇候云々、

一樽のさかなにハかハラけの物の事、五種にて候ハ、御かハラけ」の物五種・御樽五荷など、あるへく候、三色にて候ハ、三しゆと」あるへく候、つかハされ候かた、うやまい候仁躰にて候ハ、御かハラけ」と御字あるへく候、御たる同前、又かハラけと御字も候ハて、」た、五種・五荷など、もあるへく候、本儀ハたしかにハハラけ」の物五種、樽又ハ柳とも五荷とあるへく候、柳とかき候時ハ、」御やなきとはかくへからす候、いかにしやうくわんのかたへ」にても候へ、柳と御字候ハてあるへく候、

一ゑちこすあふ御免の事、右京兆御一人にかきる心」にては御さ候ハす候、すきすあふこのミにてのそミ申」候へハ、御免の分にて、いつもくゝゑちこすあふ着用候き、」其外には、一ころ武田のそミ被申候て、ゑちこすわう」着用候つると存候、其外ニハ見及申候ハす候、返々武田事、」老もうにておほへちかへ候や、まさしく如此存候、

一就觀世四郎官途儀、内々被尋下候旨、畏而承候、仍四郎左衛門に」可被成哉御事、不苦存候、同事ながら、左衛門尉と尉字をハ」そへられ候ハて、た、四郎左衛門とハかり可然令存候、此趣御心得」候て、可被申入候、仍被懸御目候につきて、為上意官途させ」られたる先例の事、おほへ不申候、但觀世座ニ春と申候し」きやうけんしや、一段の上手にて、初は彦次郎と申」候つるを、慈照院殿様御代、応仁乱前にて御さ候、春と被付」候よし承候つる、別而被懸御目候やうには御さ候ハす候つる、」其時の觀世大夫如此申さた仕たる事候哉、いかさま其已後ハ、」はると申候き、かやうの御事も御さ候間、四郎事被懸御目」と申、如此御儀尤不苦奉存候、乍去四郎左衛門の尉とは」被成候ハて、た、四郎左衛門とハかり可然奉存候、

天文八十五、

一 右京兆并寺町石見守書札案文、

就長次郎左衛門尉知行分儀、去年委曲申之處、于今「無一途之由候、不可然候、所詮如此間、京着之儀無相違候者、尤以」可為祝着候、尚寺町石見守可申候、恐々謹言、

大永二

七月十二日

高国

畠山左衛門佐殿

進之候、

就長次郎左衛門尉殿知行分儀、去年委曲被申候處、于今「無一途之儀候間、重而以書狀被申候、早々被仰付候者、」肝要之由、猶自私可申旨候、可有御披露候、恐々謹言、

大永二

七月廿日

寺町石見守

道際

温井備中守殿

進上

一 御太刀 一 腰白

一 御鎧

一 領

一 御弓

一 張

一 御征矢 一 腰

一 御馬

一 正置鞍

一 御太刀

一 腰正恒

一 練貫 五重

一 引合

一 十帖

一 御太刀

一 腰真守

一 御香合 一 剔紅

一 御盆

一 一枚堆紅

一 御太刀

一 腰次依

一 御絵 二 幅筆王季本

一 御盆

一 一枚堆朱

一 段子

五端色々

一 御盆 一 枚桂漿

一 御太刀

一 腰包平

一 御刀

一 腰吉光

被召加御相伴御礼

一 御太刀 一 腰行平

一 御馬

一 正河原毛

一 五千疋

御釵拝領御礼

一 御太刀 一 腰国光

已上

一 御太刀

一 腰吉次

一 御馬 一 正鶴毛印 已上

細川

宮寿

一 御太刀 九腰金 九千疋 内者進上

細川右馬頭

尹賢

大永四三六

上書

武田伊豆守殿

高国

就宝秀軒之儀、示給旨得其意候、仍 若公様於御入洛者、「即參洛候様相調候者、可然候、幸当国七少知行在之」由候条、可被相談事肝要候、猶吉田三河守可申候、「恐々謹言、

四月十八日

高国

武田伊豆守殿

此春よりの目出さ、漸申旧候、仍御発句とも拝見「いたし候、まことにとりく、殊勝さ申計なく候、一身」満足之至候、なをくしつかに見候へく候て、申入候へく候、以上、

返々御きとくさ申つくしかたく心にて候、「御同心とをしハかり候へく候、

大永二正十九

大伊まいる 申給候

高

天文九八廿四

与州まいる 申給候

禪

雲州尼子御礼申上候、忠西堂上洛候段、先々無御等閑「儀候、可然様御取合、可為肝要候、委曲慈光院申合候、少」取乱如何申入候哉、以上、
うら二 佐

一 侍所事、

山名家

土岐

赤松

多賀豊後守

京極など御持」あり、今川伊与守

貞世、畠山右衛門佐明徳比、細川「右馬助七

応安

右雖輕千万候、とかく申候へハ、「いか、のやうに候ほとに此分候、

晴光判

大和宮内大輔殿

まいる
申給候

從四位下源晴完^{朱印}

大和家藏書四

(表紙表題)「大和家藏書 四」

中表紙

(付箋)「大館伊予守尚氏入道常興筆記 四」

子息陸奥守晴光與書証判

「

(朱印「明治十四年改」)

一上所專用候其様牀之事、

一 恐惶謹言^二 恐々謹言^三 恐惶と書候得共、草に「書候得者、真の恐々

に准候、恐々と書候へ共、真に書」候得者、草の恐惶に准候、真・

二 行・草御分別候而、御相手」上・中・下へ可有御調候、

一公家方も官位により「晴完恐惶謹言」^二 晴完恐々謹言、此段猶以御

賞翫之心にて、官位に「よると申ハ、大・中納言等之御事候、

一あて所書事、宛所書^二 人々御中^三 進覽候」^四 進献之候^五 御宿所

六 進之候^七 打付書

是も真・行・草御分別肝要候、猶以故実と申ハ、「参の一字を書加

らるへく候、此段右のうちにての、」少賞翫有へきかたへの故実に

て候、

一返札之事、是も^一 宛所書^二 尊答^三 尊報^四 貴報^五 御報^六 御返報^七 打

付書^八 御返事

是ハ被官類へ相調申候、此条も真・行・草肝要」たるへく候、参を

可被加段、右の分別同前候、

一知行方之儀、已下に百姓地下人等之類へ直之折紙」遣事、不可有之、

被官中可為折替也、

条々

一書札之認様之事、

或は打つけ書、或は進之候、又御宿所、又進覧、」又人々御中、又あて所書、其外床下なとまち」く／＼に在之、其家により、その仁躰にしたかひて」用捨可有之云々、

一三職已下諸大名へ之書状事、三職へハ恐惶謹言」と書て、人々御中と可認之、其内にてても当職^{管領}へハ、あて所をした、むる儀も可有之、恐惶謹言と」書て、あて所も勿論也、又恐々謹言と認て、あて所も」毎々之儀たるへし、直札にあらざる意得にて、恐々も」尤其分也、あて所ならハ可預披露候、又ハ可令披露給」とも、又可被申入候とも、可有御申候ともした、むる段、」通例の趣なり、次山名殿・一色殿・細川讃州・畠山」修理大夫殿など、同御相伴衆たりといへとも、」三職には相かハるへし、仍参令進覧候たるへし、」それも人々御中と認儀もあるへし、其身宿老にて、」官位なども一かある事^在之、さやうの方へは、」取分賞翫の心へにて如此、又謹上書も勿論也、」三職へも、謹上と書へき段可然、謹上たり共、三職」へハ人々御中なるへし、次大内方・赤松方・両佐々木方・」土岐方などへの事、是又同御さうはんしゆとハ」申ながら、聊相かハるへきたん勿論、如此方々へハ、謹上書」尤可然也、又ハ進覧も可有之、武田方同前、次和泉」守護・伯耆守護・富樫方、又菊池・大友方など大かい」同前、謹上書たるへし、随而名字より其時の官^{名字之事也}まて」書つ、くる段、勿論とハ申ながら、或者称号^{名字之事也}ハかりにても、又其時の官計にても、可書事故実云々、」三職已下御相伴衆大名へハ此分たるへし、然三公家」かたには、称号を認事賞翫之心得也、武家かたにハ、」官計調事賞翫之様也、三職など尤此分也、依

仰」書状をつかハす事有之時ハ、名字官まで書つ、くる」段も勿論、其段ハ三職のほか、大内方などへ之儀、」毎々如此も有之、又令進覧候と書事、細々不及見」様に申方も可有之歟、此令といふ一字をくハへ書事、」猶少賞翫之心得也云々、加様之儀者、書札之秘説とも」申候哉、此書様共之事ハ、御供衆中にてても、御紋せ」られ候かた／＼の心得なるへし、ひらさふらいの人々ハ、」又聊あいハるへきなり、

一 番方之事、一番衆にハ上野出羽守 三淵弥次郎」長井 曾我

田村 土岐同名 佐々木同名など、」大かい同ほと的事ながら、御紋せられ候ハ、又聊相」かハるへし、何も其外おなし事とハ申なから、少之」用捨も有之事也、謹上書可然也、惣別謹上書之」事ハ、われより上手へも、同輩へも、下手へもをし」わたりたる、武家かたの書札の肝要のやうに申」ならハしたる也、上手へハ、謹上をいかにもすミくろに」しんに書、同輩へもすこしさうに書、下手へハ猶以さうに」した、むる事故実儀也云々、然三細々の書状、或者」ひねりふミなどのたくひにハ、床下など、も書、又ハ御宿所」など、少さうにあるへし、下手へハ、進之候と書へき段勿論也、」雖然、近代ハ進之候と書事、以外さけしむるやうに心へ共有之」間、用捨かんよふなり、ちはん之儀よく／＼得其意て、」そのうへにて少ハいんきんに可書事、尤可然なり、

一 二番衆にハ、 桃井^{番頭} 荒川 一色石馬助 土岐・」佐々木同

名 松田上野介 松田勝田 小早川同名」三浦同名など、其外大りやく同ほと的事なり、様躰」まへにしるすにこれおなし、一三番衆、むかしハ番頭畠山播州、同名ありしやうに」覚候、其外小笠原 千秋 朝日 又土岐・佐々木同名、」おの／＼得様躰同前、

一四番、これも番頭畠山同名有之、其外 高 大和 「海老名 土岐・佐々木同名 小串 栗飯原など、」何も様林同前、

一五番、一色同名阿波・上総・大蔵太輔 里見 「荒川 大井田

相川 佐々木大原 土岐今嶺 「佐々木鏡 三浦 結城兵庫助 大

内同名 宇都宮 「千秋 佐々木岩山 麻生 富永など、其外あま

た、」何も同前、其趣先条にしるすにこれおなし、

一右筆方ハ、公人奉行被仰付候者、 松田 飯尾 布施 等也、其外

にも有之哉、先不紛年老次第ニ如此也、」惣別ハ家々のせうれつに

よらす、階老次第たる間、」何ももつておなし事也、其内にては評

定衆にめし、くハへられ候ハ、其かある事也、ひやうちやう衆に

参」つけたるハ、不及被加召之、評定衆と申ハ、撰津・」二階堂・

波多野・町野等同事也、御評定始など、」申て、年始已下於御前被

行之事、むかしハ毎々の「御儀也、其時ハ公方様御着座ありて、其

時の「管領着座、次評定衆着座、奉行衆も評定衆に」めしくハへら

れ候ハ、おなしく着座也、是も奉行方」にてハ、松田・飯尾・布施

などめしくハへられ候、如此類ハ、」少其かあるへきとハ申なか

ら、書札などハ大かい」おなしやう也、進之候と認候へき也、番方

にも其分」たる間、不可有別儀事ながら、右三如申、近代」進之候

と書事、事外さけしむる心へ共也、伊勢守」などよりハ、御番方多

分并奉行衆江ハ進之候と、」今も被認候由承候、

一同朋衆へ之事、進之候可然也、被仰出事などハ、」進之候共候ハて、

何阿弥陀仏とはかりあるへし、」奉行衆調候御下知にハ、何阿と計

相調申候よし」被申候、又被仰出事にて候共、進之候と書ても不苦

候」事より、時宜によるへし、

一折紙に進之候と書事も可有之哉事、ことにより」おりかミにて候共、

進之と可認事勿論也、同朋衆に」かきり候ハす、人により御宿所な
と、折紙に書」事もこれあるへし、大略ハ折紙にハあて所ハかり」
した、むるのミ也、

一御供衆への事、謹上書可然也、事よりてた、」うちつけ書ニ、立

ふミなどに認るも可有之、折紙」之事、進覧とも、御宿所など、も

認候ハて、」右馬頭殿とハかりも被仰出事をハ可調之段、勿論也、」

其内にては、日付よりハ少さしあくるやうにありて」可然也、名字

より官まで可書を、名字をハ認申候ハて、官計認」候へき段故実也、

如此之儀ハ、於」御供衆中者、右馬頭殿之儀たるへし、典厩をハ別

而」少御賞翫之様ニ、もとくより有之につきての」儀也、伊勢守

ハ既書札直札にてハなくて、被官あて所ニ」於于今被認来也云々、

一御部屋衆へ之事、御供衆中御紋せられ候かた、」大略同前なり、

一伊勢守をはしめて同名衆へ之事、惣別一人の事ハ」各別之儀也、進

之候などハ認候ハて、謹上、又ハ御宿所、」又ハ進覧なども可有之、

同名事も御供衆にめし」くわへられ候輩ハ、其かあるへき哉、伊

勢加賀入道」先年いまた右京亮と申候時、番方陸奥守方よりの」書

状、進之候と被認候き、是以心得行へき事也、但」さ様之段ハ、ち

はんの心得にて、用捨可然候、

一武衛 細川家 畠山家 山名家 一色家 「大内 佐々木 武田

土岐 大友 菊池 「此方々同被官衆へ之事、三職已下儀、先条ニ

注付之訖、」被官衆へ之儀、打つけ書勿論也、しかれとも守護代」

などの輩へハ、進之候とありて可然也、假又しゆこ代」ならず共、

当に時、はしりまい候輩にハ、進之候と候ても」可然候、仮令進之

候と書にも、凡しんさうあるへき事候、」そさうに進之可然候、か

やうの儀、さたまれる法の」外の故実と申儀也、随而被仰出事、自

然以折紙「申へき事も勿論也、但かやうの大名へハ、折紙いか、也。」例式立ふミの書状肝要なるへし、被官人に直被仰出「儀も、ことにより有之、被官へハおりかミにて申事も」可有之、

御所へ并かミく上臈御局などへの事、例式の「ことく御所へハ、めしつかハれ候御ひくのかたへ」のふミにて、このよし御ひろふ候へとも、御申入候へともあるへく候、御ほをいたされ候事も、このふんたるへし、」又かミくへハ、その御寺の名を書へし、直札の分也、」けりやう当時ならハ、ほうし院殿へ人々

めく、など、あるへし、かミくのうちにて、又すこしハ「せうれつも御入あるへし、光しゆ院殿・宝慈院殿」なども、恵正院など、申候よりハ、御しやうくハんの「やうに御入候つる、さやうのかたへハ人々

めく、可然候、」其外ハ人々と候ハすとも、

この趣にて子細を可被申なり、」次折紙事、これもことにより、おりかミにても「可申たん勿論也、けりやうつねのふミを折紙に」こしらへ候までにてこそ候へ、御名の書やうなど「おなし事たるへし、御局方一台をはしめての事、上らふふんの」御かたへハ、めしつかハれ候女はうたちの名を書いて

めく、可然候、大上臈・小上臈その様牀位御「入候たんハ勿論ながら、書札にいたりてハ、女はう」かたの儀此分可然也、次中臈への事、これハ女はうたちのあて所にて候ハて、けりやう宮内卿殿「御局へ

めく、かやうに候て可然候、被仰出候事」などに、以折紙申儀有之共、此心得たるへし、ちはん」の趣如此心へ候て、其上にて、いまでもやまい申候「やうにあるへき事ハ、時にあたりての故実なるへし、」将又御女はうかたへ、わか名の書やうハ、名

のりを「調候ハ、上の一字をかなに、下の一字をまなに可書也、」法牀候へハ、上の一字まなに、下の字かなたるへき也、

御しもへの事、けりやうはりま殿御局へりめくとあるへし、然共時宜により、めく、とも書へし、旧冬「公儀につきて、我々おりかミをいたしり」事候時ハ、」はりまとのへハ、はりま殿御局へりめくと相調候き、

御ひ女の事、けりやうしら川とのへらとあるへき事「可然候、りめくともあるへく候、りめくハりよりハちと」うへにて候、た、りめくもちろんにて候、然共女中かたの「事ハ、ことによりすこしハうやまい候段、故実也、

一公家方へ之事、大納言・中納言などの方々へハ、大かい「三職之趣三相と、のへへき也、三職ハ、官位一向大中納言に」不及、浅位浅官なれ共、於武家方者、公方様当御代官、世上成敗之職なり、仍別而賞翫申儀たるにより、」公家方大中納言ほととの趣に相調也、如此申候ハ、日野殿・「三条殿已下之儀也、其内いまた殿上人のくらしいに」御入候かたへハ、山名・一色ほととの趣たるへし、此内」にても日野殿ハ、御外せきたるにより、別而賞翫「申也、次三条殿も凡同前たるへし、将又摂家御事ハ、」縦殿上人のくらしい、浅官にて御入候共、直札などにてハある「へからす、其内の殿上人・諸大夫又ハ侍など何にても」あて所なるへし、清花のかたへも、大かい同前也、摂家と「申候ハ、近衛殿・九条殿・二条殿・一条殿・鷹司殿」此五家を申也、清花と申候かたへハ、徳大寺殿・「花山院殿・転法輪三条殿・西園寺殿・久我殿・」大炊御門殿・洞院殿・菊亭殿、かやうのたくひにて「御入候、或ハ三条西殿・勧修寺殿・中山殿・飛鳥井殿・」冷泉殿など、申たくひ数多御入候、如此之方々

へハ、」右如申たるへし、但此内にてても、大臣に御なり候て、当官」大臣にて御入候ハ、直札にてハあるへからず、清花などへの」ことくるへし、

一諸大夫并医師・陰陽師の事、御番方大かい同篇」たるへし、但二位・三位になりたるかたへハ、少其かとあるへし、恐々・恐惶などの用捨ある事なれ共、さやうの事迄ハ」さたに不及のミ也、殿文字などをそさうに可書と、」しんに可書との様牀、少しやうくはんのかたハ、ちとハ」しんにあるへし、かやうの儀故実也云々、

一官外記同前たるへし、官と申ハくはんむ事也、

一觀世大夫已下事、そうしてかやうの猿楽かたへの」事ハ、直札にてハあるへからず候、被官人に申付て被官」かたより以書状申させ候へき也、被仰出儀たりといふ共、」猿楽・田楽などハ大かい此分也、けりやうけんこ内々の」かなふミなどの事ハ、非御沙汰限事也、それハ其意得」あるへき事也、仮令かた名など觀弥などそさうに」書て、こなたも左など、一字かきて可遣候、これハ一向」儀式に立いらさる事也、

一被官人かたよりの書状ならハ、被仰出事を申させ候て、」觀世大夫殿と打つけ書にあるへし、又わたくしの儀」ならハ、御宿所などもあるへし、折紙の段もこの心へ」なるへき也、

一御厩孫七などへの事、大かい同前なり、そうして直札」などの事ハいか、に候、然共俄殿中などより折紙など」遣候ハて不叶事有之者、孫七男などあるへく候と存候、」侍ほととの者にて候へハ、いかなる貴賤によらず、名字あるに」つきて、なにかし殿と書事勿論也、かやうの甲乙人の」事ハ、子細ある儀也、甲乙人と申候は、ほんけ百姓等之事也云々、

一何にても進上折紙調様之事、太刀・刀、又ハ衣類・盆・」香合・繪さんの物等之事、先進上と常のことくはしに」かきて、一番御太刀、次御刀、次盆・香合・繪さん」の物、次衣類たるへし、次御たるの事、まんちうなど候ハ、」まつ一はんにまんちう、それにひつつ、けてしやうしん」の物候ハ、其次しやうしんの物を書て、さてひふつを」可書申也、但雁・鯉など進上に、しせん等などしん」上の事候ハ、まつ雁・鯉・鯛など書て、其次竹の子」可然候、かやうの段故実云々、さやうに候て、いちのちに」御たる何荷とあるへし、次御たるハなくて、美物兩種」にても、三種にても、進上候事勿論也、むかしもさやう」にもありし也、次折紙に御折かハらの物等之事、」御折ハ二合にても、三かう、又ハ五かう・十合なと、其」数をした、むるなり、御かハらの物ハ一せんとハ」か、すして、御かハらの物五種とも、三種とも可書申、」但御かハらの物、事より二せん・三せんも進上」の事可有之、其時ハ御かわらけの物二膳各五種とも三種」とも書申へし、其時ハ何せんと候、わき各五種とも三種」とも其数を可付申候、おりかミのれうしハ、引合」一重ををしおりてした、むへし、むかしハ杉原にても」有之段勿論たりといへとも、近代ハ必引合にてこれを」した、めきたり候間、引合可然也、御折并かハらの物」などハひふつよりまへに可書也、

一女中衆御進上之事、けりやうまなをかなに御かき」候へきたんにてこそ候へ、大かいやうたい同前たるへし、」但はしにしん上とハ御かき候ましく候、おくに御名ハ」あるへく候、けりやう御局御進上候ハ、さことあるへし、」又ハもくろくまでにて名を御かき候に不及事もある」へき歟、其段ハ少しゆうのかた也、吉良殿にかきりて、」むかしよりのしつけにて、た、もくろくまでにて、名を」御

かきなく候、次女中かたよりにても、中臈のかたよりハ、「かなにしん上とも御かき候へきなり、

一わたくしより女中かたへかやうの物進候事、たるに」しきろうなとそへ候事もちろん也、しからハ、折かミ」にハまつしきろう一と御かき候へき、但折をも進之候」ハ、まつ折何合と候て、其次しきろうとあるへし、「くはうさまへしん上のほかハ、進上とはしに書へからす候、」但御所へハ、はしにしん上とあるへし、

一五山長老西堂へ之書札事、長老へハ恐惶謹言」とも、恐惶敬白なとも候て、その寺の名、けりやう」東福寺ならハ、東福寺侍者御中とも、侍者禪師」なとも可書之、参といふ字ハ不付共可然也、

一西堂へ之事、長老よりハかろし、其寺の名を書て、」或者玉床下、或ハ尊床下、又ハ足下なともあるへし、」又其内にて少賞翫あり度候ハ、侍者御中とも」あるへし、恐惶謹言なるへし、又ハ恐々敬白なとも」あるへし、

一かきとむる所に可得御意候と書事、これハ貴賤に」よらざる子細にて候へ共、武家かたにハ少賞翫のかたへ」取なされ候間、先以其分也、長老西堂へも事より、」時宜よりて可得御意候共可有之、

一諸門跡事 梶井殿 青蓮院殿 大覚寺殿 聖護院殿 浄土寺殿 実相院殿 三寶院殿 妙法院殿 円満院殿 竹内殿 下河原殿」かやうの門跡たちへハ、撰家同前の心得也、或ハわき門跡、」或ハ坊官、或ハ侍法師なとへのあて所の書状也、此」御人数の外、今少此たくひ御入候と存候、只今おほく」申候ハす候、

一脇門跡事、定法寺 住心院 尊勝院 上乘院」なと、申類へハ、大中納言はとの心へ、それよりハすこし」かろし、然共大かい同前也、

一此外出世の衆と申て、或ハ不動院 花徳院 無量寿院なと、申たくひハ、同輩の心へ也、其内」にて僧正になられ候かたハ、少賞翫あるへし、

一日々記に諸大名にて殿文字可被付方之事、三職」其外山名殿・一色殿・細川讃岐守殿・畠山修理大夫殿」なり、御相伴衆ならね共、此方々子息候事ハ可被付之、」やかて御相伴衆ニ可被参につきての儀なり、但先」御供衆にめしくハへられ候方ハ、被付候ましく候、」御供衆をさけしめらる、にてハ候ハね共、申分の儀、殊」御供衆と申ハ直勤之心にて如此なり、将又吉良殿・」石橋殿・渋川殿なとも、殿文字可被付申之也、上古は」御もんの衆ハ多分殿文字被付候やうに承候き、然共」近代如此御入候条、于今いたり其分たるへく候、近代と」申候へハとて、先御代なとよりの御儀にてハなし、慈照院殿・常徳院殿様御代も此之分也、

一公家方殿文字事、堂上のかたハ殿上人によらす、何も」殿文字可被付之、たうしやうと申候ハ、せうてん被申候」公家たちの事也、一門跡之事、梶井殿・青蓮院殿なと、まへに申候程の門跡は、」殿文字勿論也、又殿文字をハ略候て、青蓮院御門跡」なとも可被付候、たれへハ御門跡と付たれ候ハ、殿文字を」付候と申儀にてハこれなし、殿文字を書申時もあるへし、」又御門跡と書申時もあるへし、御字をりやく候て、三寶院」門跡なと、も可有之、然共其時代、或ハ公方様御連枝、」又ハ宮、又ハ近衛殿なと、申候一段のかたへ門主」にて御入候へハ、別而賞翫被申心にて、御門跡と御字を」付申候事、一ツの故実也、如此のかたへ自然被仰出」事なとハ、右ニ如申、書状にても候へ、折紙にても候へ、」坊官なとへのあて所にて、此分被仰出候段、可被申入候と」あるへし、常の御下知な

とも、如此一段の家事候得者、」祇候人のかたへの分ニ調候て、此分可被申入之由、被仰出候と」した、め候事、於于今其分也、

一年中さたまれる御対面之次第事、於其段ハ、正月一日」より歳暮大晦日にいたり、於于今相違なく御さ候」間、くハしく不及注申、正月五ヶ日ハ三職はしめて」諸大名、其外公家已下種々式日参賀也、

一御成事、正月二日管領、年中の御成始之儀也、今日ハ」御供衆ハうらうちにて参勤也、御台様も今日ハ」御成也、同四日御風呂、伊勢守所へ、五日畠山殿、」今日よりハ猿楽有之、十二日武衛、猿楽有之、廿日赤松、」猿楽有之、廿二日山名殿^{猿楽有之}、廿三日細川殿^{猿楽有之}、

廿六日京極、猿楽有之、今夜還御に畠山播磨守」所へ、二月十七日一色殿、猿楽有之、四月日不定、土岐、猿楽有之、六月七日京極

祇園会御見物
女中様并御所へ渡御

一御参内者正月十日、歳暮ハ十二月廿七日也、

一御成之時御出入御門之事、

一御参内御式装御車之時ハ、四足より御出成て、」内裏にても四足の半町計外立石にて下御ありて、」御参入也、

一御直蘆之時ハ御輿也、唐門より出御成て、内裏にても」から門より半町はかり外立石にて下御ありて、」御参入也、

一御寺方へ之事、御輿也、観音殿御門より出御成て、」寺にてハ玄関^{けんくわん}のきハにて下御ありて入御也、自然」玄関なき寺にてハ、御こしのよるへき所、随便宜」かまへ被申間、非御沙汰限、けんくわんあるほととの寺」へハ、必玄関にて下御也、けんくわんハ中門車よせの」心得也云々、

一諸大名已下事、から門より出御ありて、中門にて」下御也、御えんの上也、

一御所へへの御事、から門より出御ありて、御門きハ」にて下御

也、時によりうちへ御こしをめさる、事も自然有之、

一撰家へ之事、御門のきハにて下、御うちへめさる、事無之、

一御門跡へ之事、大かた同前、

一年中門跡方并御寺御成之事、

一正月十一日、三宝院殿、於殿中御評定始有之、其已後」御成也、

一同廿九日、聖護院殿、正月中、日不定、善法寺^{通玄寺}
被申也、せん法寺師たん寺
たるによりて也

一二月、日不定、妙法院殿

一三月二日、梶井殿

一十月五日、松梅院、北野御経御聴聞の為也、」同十五日先北山鹿苑寺へ渡御、御斎有之、それより」直ニ松梅院へ御成、御経御聴聞なり、

一御寺御成次第之事、

正月中

十八日 鹿苑院 御点心 先於昭堂御焼香、

十九日 相国寺 同前

廿日 普広院 同前 先於昭堂御焼香、管領御相伴、

廿二日 勝定院 同前 先於昭堂御焼香、

廿四日 等持寺 同前 先於昭堂御焼香、

廿六日 崇寿院 同前 先於昭堂御焼香、

廿八日 龍雲寺 同前

廿九日 等持院 同前 先於昭堂御焼香、

二月中

六日 雲頂院 於本坊御点心、於集雲軒御斎、

七日 大智院 御斎

九日 大徳院 同前 当時慈照院之御事也、御寺号被改之今ハ慈照院と申也、

十一日 常徳院 同前

十二日 徳雲院 同前 先於昭堂御焼香、

十五日 相国寺都聞寮御斎

廿四日 蔭涼軒 御斎并普広院御焼香

三月中

日不定 西芳寺為花御成、常在光寺同前、

廿四日 蔭涼軒 御斎并普広院御焼香

四月中

十四日 雲頂院 御斎并相国寺 於仏殿御棧敷粉敷云御聴聞

十五日 相国寺 秉弘御聴聞

廿四日 蔭涼軒 御斎并普広院 御焼香

五月中

六日 鹿苑院 御点心、諷経以後御焼香并御斎、管領御相伴

廿四日 同前 蔭涼軒へ之儀

六月中

廿四日 同前 同

七月中

十三日 鹿苑院 施餓鬼御聴聞 御焼香

十四日 等持寺 同前 鹿苑院 先於昭堂御焼香献水并於本坊御焼香献水

十五日 鹿苑院 先於昭堂御焼香献水

等持院 先於昭堂御焼香献水、於方丈御斎

相国寺 於山門上之御棧敷施餓鬼御聴聞 諷経

之後御焼香

普広院 御焼香献水 慶雲院 御焼香

廿四日 同前 同

八月中

廿四日 同前 同

九月中

無定日 雲頂院 松菌

廿四日 等持寺 開山忌 御点心

廿八日 鹿苑院 同前

廿九日 崇寿院 同前

晦日 金剛院 御焼香 三云院 御点心諷経以後御焼香

雲居庵 諷経以後御焼香、於本坊御斎

十月

無定日 西芳寺 為紅葉御成御斎

同前 鹿苑寺 先仏殿并法水院御焼香、御斎以後於鏡間御焼香

廿四日 同前 同

十一月中

廿四日 同前 同

十二月中

八日 蔭涼軒 紅糟索麴

十八日 勝定院 御焼香

廿日 蔭涼軒 正月二日御誕生日御祈禱之疏銘為被遊之御成、御点心御斎

廿四日 同前 同 并普広院御焼香、但毎月如此、

一内々并面向之御祝事、年中之御様躰、正月御祝「御こわなと参候事、悉皆女中むきの御事也、然間」御はいせんとも、御供衆ハ一向不及其儀、女中の御かた「く被勤申之、毎月朔日・節句同前、一年中相定て諸家已下進物之事、

正月五ヶ日三職御太刀^金、十五日山名殿御太刀^金、「細川淡路守御弓笠懸引目、これハ正月一日也、日野殿」二千疋、これも一日也、四日能阿時より御扇進上、ちかく「相阿までも如此、竹田牛黄円、五日吉良殿美物種々、」七日外郎御薬種々、十日判門田白鳥、佐々木「京極初鮎、六角も正月中初鮎進上之、十七日」善法寺鯛二十進上之、御弓御的矢細川淡州、「御ゆかけ伊勢因幡守并小笠原進上之、御しんとう」五入御弓弓細工進上、つるかけ弦進上、此外しよく人「進物有之、只今失念也、廿日御太刀^糸山門執当、」十四日南御所・入江殿・惣持院殿・慈しやう院殿千疋つ、「御進上之、六月中ミさよミ五端京極進上之、あさつき」一折波多野進上之、其外方々進物有之、からなとう「堺和進上之、つ、ミ一折遠山、正月一日きこしめさる、」あめ真木島進上、五月五日ちまき同之、赤松有馬も「伊勢守もちまき進上之、御厩かさりはうかけたれ布」赤松伊豆守進上之、御馬船遠山進上之、正月二日「御乗馬はしめに御しりかい・御手綱・腹帯・御くつ」伊勢守進上之、其外諸大名分国々の銘物共、武衛ハ「さよりと申候いおなと、一色殿ハたんこいわしなと方々」種々有之、たいこのうとめ・竹の子なと三宝院殿「御進上之、其外法中侍者方雖有之、只今失念也、

一御具足兩人してかきて懸御目事、あとをかくハ」上、さきをかくハ下也、けりやう兄弟候て、かきてまいらは「おと、ハさきをかき申へき也、そうして御くそくに」かきらす、兩人の時ハ此分たるよし申候へ共、まないた」などの事ハさきをかく事しやうくわんのやうなり、「懸御目で、其ま、御前にかき申様牀有之云々、

一如此の役人の事、御くそくの事ハ、御紋せられ候方」もつはら也、又ハ御もんせさるかたも勤申候、京極なとへ」御成の時ハ、京極同

名かきて参候段勿論なり、「まないたの事ハ、まれなる事也、大りやく伊勢同名」所役のやう也、但其やくに伊勢名字被相定にてハ」無之、もとく見及申候ニ、必々彼同名也、さやう」のかた祇候候ハて、御事かけ候ハ、御もんのかたにても」不苦也、

一観世大夫に御盃可被下事、そうへつ猿楽・田楽なと」にハあるまじき御事也、但けんこ内々の御儀にて」被下候御事なとハ、一向かくへつの御儀也、それさへ」さうなう無之御事也、

一面向御成之時、晴光馬の前後にもたせ候へき」たうくの事、例式ことなる儀なし、さきへはしり候」小者にハ打刀、其次少引さかりて力者になきなと、」猶少引さかりて右のかた弓うつほつけさせ候もの、其次」猶少引さかりて左のかた馬より少す、ミて、太刀もち」たる中間、その右のかたに中半たちもちたる中けん、」おなしとをりなるへし、あとにハかきもち人夫、かさ」ふくろにくらおほいをかけ、したてをゆいつけてもたす」へし、弓袋の事ハ細々、ことに遠路ならぬ御供之時ハ、」もたせらるへきに不及、遠路にて候ハ、もたすへし、」さきはしり候小もの、あと中ほとに、少左よりに」あるへし、次手やり、又ハたなとの事は、遠路にて」路外なとへハもたせられても可然、その段ハ馬のあとに」うちつ、きてあるへし、馬をとるへき馬屋のものと、」かさもちとハ馬にちかくとあるへき、そのあとにうち」かこミてやりもちあるへし、そうしてハ路外遠路」たりといふとも、かやうのなかくそくハもたせさる」事も勿論也、去応仁乱已前御参宮の時、御供衆」はやりなともたせられ候とハ見及候ハす候つる、但」山名入道殿、諸大名内々参候ハ、山名殿こしのあとに」ちかくと、しゅゑのやり三十ほんハかりもたせられ候を、」たしかに見物仕候き、次中半たちの事ハ、もたせ」候ハて

もくるしからず候、又小太刀をりやくして中はん」たちハかりをもたせられ候事も勿論也、然ハ小たち」もち候かたの左にあるへし、然者小太刀・中半太刀」二ふりもたせられ候段も尤可然候、一ふりもたせ候か」不足のかたへハはなるましく候、中半太刀と申候も、「小たちのちと寸のひたるにて、おひとりなとあるたち」の事也、

一御所／＼の御事、御参と可申哉、又御成と可申哉之事、「御参と可申段可然候、御成とハ申へからず候、但かけ」にての申詞ハ、自然御なりと申てもくるしからず候、「その御人にたいし申てハ、さやうにも可申候、或者公方様」御前、或ハき、と候御時などハ、御参と可申事也、

一同御はいせんの事、御所／＼と申候ハ、いづれも御ひくに」などの御事にて、悉皆女中かたの御はいせんなり、然に「御所／＼御まへ江ハ、中臈ハまいらせられす候、小上らふ」御はいせん候、然ニ法住院殿様御代・惠林院殿様御代」にハ、御台様御さ候ハて、御供衆御はいせん申させられ候事」も御さ候つる、惠林院殿様御代ハ、一度にても女中衆」御はいせんハなく候し、

一奉行衆・同朋衆御成申候事有之哉否、其外諸」大名被官も申事有之哉之事、奉行中ニハ今の」飯尾左衛門大夫祖父永昌肥前守、其外飯尾大

今の左衛門大夫伯父也、

和守・飯尾肥前守之種これハ応仁乱前也など御成を申候、松田丹後守」先祖ニも申たるやうに承候き、又同朋ハ、今の春阿」ためにハ曾祖父これも春阿と申也、応仁乱前ニ申候、上池院」なども其比申候、是ハ伊勢守宿所をかりて申たる」之由候、又今の摂津守祖父修理大夫之親朝臣、これも其比御成を申候、次大名方被官人之事ハ、近代無其儀、」むかしハ武衛に

てハかい・織田、畠山殿にてハ遊佐、」細川殿にてハ香西そのほか候哉と御成を申候、山名殿」にてハかきやも申候、如此之段もとくより其御さた共」にて候、正実物語仕候、正実曾祖父御成を申候、進上物」など一段の事候由申候、惣別分限過分ニたふも候ハ、一番方衆など御成可申段勿論候得共、さやうの段」不弁によりさたに不及御事也、

一官位同から名の事

公家方官位之儀ハ一段之事共也、於武家方儀者、」能々可得其意段肝要なるへし、先以八省之事、」もつはら奉公のかた／＼なりきたれ候、然ニ八省輔」に可成事ハ、うちまかせてハいか、に候、御紋の衆ハ勿論、」又御もんせさる方々事ハ、其家になりつけ候方自然ハ」別而致忠節儀にて、御ほうひに被成候事などハへち儀也、」何の由緒もなく、おしつけ／＼申請へき事ハ、上意にも」難有御裁許御事のミなるへし、中・式・治・民・」兵・刑・大・宮也、かやうに次第の上下ある儀にてハなし、た、何も大かいおなし事也、其内にて少の心へハ」有之也、

一中務卿これハ親王御なり候間 大輔 少輔これハまへに 丞これハ

誰々も 唐名中書

式部卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>同前、但此太輔ハさうなうなされす候</small>	丞 <small>同前</small>	唐名吏部 <small>りほう</small>
治部卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>此太輔たれ／＼細々ハ不被成也</small>	丞 <small>同前</small>	唐名礼部 <small>れいほう</small>
民部卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>御紋衆其外も依由緒不被成也</small>	丞 <small>同前</small>	唐名戸部 <small>こほう</small>
兵部卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>同前</small>	丞 <small>同前</small>	唐名兵部 <small>へいほう</small>
刑部卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>同前</small>	丞 <small>同前</small>	唐名刑部 <small>けいほう</small>
大蔵卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>同前</small>	丞 <small>同前</small>	唐名大府 <small>たいふ</small>
宮内卿 <small>同前</small>	太輔少輔 <small>同前</small>	丞 <small>同前</small>	唐名司農 <small>しろう</small>

以上八省也 此内大藏ハ少からし

一 左馬頭 これハ公方様武家の御元服時初官にて向ニ武家衆不被成之 助 八省輔はと 允 下々たれも任之 唐名「典厩

右馬頭 これハ八人により被任之 助 同前 允 同前 唐名同前

兵庫頭 八省輔 助 此助ハ諸侍たれも任之 允 同前 唐名武庫

縫殿頭 同前 助 同前 允 同前 唐名尚衣

玄蕃頭 同前 助 同前 允 同前 唐名典寮

掃部頭 同前 但此頭ハたれも不任 助 同前 允 同前 唐名洒掃

雅楽頭 同前 助 同前 允 同前 唐名協律

図書頭 同前 助 同前 允 同前 唐名秘書

大炊頭 同前 助 同前 允 同前 唐名道令

木工頭 同前 助 同前 允 同前 唐名工部

主計頭 同前 助 同前 允 同前 唐名計部

一 隼人 正同前 佑 同前 唐名布護

一 判官 高官ならねとも不成付家にハ不被成也 唐名廷尉

一 監物 諸侍任之 唐名侍御

一 將監 左右將監にハ諸侍も任之、大夫將監にハたれも被任之様にハなし 唐名勾勘

一 勘解由 諸侍も任之 唐名内率

一 帶刀 同前 唐名内率

一 藏人 同前、但藏人承などに任之也、 唐名京兆

一 左京大夫 たれも打まかせて不被任之、諸大名專被成之 亮 下たれも任之 進 同前 唐名京兆

一 右京大夫 同前 亮 同前 進 同前 唐名同前

此右京大夫ハ細川家被申請之、他家にハ一向不被成之、

修理大夫 子細左京兆 亮 同前 進 同前 唐名匠作

大膳大夫 同前 亮 同前 進 同前 唐名光祿

此四の大夫を四職大夫と申也、此内にて大膳ハ少からし

一 彈正大弼 武家方近代不被任之 少弼 たれも不任 忠 たれも不任 唐名霜台

一 左衛門督 これハ大中納言兼官にて一段きほの官也、武家ニハ島山殿懸御被任之、 佐 是も誰々も不成之、諸侍 唐名金吾

右衛門督 左に同之、但左 尉 同前 唐名同前

一 左兵衛督 鎌倉殿被任之御官にて候間、 佐 同前、但頼朝御成候間 尉 同前 唐名同前

名武衛 尉 同前 唐名同前

一 右兵衛督 大い同前 佐 同前 尉 同前 唐名同前

一 受領事 陸奥守 唐名奥州 武蔵守 唐名武州

相模守 唐名相州 伊予守 唐名予州

讃岐守 唐名讃州 尾張守 唐名尾州

上総介 唐名総州 阿波守 唐名阿州

安房守 唐名房州 淡路守 唐名淡州

播磨守 唐名播州 伊勢守 唐名勢州

摂津守 唐名摂州

此受領共事、由緒なくてうちまかせてたれも不被成之や

う也、殊武蔵守事ハ、細川殿別而重代の受領也、此内にても

はりま・摂津などハさまでなし、將又上総守にハ、親王被任

候御官にて候間、凡人一向不被成之、仍上総介と被成之也、

大和守 唐名和州 山城守 城州

伊豆守 豆州 出羽守 羽州

越後守 越州 因幡守 因州

丹波守 丹州 丹後守 丹州

備前守 備州 備中守 備州

備後守 備州 伯耆守 伯州

出雲守	雲州	但馬守	但州
河内守	河州	美作守	作州
近江守	江州	美濃守	濃州
飛彈守	飛州	隱岐守	隱州
常陸介	常州	上野介	上州
下野守	野州	伊賀守	伊州
加賀守	加州	甲斐守	甲州
紀伊守	紀州	下総守	総州
土佐守	土州	佐渡守	佐州
和泉守	泉州	若狹守	若州
信濃守	信州	参河守	三州
遠江守	遠州	駿河守	駿州
沓岐守	沓州	安芸守	芸州
石見守	石州	能登守	能州
越前守	越州	越中守	越州
周防守	防州	長門守	長州
筑前守	筑州	筑後守	筑州
豊前守	豊州	豊後守	豊州
大隅守	隅州	日向守	日州
薩摩守	薩州	対馬守	対州
志摩守	摩州		

此商四介事子細
上総同前

此大和守已下受領共ハ、諸侍たれくも被任之也、受領」をハ
外官とも申、又あかたとも申也、百官をハも、敷」とも内官と
も申也、百敷と申とて、必百の官にてハ」無之といへ共、数の
おほきかたに取なして、百しきと」申ならハしたる云々、此受

領の内にも、大和 伊豆 越後 下野 因幡 下総 近江」
美濃 周防などハ少かとあるやう也、

一位事、一位・二位・三位などの事、公家方之儀」不及申事共也、
一諸侍などハ七位・八位など、申儀あり、大かいハ六位・五位」の心
也、然ニ五位の事もうちまかせてハ不被叙也、四品」と申御事、武
家方にハまれなるやう也、四品にもちく」有之、従四位下・従
四位上・正四位下・正四位上など有之、」武家衆ハ多分従四位下に
被成候、近代武家にハ一色」修理大夫義直朝臣・細川右馬頭政国朝
臣・伊勢守貞宗」朝臣・摂津守政親朝臣・二階堂中務権太輔政行朝
臣・大館」陸奥守政重朝臣・畠山左衛門督政長朝臣・当時摂津守」
元造朝臣・将又常興も法住院殿様御代四品仕候、次武田」大膳大夫
元光朝臣も四品也、これハ当御代、其外諸侍ハ」大略六位の趣也、
一三職事ハ、武衛・畠山徳本などハ上階せられ候、上階とハ」三位に
被叙事也、次近代大内当代まで三位せられ候、赤松」左京大夫も三
位候、かやうの事一段まれなる儀也、
一三位・二位・一位などになられ候人の名乗をかくにハ、名乗の」下
に卿といふ字をかく也、われとハか、さる事也、又四品の」人の名
乗を書事ある儀ハ、其名乗の下ニ朝臣と書事也、」是もわれとハ名
のりの下ハか、さるもの也、
一上様御成式日事、正月二日管領、六月七日京極、祇園会」御見物御
成也、りんし又ハ何かたへも御成之儀有之」御事也、
一於殿中猿楽させられ候時、御服など被下候様鉢の事、」左のうてに
うちかけて、右の手をそへてもちて可遣之也、」物のふたにすゆる
に不及、但御ふくの数三五などあまた」の時ハ、御ひろふたにすゑ
て、御ひろふたなから渡遣之、」御ひろふたハやかて可返上申也、

御ゑんの上へめし上候ハて、「御庭へおりて大夫に遣之也、さりながら、当座の様牀」によりて、御ゑんへよひあけて遣事も、しせんハもとくも」御きありし也、そうしてハまへに申ことくなるへし、将又」御太刀なども同前、但そうして御太刀を被下事ハ」無之、けんこ内々御儀にハ、御太刀も可被下也、面たち」候而の事、さやうにハ無之、次要脚之事、これハ折紙に」そのいんしゆを書申て遣之段、毎々御さ候段めつらし」からず、又けんもつをふたいにつませられ候事、殿中」にてハ無之様也、但大心院一こん申さた候て、のうを」させられ候、其時けんもつをつませられ候事候、御供衆」もちて被出候て、ふたいにつまれ候、然三細川典厩以下」とかく被申儀共候て、御もんせられす候御供衆もちて」被出候と存候、次先御代畠山式部少輔所へ御成を」申、さるかくさせられ候時、けんもつをつませ候時ハ、御供衆」にて候ハて、伊勢同名衆もちて召出、ふたいにつまれ候」よし承及候、われくなどハしこうせず候間、慥見及」たるにてハなく候へ共、如此承及候し、惣別諸大名へ御成」之時ハ、何もけんもつをふたいにつミ候ハ、其家の同名」衆・御供衆にて候ハぬ人々もちて召出、つミ候、殿中の」事ハ、いつもおりかミにて被下候、其段ハ伊勢守所役」のやうに候、又ハ御供衆中たれく」にても、依時宜如此也、」あなち御もんせられ候にかきりての所役にてハ無之、」又大名かたにても、折紙にて被遣候時もある之、其段ハ」其家の同名御供衆に有之人の所役のやうなり、」さやうの折紙、御前にて遣候事ハ、御供衆にても候ハぬ」同名ハ仕候ましく候、大心院之時、故房州被遣之候をも」見及候き、自然さやうの同名御供衆になく候かたハ、」勢州取次之、如常被遣之也、何も被御覧候御とほり」にての儀也、殿中にてもものうなとさせられ候ハ

て、自然」御ふくなど被下候事ハ、かけにて遣候段勿論也、同朋衆」御前にて如此渡候事ハ見不及候、

一於殿中さたまれる御いつこんの事、正月十四日御会所にて」御台様其外御所く」にハ南御所・入江殿・惣持院殿・し、う院殿」御座候て、御いつこんあり、日野殿・管領同祇候、御はいせんハ」女中衆にて御入候、御供衆ハしこうにて、めし出にハ被参候、」此時けんけうともしこう仕、平家申させられ候、さやうに候て、」及晩常御所へ還御成て、御にしむきの松の御庭御かかりなり」にて観世松はやしを仕候、松はやし過て、例式の能を仕候、」此のうのうちに必しやりを仕候、十二と申猿衆と兩人」して此能を仕候事、御賀例なり、此時公家衆にハ、」日野殿・三条殿・烏丸殿・飛鳥井殿・藤中納言殿父子・管領・」細川殿当職ならねども・讃州・一色殿祇候、其外の面々ハしこう」なし、御供衆之事ハ不及申、皆々祇候也、此儀にかきり」申次衆などハ見物させられす、御部屋衆ハ御供衆次に」しこう也、如此之御一こん、さたまれる御事也、但男衆御」さうはんハ無之、れん中に公方様も御さ候、御所く」御会所にての御衆御さ候、しつかい女中むきの御儀也、公武共に御ミすの」外にしこう、御供衆ハおきゑんをせられてしこうなり、」此時も走衆ハ庭上御前の御とをりに、左右三敷皮にて」しこう、六人也、次日吉井田衆、庭上にしこうさせられ、」のうをほめさせられし也、如此儀は応仁乱前之御事也、」一其後ハいまた礼中也、正月十三日、毎年常徳院殿さま慈照院」殿様へ御せちを御申にて、四季十二間と申御座敷の御ひろ」ゑんにて、のうをさせられ候、これハれん中より被御覧、しつかい」ことく祇候、然三和泉両守護毎年しこうさせられ候、其比細川民部太輔殿・刑部少輔殿と申候し也、これハ」常徳院殿御産所をきんし被申

たるゆへにて、しこう」させ被申し也、御供衆中にしこう也、

一此外にハ、二月朔日・七月朔日・十二月朔日、面向にて御「こん」さたまれる御儀也、但これハのうなどハさせられず、た、「三献まいる也、於于今此段ハ御さある分也、

一正月四日、三間御厩にて観世うたいそめさせられ候事、これハ「き、と御いつこんなど候て、大名しこうほと御儀にてハ」なし、御供衆ハことくくしこう、然番方一番申さたの」分にて、一番の番頭しこう也、

一如此之外ハ、於殿中さたまれる御儀式無之、

一年始に御所く御参候事、これも女中方への御儀也、「正月十一日御分也、先御代などにハ御供衆御はいせんさせられ候、」其ゆへハ、御台様御さなきによりて、一向ニ女房衆しこう」なく候間、如此御さ候し也、

一上様として、公方様へさたまりて御「こん御申さたの事、」又公方様より上様への御事、何もき、とさたまりての」御事、不承及候、一女中衆御ほかいの事、知行共御もち候て、大かたふけん」御入候にハ、毎月の下行無之候し、知行など御もち候と「いへ共、かいくしからぬかたくハ、さたまりて下行候、然に」我等御局出家候てのち、陽西院と申候し、先年少知行候」といへとも、かいくしからぬやうに候て、御ほかい被仰付之」下行候き、就其当御代始、御さこの御かた御ほかい」の事、御さたに及候事候つると存候、其時やうせい院の」引かけにて、御験候つるやうに存候、椿阿おほへ被申候事も」候へき哉、無足の御女はうしゆハ、御ほかい殊以勿論、御きりふ」をもたまはられ候、

一御小者月宛事、むかしよりの御儀にて候由承候き、其外」諸大名ニ

被仰付之、過分御ふち共有之云々、御小者之事ハ、御成之時第一はれくしき儀式によりたる事也、

一御小者定つめの事ハ不承候、別而就御用之儀、つめ」させられ候事ハ各別之儀也、

一御折紙方之事、必御倉へ納申段勿論也、然ニ折紙方」之奉行と申候て、一人被定置之、その奉行毎々」令存知事也、近代ハ松田丹後守至于今御折紙方」奉行也、

一から物・絵さんの物などの事、粉井所ニ又御倉を立」させられ候而、あつけおかれ候、又御要脚方の御倉にも」あつけをかれ候事も先例也、当時ハ粉井御倉無之、旁以正実御蔵におかせられ候段、勿論之御儀也、

一御太刀奉行事、必ちよくにて候哉儀、不存知候、時に」あたり、別而めしつかはれ候同朋に被仰付候段、勿論也、

一御馬屋之事、三間ニ定申候段、非其儀、惣別ハ先」三間本たる様也、然共公方様御厩ハ、七間と三間也、「三けんハ南より御会所之東のかたに被立之、武衛之内」甲斐に御対面ハ、三間の御厩にての御事、御馬屋の板」にて懸御目也、諸家の被官人にハ、かい一人如此なり、又」七間御厩ハ、それより北より御末のかた也、乍次申候、諸大名」厩五間・十けんなども有之、雖然細川殿にハた、三間也、

一社家方輩御対面、其内にて捨別之事、於次第者、」官位次第に懸御目也、其身くよく」其覚悟」にて参上也、申次として何ハ前、何ハあとなど、不及申、「それもことによりてさやうに申儀も可有之、惣別社人」にても、吉田神主ハ一かと有之やう也、平野神主なとも」大かた其趣たりといへ共、吉田事御用いの様鉢少」其かとり、賀茂上下社の輩も大かい同趣、上階」をも仕候也、然ともかや

うの息女めしつかはれ候ハ、何も」中臈に被參候也、伊勢祭主なども一かとあるやう也、」それも局ハ中らう也、

一善法寺事ハ、社家方と申なから、一かと御もちい、ことに」鹿苑院殿御外せきにより、取分御賞翫之儀にて、」御一こんの時しこう候へハ、御相伴也、

一門跡方同位之事、御室の御事ハ第一、自余三不准」御事也、其外梶井殿・青蓮院殿・聖護院殿・大覺寺殿・」妙法院殿・実相院殿・円満院殿・竹内殿・下河原殿など、」申候ハ、おなしほとどのくらいにて御入候、宮も御成候、其外」准后にも御成候、三宝院殿こんほん八日野殿御入候つれ共、」別而子細ありて、公方様御連枝をもなし被申、又准后」にも御なり候間、青蓮院殿などおなしほとどの御もちい」也、梶井殿・青蓮院殿・妙法院殿此かた／＼をハ、三門跡と」申て、山の座主をかはる／＼御もち候儀也、脇門跡にハ」定法寺山門の座主もたれたる事候由承候也、然共」先以三御門跡御もち候也、一脇門跡、定法寺・尊勝院・上乘院・住心院など、申候ハ、又同」はこの事也、此内にて定法寺ハ、少一かとある也、真光院、これハ」御室脇門跡也、是も一かとあり、如此之類、いまた雖有之」失念也、一不動院・花徳院・無量寿院・しやうりよ院・しやうしやく院・」妙観院など、申たくひハ、わき門跡より下也、此つれハ」おなしほととの事也、かやうの法中も、官位次第にある」事也、

一時にあたり宮々如此門跡に御なり候と、又撰家御連枝」などの門跡に御なり候と、前後御あつかひ候事、むかしも」御入候し、大かいハ宮門跡御す、ミ候やうに存候、又ハ日を」かへて御參賀の事もありし也、

一公家方之事、まへに如申、撰家と申ハ五人にて御入候、」何も同ほ

との御事也、時にあたりてハ、御官位次第に」御す、ミ候、五人の内にも、近衛殿ハ藤家の正ちやくにて」御さ候間、一段之御儀、然共撰家御もちい、先以同前の様也、」次清花と申候、是又まへに如申、転法輪殿・西園寺殿・」久我殿已下其たくひ同ほととの御事也、其外日野殿・」三条殿・広橋殿・飛鳥井殿・中山殿・冷泉殿・勸修寺殿など、」申たくひ、数多有之、そのうちにてすこしのせうれつハ」ある事ながら、大かいおなしほとどの御もちい也、かやうの」かた／＼も、時にあたりてハ、官位次第に御す、ミ候、此うちに」日野殿御事ハ、まへにも如申、御くはいせきにより賞翫」被申分也、それも官位次第勿論也、

一四ほんの事、まへにくハしくしるし申候、これハくはんにてハ」候ハて、くらの事也、三位の事もまへにしるし候、上階と」申候儀、三位の事也、

一御供衆・御部屋衆・申次衆・詰衆、其身／＼のくらの事、」我も／＼と被存事候間、分別無之候、御紋衆事ハ、其内」にての様躰、事ふり候、宿老をハもつはら賞翫のやうに」候事、古今のならい也、何の部わけにも其分たるものなり、

一此かた／＼へかけにて御酒被下候時、御酌の役人の事、」同朋衆なと勿論也、又御末御かけむしろのへんにて被下」候時ハ、女中衆・中臈御しやくにて給候し事毎々有之、

一上様御成候時、同朋をもめしつれられ候事ハ、公方様」御成のことく相定てハ更無之、上様御供衆ハ、すい分番方」のうちより參勤也、長井・佐々木大原・宮・小早川・」千秋・佐々木塩冶其外有之、一段はれの御成之時ハ、先年」小笠原・伊勢因幡守など參勤之事もありし也、因幡事ハ、」公方様御供衆にめしくハへられさる已前之事

也、同朋衆ハ」めしくせられす候、但自然めしつれられし事も有之、「一向まれなる御事也、事より時宜による也、同朋ハ」御末にしこうのうち也、

一くすし所へ御成之事、まへに如申、上池院御成を申候ハ、「伊勢守宿所をかりて申候也、其外ハ更無其儀、

一長老・西堂へ被仰出事、以折紙も申儀有之哉否事、同「公家方折紙にても申儀勿論也、仮令恐々謹言と可書を」恐惶謹言と書、恐惶敬白なと、書て、其寺号を書て「侍者御中、又ハ侍司なと、も可書候、其内にて西堂ハ、」長老よりハかろし、床下・足下なとも可然也、次公家事方」大・中納言のかたへハ恐惶謹言、又ハこれも敬白なとも」あるへし、大納言殿・中納言殿なと、ハか、すして、称号を」可書、けりやう勸修寺殿、かやうに殿文字をしんにかく」へし、人々御中可然、只今人々御中なと、もか、すして、「称号計をもさしあけて、殿文字いかにもしんに書事も」有之也、又殿上人なとへハ、恐々謹言、あて所ハいまた」其父御入候へハ、御方とかたに付事故実なり、けりやう」勸修寺殿ハ大・中納言にて、其息ハ殿上人にて御入候ハ、」御方勸修寺殿、かやうにかきて、かたに御方と付へし、」又当時広橋殿ハ、父御入なく候、しかるにいまた殿上人分」にて候間、かやうのはかたに御方とハ付候ハて、た、広橋殿」とハかりあるへく候、

一ふれ折紙之事、被仰出候との文言、又由候と書とめ」られ候、何も仰の詞にて候間、奉の字をわか名の下のわきに」可付事可然也、毎々武家方ニハてんをあふのミ也、又ハ奉の」字をくハふるかたもあり、法様ハ奉字勿論也、但御供衆へ」ふれ折紙有之て、ことくく台点之時、一人なと奉字」書へき事ハ、物しりたてのやうにも、

かへりて人のあつかいも」可有之歟之間、惣次のことくかつてんも可然也、

一面向御酒之時御食籠事、いかに面向たりといふ共、一段」の御いづこんなとにて御さ候ハて、御酒御さ候ハ、御食籠も」更々くるしからす候、もとくも其分也、御食籠ハふたを」とりて持參可然云々、かけこに種々有之を、そのま、」かけこはかり四はうに居てもまいる也、

一面向御酒の時せこの事、そうして内外共」御前の」御酒にせこと申事ハ無之、但ミたれたる御酒之時、」せこをもなと、仰につきてハかくへちの御儀也、仍」御酌の事ハ、依仰御前の御とをりにてならハ、御供衆」被勤申へきなり、

右条々先々承伝之、見及申分如此、但」注落儀在之、外見其憚候也、享祿五年六月 日 常興

左衛門佐殿

晴光判

右此一冊者、大館与州沙弥常興号宝秀院」以自筆本書写之云々、從晴光朝臣令」相伝之、就不可有他見者也、

從四位下源晴完^{朱印}

大和家藏書五

(表紙表題)「大和家藏書 五」

中表紙

(付箋)「大館伊予守尚氏入道常興筆記 五止

子息陸奥守晴光証判

(朱印「明治十四年改」)

諸説条々

諸人各已下年中出仕事

一 正月五ヶ日、三職をはしめて諸大名并御供衆・申次衆・番方々内
少々・節朔衆出仕、各大口直垂也、

一 外様衆中に少々国持の准に参方在之、又一日計「出仕之方も在之、

一 御部屋衆并走衆、一日計出仕、此輩ハこすあふ也、

一 公家衆少々参賀、五ヶ日也、

一 三職三人者、御太刀^金御進上之、五ヶ日如此、

一 御供衆之内細川淡路守ハ、御弓御笠懸引目進上之、一日計之儀也、

自身御前へ持参之、

一 十五日計山名方一人、御太刀^金、如三職進上之也、

一 御益事、三職并諸大名已下御供衆まで頂戴之、五ヶ日如此、

一 御盃被給候時、各御練貫一重宛拝領之、但三職者二重也、於御前
相渡申之事、伊勢守役之、其進退様躰、御盃頂戴ありて被退、物

被渡之時、御盃を「下におきて、両手にてうけとり頂戴ありて、さ
か月に」取そへ、退出之時、同名人次間ニありてうけとりて、供
之」者へ渡之、さやうの同名なき人ハ、われともちて、供者に」も

たせらる、也、如此御ねりぬき之儀ハ、一日計之事也、」此段者去
応仁乱前までの御儀式也、

一 四日、今日ハ所役三職已下諸大名小すあふの出仕也、」御供衆申次
衆已下同前、今日ハ常之外様数多出仕、

一 五ヶ番衆并奉行衆已下出仕、奉行衆ハ恩賞方衆^{御前}
くち・ひたたれ也、番方之内にても、少々大くち・直垂にて参方
も在之、

一 公家衆も参賀の方々在之、其外在之、

一 親世大夫・同四郎兩人参、於庭上懸御目也、

一 今日未刻時分、於三間御厩一献在之、大名衆ハ不被参」御供衆已下
祇候也、親世大夫座者、少々召具之、うたい」申させらる、也、

一 五日ハ吉良殿・渋川殿・石橋殿已下出仕衆在之、

一 六日、今日者出仕衆無之、

一 七日、出仕諸大名已下三日同前、

一 今日者外郎参、御菓進上之也、

一 一日吉大夫并田衆参、各於庭上懸御目也、

一 八日、護持僧参賀、其外評定衆已下出仕、護持僧御」加持在之、如
此方々ハ、聖護院殿・大覚寺殿・三宝院殿」など、申門跡已下、あ
またの御事也、

一 九日、今日者参賀衆無之、

一 十日、撰家<sup>近衛殿・九条殿・二条殿
一条殿・鷹司殿</sup>清花<sup>転法輪殿・西園寺殿・久我殿
徳大寺殿・花山院殿・大炊御門殿</sup>
在之、其外公家達并典藥・外記・官務已下数多」参賀也、

一 関東管領上杉雜掌判門田参、於庭上懸御目也、毎年」白鳥進上之、
一 十一日、禪家長老達少々参賀、鹿苑院・相国寺・崇寿院」等持
院・等持寺、此五人被参也、此外其時之蔭涼軒参」賀也、此内等持

寺ハ西堂たりといへ共一烈也、

一今日未刻、御評定始在之、管領并評定衆・奉行衆「出仕也、応仁乱前事也、評定衆と申ハ、摂津・二階堂・波多野・」町野等事也、

一十二日、法中已下参賀衆少々在之、北野衆参賀、

一十三日、同前、賀茂輩并東岩倉衆、これハ法中也、参賀、

一十四日、今日ハ出仕之儀無之、但昼時分より御会所へ「渡御、御台様同御成、次南御所・入江殿・惣持院殿・慈受院殿」御参、其外日野殿・管領祇候、其外御供衆同祇候也、仍「御一献在之、

一けんけうとも少々参て、平家申させらる、也、其後及「晩常御所へ還御、

一夜に入て、御西向松の御庭にて観世松はやし在之、其後「常之猿楽在之、

一祇候之衆ハ、日野殿・三条殿・烏丸殿・飛鳥井殿・藤中納言殿・」管領・細川殿管領ならざる時も・一色殿・細川讃州、其外御供衆計也、」今日にかきり、凡祇候方々如此相定儀也、

一日吉大夫并田楽庭上三祇候、

一如此十四日之儀ハ、応仁乱前迄之事也、

一十五日、今朝出仕七日同前、先条々如申、今日ハ山名殿如三「職御太刀進上之也、

一朝の御対面已後、御にしむき松の御庭にて、三吉丁は「やし申、其時御供衆庭上に祇候也、

一十六日、御倉正実已下出仕、御太刀金進上之、其外少々出家衆「在之、

一十七日、善法寺参賀、御太刀金進上之、其外鯛二十進上之、
一今夕御的在之、三番三度弓也、応仁乱前迄ハ、装束ハかさ」おり・

すいかん・くすはかま也、其已後ハ風折ニ大口・直垂、又ハ折糸」ほしに大口・ひた、れにても在之、

一御的過て、其夜公方様被遊御うしる弓、一色殿也、又ハ」先々へちに被参候方も在之、

一如此ありて、諸大名已下御太刀金進上之也、

一十八日、夜に入て、鬪的はしめ在之、畠山殿同名衆・伊勢」同名衆三人仕之也、三吉丁五本はやし申、光にて射させ」らる、也、公方様不及被御覧之、

一十九日、日吉樹下参賀、

一八幡御へいまいる、

一今日八幡へ御代官参在之、

一廿日、山徒并衆人等参賀、四条上人も被参候也、

一廿三日、七条聖参賀、

一御台様へ之御礼事、三職已下諸大名ハ、一日・七日・十五日被参也、」四日にハ小侍所と申御座敷へ春日御局出座ありて、」御台様御代官と申て、外様衆・番方・奉行衆已下悉」対面在之、御台様ニしこの女中如此あるへき事」なから、むかしよりの御儀式にて、公方様にしこの春日」との出座也、

一二月一日ハ、三職并諸大名其外御供衆・外様衆已下出仕、御対面」已後則一献三こんまいる、御相伴ハ日野殿にても、三条殿にても、」公家一人、其外三職はしめて御相伴衆之大名着座也、」いまた御相伴衆にも不被参、又御供衆にも無参懃国持之」外様少々在之、此かた／＼ハ、三こんの内公方様御酌」之時、一度めし出に被参也、御供衆ハ、毎度めし出しに」被参也、但初こんハ御相伴衆ハかりにて、めし出無之、此趣」今日のいんこんにかきらす、一段御いんこ

んの時之儀式也、」仍御供衆のきほと申ハかやうの事也、

一 かやうに御相伴衆にも御供衆にも被參ぬ国もちの方々」をハ、国持之外様と申ならハす也、例式の外様と申にハ」様躰各別儀也、

一 御相伴衆の大名の子息、いまた御相伴にも御供衆にも」不被參候、国持之外様の中に同ことく祇候也、

一 諸大名之内、父子ならへて御相伴衆ニ被召加候事在之、然に」御いんこの時、父の御相伴候へハ、子息ハ御供衆中ニしこう」候て、めし出にも御參まいる候也、自然へちに御相伴衆大名不」被參時ハ、父子共に御相伴候事も勿論也、

一 御対面之時、諸家被懸御目次第事、御相伴衆ハ三職已下」次第相定間、其分也、国持の外様ハ次第不同被參分也、」其内にても様躰在之、将又御供衆之事も、いかにも次第」不同之分古今如此也、

一 供奉之時馬打の御釵役、一人ハ一番にす、ミテ被參也、其外ハ」一向次第不同に被參也、前後次第の事ハ、御晴の時の一騎」打などの儀也、

一 三月、同節句、四月、五月、同節句、六月、七月、同七夕、八月、」九月、同節句、十月、十一月、十二月朔節出仕之様躰同前、」

一 此内に七月一日・十二月一日ハ、二月一日のことく三献參也、」様躰同前、

一 如此年中三ヶ度一献之時、畠山殿より白鳥一・熨斗」蛇千本・御樽天野五荷、毎度進上之也、

一 三こん調進候事ハ、此献御料所伯耆国に在之、当于時」被預置之知行之輩所役也、先々ハ進上此分也、

一 二月一日ニかきり、諸大名・国被持かた」ハ千疋宛折紙」進上之、一歳暮御礼事、廿日四条上人、廿三日七条聖參賀也、」廿五日より打

つ、き、大晦日まで毎日出仕之儀也、廿六日にハ」けんけうともも參也、廿七日撰家已下御參、廿八日ハ例日」にて參賀衆無之、廿九日ハ五ヶ番已下出仕、晦日ハ諸大名」已下正月五ヶ日同前、長老達今日參勤早朝也、次奉行」衆も今日出仕、これハ節朔衆打つ、き懸御目也、

一 此外出仕事、十月御亥子、及夜陰諸大名已下出仕也、一立春の出仕とて、年内たり共、明春たり共、立春の日諸大名」出仕也、此段ハ至近年不及其沙汰、

年始碗飯出仕事

一 正月一日管領、二日土岐殿、三日佐々木殿商家各年、」七日赤松殿、十五日山名殿、各装束ハ大帷也、大かたひらと」云ハ、大口をきて、そのうへに大きなるかたひらをきて、其上」三直垂着用也、そのひた、れハ、うちうちにてハなくひとへ也、」かやうに大帷の時ハ、刀ハさやまきたるへし、各騎馬の事、」管領ハ十騎、其外ハ三、つかい六騎めしくせらるへし、如此」騎馬衆も、大かたひらたるへし、出仕ありて、式三献まいりて」御盃頂戴之、

年中諸大名江御成事

一 正月二日管領、今日之御成にハ、御供衆大口・ひた、れにて」供奉也、走衆ハ常之小すあふ也、

一 御台様も今日ハ御成在之、

一 女中衆あまた被參、出車也、

一 御一こんハ、女中方の御儀、仍御相伴衆・大名不及被參、」御はいせん女中衆被勤申之、

一 手永ハ御台様御供の人々參勤也、御供の人々へ取わた」す事ハ、其内の被官衆也、今日ハ猿樂無之、

一 正月五日、畠山殿^江御成、御供衆常のこすあふ也、

一 今日ハ御台様御成無之、仍御相伴衆・大名、其外日野殿、」不然者三条殿など、何も公家一人也、被参也、

一 猿楽在之、観世大夫、

一 十二日、武衛^江御成同前、

一 廿日、赤松殿^江御成同前、

一 廿二日、山名殿^江御成同前、

一 廿三日、細川殿^江御成同前、

一 三職内当職之時ハ、打つ、き両度被申入之也、

一 手永事、御供衆御配膳之間、家子并被官衆にても」年寄分勤之、同名之人も其分也、又ハ依其仁牀、不」限三職、諸家此趣也、

一 廿六日、佐々木京極殿^江御成同前、

一 同日還御^三畠山播州^江御成、御嘉例也、及深更如此、猿楽」無之、於京極殿ハ在之、

一 二月十七日、一色殿へ御成同前、猿楽在之、

一 四月^{日ハ不定}_{以吉日}、土岐殿へ御成同前、同、

一 如此御成時、藤中納言殿馬にて御供衆次に少引さかりて」被参、御ひん并御ふくめさる、役者たるによりて也、

一 此外年中御寺方以下方々渡御在之、

衣装已下事

一 大帷之時ハ、刀ハさやまきを可被用也、太刀ハ黒太刀を可」被持、うら打大口直垂之時ハ、常之刀不苦、さけおの事ハ、」式之儀ハさや、是ハ引目さけお也、常の儀ハ、或ハ紅、或ハ」浅黄・もゑき・紫・こんなと不苦、此うちにてもむらさきをハ」用捨之方も有之、皆茶之事ハ、公方様御こし物多分茶を」本に御用之、仍令斟酌之、

但五分またら・一寸またらなどの」時ハ、茶もくるしからす云々、一すきすあふの事、六月一ヶ月可有着用儀也、雖然五月」五日より七月中被用之段、くるしからす云々、

一 小袖の事、おり物并桐の付たるをハ不可有着用、従」公方様於拝領者、いかにも着用勿論也、諸大名被官衆などハ、」織物の小袖さして不苦、但就公儀殿中祇候時ハ斟酌可」然之、次あわせの事、へいけん本儀也、然共若き輩ハぬめの」あわせ被用之段勿論、近代ハ宿老も着用之、如此之趣、時代」したかふならひも有之間、不及申、

一 唐物ハ御禁制之也、入道已後如此類何も不苦也、

一 彈正・判官ハ、直垂地をかちんにても、くろ・茶にてもそめて、てう」こを可被付事、定れる法様也、うらうちうのうらハかう」たるへし、ひた、れのこしまち同香色たるへき也、つねの」上下もてうこにて、地ハくろくあるへし、こしハ上下の時ハ」きぬにてあるへからす、同くろかるへき也、扇ハ六ほね也、」鞆もくろしりかいたるへし、平世如此たるへし、彈正にても、」或ハ彈正大弼・少弼などハ必此分なり、同事ながら忠ハ」不斷儀不及、其段判官よりハ大弼・少弼一段上の官也、然共」判官も、衣装分同前なり、大弼」被任事、近代武家方無之、」なるましきにてハ無之云々、少弼之事も、打まかせてたれ」も、可被成官にてハ無之也、むかはきなどもくまの皮を」被用儀也、

一 公方様御走衆并御小者きやはんも、は、きの事、十月」五日^{北野御経也}より明年三月三日迄被用之也、

一 扇をかけにをく事、不得其意事ながら、近代如此あり」きたれる間、不及是非、惣而ハしやくの代の心也、されハ公家」かたにハ御対面之時も、もつはら手にもちて被参也、武家」方之衆にかきり、御前

へもつましき事に覚悟せり、「こしにさして被参候ても、更以自由緩怠之儀にあるへ」からす、しかりとて、於御前ひらきつかふ事ハあるましき也、

一御供之時、馬上にて返しも、たちとる事、洛中儀者」無其儀、はかまのそはをおしかいて可有乗馬、但雨雪」などの時ハ、返しも、たちくるしからす、又洛外への事ハ、」雨雪ならずとも、返しも、たちをとらるへし、

一御供の時、馬上にて笠さす事、自然弓うつほにて」供奉之儀有之、弓もちてかさすに、常の八尺かさ」などのゑもふときにてハさしにくき物也、さやうのハ」ゑをもすこしほそめに、笠もいさ、か八尺よりハちいさく」こしらへたるか故実也云々、弓うつほにて供奉之事ハ、」洛外への時の事也、御弐役者ハ不及其儀、次御供之時」脊をはくへき事勿論也、但あしなかにて乗馬も、御供」之時ハ一の故実也と申ならハしたる也、

一御参内事、年始ハ正月十日也、先々ハ御車にて御参也、」其時ハ内裏にても四足御門より御参入也、御供衆ハ御車の」あとに各かちに、打刀をもちて被参、はかまのそはを」たか／＼とはさみて如此うら打などにもなし、常の」上下也、内裏にてハ敷皮にて庭上に祇候、又御ちよく簾」とて、常の御ぬりこしにて御参内も在之、其時ハ唐門より」御参入ありて、なかハし殿^{台也}にて御かむりをめされ、御式」装^ニ被改之て、めんたうつ、きに御前へ御参也、其時ハ」御供衆ハ乗馬にて被参て、下馬已後則打刀をもちて」御供ありて、これも敷皮にて庭上に祇候也、

一歳暮御参内も同前、^{十二月廿七日也}

一如此かちにて被参、自然雨雪之時ハ、手笠をわれとさして」可被

参、左にハ打刀、右の手かさをさ、るへし、自然として」うてなと煩事在之者、中間にもさ、せらるへし、其段ハ」略儀也、ちはん心へ如此、

一大かたひらにてのるへき鞍の事、必つ、ら切付たるへし、仍」うるしにて、何にてもそと絵を可書事故実云々、た、」無紋にあるへき事ハいか、也、毎々無もんのつ、らきつけ」見及候、先達被申しハ、さハあるましきやうに有之、

一諸大名被官衆、或ハつしかため、或ハ女中などのこしそへに」打刀・太刀など自身引さけてもつ事あり、然^ニ打刀よりハ、」さやうの時ハ、小太刀をもちたるか可然由申ならハしたる」事也、

官途事

一公家方にハもつはらこれ肝要也、家高と申も官位の高」下によりての事にて上下ある儀也、いかにむかしハ摂政」関白の家たりといへ共、官途なりおかれて及数代ぬれハ、」先祖の高家ハいらぬ儀也、松殿関白と申て、平家時代」一段の家高にて、殿下ののりあいなと、平家にも申たる」などの事なれ共、御子孫官位なりさかりて、近代ハ一条殿」の殿上人にならせ給ひて、そのかミのくらのさたに不及」事まのあたりなる事也、仍武家方の事、一向^ニ官位に」不及、其家々の儀せいを被申のミ也、雖然、左衛門尉・兵衛尉、」左京亮・修理亮など、申たくひの、六位・七位相当などの」官に成て、八省輔と申にハ不被成諸侍多之、近代ハ手」なりにてもありけるか、又ハいか、申請候哉、其先祖にきかさる」ハしやうのふに任官候かた／＼数多在之、随而上より」不被成をわれとなり候ハ、自任官とて、とかの一にて、御成敗」之様躰有之事也、惣別諸大名ハ、四品あるへき事なれ共、」さやうの儀によらず、家々様躰有之とて、所

望のかた」無之、且無念なる事也とて、先年為上意被相計、四品」させ申されし方一兩人有之し也、今とても、さやうの官位」心かけられ候大名これなきにあらず、尤可有存知事候哉、

土岐五郎所望之

大方可被存知条々

一公方様御儀、むかし鹿苑院殿様ハ、御官太政大臣、准后」にもならせおハしましけるとなり、御舍弟に小河殿と」申て御座ありし、仍御番衆被分進にて、小河殿衆と申て」少々祇候候ける、さやうに候て、小川殿御一期の後ハ、番々へ」返し被入候、彼小川殿ハ、御子孫御相そくの儀あるへからす」のよし候て、御息をハ糺門へなし被申候、殊勝なる御覚悟」の由申つたへ候、去応仁乱はしめまでも御座候し三寶院」御門跡も、小川殿御息にて御さ候也、

一彼三寶院殿御事、諸門跡中にも別而御儀候、公方様」御知音候て、天下の大小事をも申御沙汰之儀も在之、細川殿龍安寺なども、自然大事之儀をハ、此御門跡にて」被申入たるよし承候き、

一五ヶ番を被定置事、鹿苑院殿様御代、細川武州頼之」殿中へ被参候ニ、諸侍すきまもなくみちく」てしこうの」時もあり、又一向五人三人しこうの時もこれあり、仍武州より」此方先祖、常興為にハ高祖父かうそふとハひおうちのおやの事也中務少輔」氏信と申候に被申談之て、氏信をもつて上意申入之、」上意にも尤可然之由被仰出之て、五ヶ番に被相定てより」已来如此也、其時の注文、むしはらいの時拝見仕候よし、波々伯部伯耆守と申て、大心院之時はしりまい候者にて候か、」我等にも物語仕候し也、其注文と申候ハ、さうあん相のこりて、如此候ほうこのうらにて候よし、かたり候し、大心院已後」彼方乱に定

紛失たるへく候哉、氏信寺号をハ信光寺と」申候、その影南禪寺の仙館院に在之、鹿苑院殿さま御代」別而每事申沙汰之由申つたへ候き、其父ハ右京大夫」義冬と申也、

一御馬まはり三千騎申つたへ候ハ、もつはら此五ヶ番の」事也云々、

一公方様御官之事、鹿苑院殿様ハ相国にもならせまし」まし候、かやうに御位をたかく御沙汰候、勝定院殿様ハ、同」事なかくさやうにハ御さ候ハて、御官ハ内大臣までにて」御座候、普広院殿様ハ、左大臣までにて御座候、慈照院殿様ハ、」これも左大臣にて御座候、准后にハならせましし候、相」国事さうこくとハ太政大臣の御事也、其比禁裏よりも仰様に御さ候つれとも、かたく御斟酌候て、左大臣までにて御さ候よし、」其比承候き、随而内大臣のまへに右大将に被任候て、大将」御拝賀とて、一段大篇なる御はれ御座候、如此大将の」御事ハ、御代々二十二の御年御賀例の由承候、但」勝定院殿様・普広院殿様ハ、二十二にてハ御さ候ハす候、」鹿苑院殿様・慈照院殿様二十二にて御座候也、大将ハ右大将にて」御座候、御代々如此也、

一慈照院殿御代に、今出川殿と申て御さ候ハ、浄土寺の」御門跡也慈照院殿御舍弟也、然を御けんそくなく被申、小川殿の」趣候て、御番衆をも被分進候き、然処、応仁大乱はしめ」つかたハ、諸大名被申儀なと

をも被御申次、御馳走の様に」御さ候、其後御野心の御儀候哉、さうせつ共候て、御ちくてん」候て、数年ありて御侘言候て、御和与にて御座候し、濃州に」御在国候て、常德院殿御たかいの砌、御父子御上洛候、」然処、そのよくねんに慈照院殿御かくれまし」候時、」おのつから御代をもたせまし」候て、御方御所將軍の」宣旨を被成候由承候き、恵林院殿御事也、さ様にありて、」又其あくる年、大智院殿今出川殿御事也御たかい候、其後恵林院殿」御事、常德院殿

御動座の御意趣をそたてられ候はん」するとて、江州へ御進発御動座候て、江州より十二月に「御開陣候て、やかてあくる年二月に河州しやうかく寺へ」又御動座候、然間大心院不得其意子細被申之、きやうけん」院殿御事也、法住院殿様を取立被申、諸奉公衆已下こくとく被相触候て、御代さたまり申、將軍宣下など御」座候し也、

一 撰家清花の事、

公家方におきてハ、撰家第一也、近衛殿・九条殿・二条殿・一条殿・鷹司殿、此五家を申也、清花ハ、徳大寺殿・花山院殿・転法輪」三条殿・西園寺殿・久我殿・洞院殿など、申候、此たくひいた」御入候と存候、此人々ハ大将にならせ給ふ也、大納言・中納言に」被成候公家たちあまた御入候て、其内に内大臣にならせ」給ひ候、少々御入候へ共、大将にハならせ給ひ候ハす候、撰家・清花」のほかハ無其儀候、公方様ハ、右に申こく、大将勿論御儀也、」大将と申候ハ、内大臣より已下の官にて御入候へ共、一段しつ」せらる、御官之由承候、

一 親王家事、伏見殿一段撰家よりも上にて御座候、其外」ときわ井殿など、申宮々も御入候、第一ハ伏見殿にて」御さ候よし承候、如此宮々を竹園と申奉る也、

一 門跡之事、梶井御門跡・青蓮院殿・妙法院殿、此三門跡ハ」延暦寺山門の事也座主を御もち候、其外聖護院殿・」大覚寺殿・実相院殿・三宝院殿など、申たくひあまた」御入候、或者公方様御連枝、或ハ撰家御息、又宮々にも」ならせまし候、将又南都の門跡も撰家御息御なり候、一段」の御事也、然に准后にハ、南都御門跡ハ御なりなく候由」承候、宮門跡之御事ハ不及申候、其外青蓮院殿已下」

准后に御なり候なり、宮門跡又准后に御なり候門跡をハ、」御参之時御ゑんまておくり御申候て、御礼在之、いまた准后に」御成候ハぬまへハ、送御申に不及候也、

一 諸大名事、三職第一也、斯波殿武衛之事也・細川殿・畠山殿」此三人也、かわるく管領職被仰付之、当職管領之事也時ハ、屋形の」大門をひらかれ候、其まへをハ各下馬也、公方様御代官」として天下成敗之職たるによりて也、管領上表之時ハ」則大門をさ、れ候也、如此之間、彼門前をハよきて、へちの」道をとおり候事故実也、次三職外、山名家・一色家」已下何もすい分の家候也、御相伴衆に被参候段、細川」讃州・畠山匠作同前、仍前後之儀ハ、此面々ハ参次第也、」三職之次也、三職ハ職次第也、又佐々木・赤松方などハ、又」御紋せられ候方々の次にて候、又参次第也、近代ハ六角方、土岐・」武田方なども御相伴衆に被参候由候間、佐々木方など参」次第たるへし、随而大名と申ハ、上代にハ御紋せられさる」国持のかたくを申也、御紋の方々ハ、御一そくと被号の」よし、むかしの今川了俊と申せしめいしんの、書」おかれ候物に在之、然共、近代今にいたり、御もんせられ候」仁をも国もちたるかたくをハ、大名と申ならハしたる、」尤其分可然也、三職已下大名の号たるへし、

一 吉良殿・洪川殿・石橋殿三家之事

別而御しやうくわんの内、猶以吉良殿ハ一段之儀也、但三職事ハ、」管領存知之間、其下ニ出仕等之儀不可有之旨、いにしへ其趣」在之により、毎月の朔日出仕に、日をかへて吉良殿已下被参」のよし、もとく承候也、然ニ御しうけんなどに、惣次御太刀」進上の時ハ、吉良殿・石橋殿・洪川殿ハ、ことく進上、御末」しこのうの衆まで進上仕てのちに、申次御前へ参て、吉良殿」と披露申

て、御太刀進上候也、

一 先年 常徳院殿様御元服御礼ニ御太刀まいる候時、洪川殿と「石橋殿前後相論、於殿中其様鉢愚老も見及申候つる、」然間、其日申次畠山刑部少輔被伺申之処、慈照院殿様「御返事ニ、年次第と被仰出也、然処、其時洪川殿ハ石橋殿より若年之間、石橋殿す、ミて可有進上分にて候処、」洪川殿御太刀を申次へわたり被申て、其ま、退出也、仍彼「両家前後其已後未落居の様也、

一 当管領ハ如此御太刀まいる候時、一番に進上候て、其ま、御対面」所の御才ホネのうちに、公方様へむかひ奉てしこう候、いち後ニ、「申次吉良殿と披露申時、御前を退出也、むかしハ如此しこう」の間に、御そうたんと御さ候けるよし承候、慈照院殿様「御代、細川龍安寺職の時、しこう候にいかにも謹而しこう」候つる間、御さうたん御座なく候よし承候也、

一 公家衆ハ、吉良殿已下三人の後、申次公家と申入て御太刀「進上之也、常ことく、

一 侍所之事

上代にハ、細川家・山名方・一色方なども被仰付之、其外」にても存知方少々在之云々、近代ハ佐々木京極方・赤松」方被仰付之、京極方之時ハ、所司代ハ多賀豊後守、其後」赤松方存知候時ハ、所司代浦上美作守にてありし也、」近年にいたりてハ、侍所闕也、随而開闔事、侍所ニ申事」など令申沙汰役者也、侍所の寄人也、かいこうと申号ハ、侍所計にかきりてハ無之、神宮頭人ハ摂津、神宮かいこうハ」当時松田丹後守たる哉、かやうに自余之儀にもかいかうと」申儀在之云々、

一 政所之事、伊勢・二階堂打かへニ令存知也、当時伊勢守」存知也、

これも寄人として奉行衆のうちに在之也、

一 地方頭人事、当時摂津守也、これも寄人同前云々、

一 官途奉行事、先年慈照院殿さま、同常徳院殿様」御時、我等に被仰付之、数年令申沙汰也、其ゆへハ、其比」摂津修理大夫と申候し、暇を申、駿河国在国候時、官途」方事彼局春日殿申沙汰候、然に女房儀候て、相紛儀も」可有之、仍我等ニ被仰付之由上意候、いにしへ石橋家ニも」存知之例在之旨仰候間、御請申上之如此也、其時之記録」安東右馬助當時二番衆祇候也先年借用之間、かし遣を、度々の」錯乱に紛失候、近比迷惑之由、以捧文状被申間、不及是非候、」官途奉行存知之段者如此也、

一 彈正少弼と申官ニ令任之時は、上下ハくろ茶にても、かちん」にて、地を染てぬいめにてうこをつくるなり、大くちひた、れ」の時は、ひた、れも此分にて、ひた、れのうらにきぬをつけ」候、こしもきぬのこし也、然ニうらのきぬ并こし何も」うらにそむる也、まちなともきぬ同前、将又ひもハ茶の」いとまるうちのく之也、きくとち同前、公家のひた、れ」のひもの趣也、扇ハ六ほね、地かミハあさきにそむると」申候へ共、如常絵をかきたるもくるしからす云々、山名」少弼殿など如此、我等も先年此官に為 上意被任候時」如此也、惣別彈正と申官ハ、かやうにあるへき事勿論たりと」いへとも、彈正忠などにハたれくも、人の被官なともなる也、」さやうのしたてにて候ハ、かつて以無之、彈正大弼・少弼ハ必此分、」然ニ大弼事ハ、於武家者一向被任候方、古今不承候、あなち」一段過分の官とハ不存候へ共如此、又判官に成たるも此趣也、」二階堂行ニ・むかしの佐々木大原判官五番衆也なども此分」たりし也、判官ハ少弼より下の官也、

一細川殿としより衆、公方様五ヶ番の衆なミたるよし御さた」如何事、

さやうの段不承及候、其ゆへハ、御目にかゝり候事」以下も、皆相
かハリ候、さうにさ様のなミになるへからす候、」もとくよりけ
ふにいたりて、各参会の時も、奉公かたの儀ハ」各別にて、三職衆
年寄衆の座上になをり被申候、其かくれ」あるへからす候、

一當時茶湯をすきと申て、世上はやらかし候、鹿苑院殿様」御もてあ
そひの由申候如何事、一切無之候、世間ニ候」名物などハ、もち
ろん御物候、御茶湯など御もてあそひの」事ハ不承及候、於殿中御
茶湯ハ、御次の間におかれ候、」当時すきと申ならハし候ハ、町人
などの申出候事にて候、」た、商人の躰にて候、仁たるへき人ハ、

一不可然候、慈照院殿様」御代、名物共ハ悉御物にて候、我等も見及
申候、御すきの御」茶湯などさせられ候御事ハ、曾無之御事候、

一膳斎御相伴有無事

一五山西堂ハ御相伴勿論之御事候、膳ハ足付たるへし、

一会下長老之事

一是も御相伴勿論、膳様躰五山長老可為同前、惣別ハ」会下長老をハ
西堂のしゆんきよのやうに、もとく被申候し、然共、既紫衣御
着之上者如此云々、次会下の」西堂ハ、御相伴たるへからす存候、

一律家并浄土宗などの事

一是も長老にいたりてハ可為同前云々、時宗ハ上人御相伴」可為勿論
云々、

一禁裏様に祇候大上臈同佐殿事

一御相伴勿論、膳ハ三はうの由もとく承候き、

一正月十四日御松はやしの時、唐織物御服観世に被下事、御」広ふた
にすへ申て、松はやし已前に於庭上伊勢守」被渡遣之、

一同御台様御ふく十被下事

一段者不存知候、其御分候哉、然者被下様ハ可為同前候、

一御相伴衆一へん御しやくをとり被申候、其時ハすへ座に」しこうの
御相伴衆より、とりはしめ申さる、也、仍とるハ」十三献可参之由
候間、初献より五こんめまでハ、御供衆御酌」たるへし、御相伴衆
ハ、公武八人にて御入候とて候間、六こん」めより御さうはんしゆ
御酌たるへし、然者まつ六角」四郎殿御酌、其次霜台、其次右京兆、
其次公家衆、次」御ひさけハ何もく御供衆中・御紋の衆被勤申
也、」如此御さ候て、十三献以後猶以献被参候ハ、其時ハ御供
衆」御酌たるへし、

一畠山上野介殿より以使尋承候、転法輪殿被参候、御太刀」進上候、
当官大臣にて御入之由候、御太刀を申次取次申て、」可申入敷、又
自身可為御持参哉云々、いかにも御申次取次」被申て可然候、撰
家・清花ハ如此之趣申也、

一同転法輪三条殿被参候日記ニ太政大臣殿と可申付哉、同」御子息い
か、可被付申哉之由尋承候間、転法輪三条殿と、」殿文字を真ニ被
遊て可然存候、称号を被付申事、いかにも」御賞翫にて候、次御息
をハ、同御方と被遊可然存候由申之也、

一晴光從禁裏様御修理之儀ニ付而、御釵被下候、於庭上」御酒被下之、
公家達数多祇候、広橋殿被取次、晴光へ」被渡之云々、御太刀一
腰・御馬一疋、為御礼禁裏様へ」晴光進上之、此段得上意如此、又
内々近衛殿関白殿へも」得御意云々、此折昏調進様事、進上書にて、
おくの」名字ニ源晴光と氏を書のせ候、かたにハ称号官如常也、」
引合一重おりかミ也、

一御教書ハ右筆方相調之、管領判形在之、知行方儀ニ被出之云々、

越中国今江保事、任去年○十二月十一日

御判之旨、可被沙汰付○、大館刑部大輔持房代」之由、所○被仰下也、仍執達如件、

嘉吉元年十二月十四日

右京大夫

畠山尾張守殿

一右京兆高国四品之儀○、叡慮之趣委細被仰出之○其分候、「仍宣下御儀○、式之事内々以御意得○御馳走、可」目出候、此旨宜○得御意候哉、常興誠恐○謹言

十二月十一日

常興判

広橋殿 人々御中

当官大納言御入候間、某誠恐と調之也、大永元十二十一右京兆四品事也、

一為御使祐阿来臨、関白殿への御内書御文言^ニ、以御内書」被仰なととハ御さ候ましく候哉否事、被尋下之旨、尤其御分候、「以一札被仰と御さ候て可然奉存候由、言上也、此分一帋^ニ調候て、「申やうにと被申候間、其分候、しるし進上、

一筒井法眼かたへ被成 御内書御上書事、筒井法眼」房と可有御座と存候由、言上仕候也、

一赤松かたより態言上之間、被成 御内書之處、忝畏存旨」申之、御太刀・御馬・刀進上之、重而又可被成御内書哉、但「重而儀ハ、それまでもなく候歟、被尋下旨仰也、仍重而ハ」不及被成之、申次候方へ^{伊勢守} 兩人也、御内書を被成て、「得其意可申由、被仰出、可然存候旨申之、然間御案」文可調進申由候間、注進上之也、

就内書之儀、太刀一腰・刀一・馬一疋、赤松左京大夫」献之段、神妙、得其意可申遣候也、

月日

三測掃部頭とのへ

伊勢守とのへ

右御馬御太刀^ニ御腰物をそへ進上之、一かとある事候間、如此也、一以晴光被尋下候、青蓮院殿より三合三荷御進献候、「晴光かたへ以御書御申候、然間御内書を可被進由」被思食、御案文如此拝見させられ候、可為此御分哉之由」仰也、

三合参荷拝受、尤祝着候、猶晴光可申入候也、「恐惶謹言、

二月廿五日

義晴

青蓮院殿

青蓮院殿、宮門跡にて御さ候間、此御分可然奉存候由言上也、

一今度大般若経一段殊勝儀共候、感悦此事候、寺家へ」も可有伝語候、恐惶敬白、

五月廿日

鹿苑院

一為始礼、太刀一腰^{助包}・馬一疋^{栗毛印}到来、目出候、猶」常興可申候也、

六月十七日

御判

畠山次郎とのへ

一就任官儀、太刀一腰・馬一疋到来、神妙、猶常興可申候也、

六月十七日

御判

畠山左衛門佐とのへ

一就字之儀、太刀一腰^{信国}・馬一疋^{河原毛}到来被聞召訖、「仍太刀一腰^{秀遣}之候、猶常興可申候也、

六月十七日

御判

畠山左衛門佐とのへ

一 隼三本到来、自愛不斜候、仍太刀一腰^正遣之候、「猶常興可申候也、
六月十七日

畠山修理大夫とのへ

一 赤松方へ御馬可被遣候、御内書御文言御案文可致「調進由、被仰下也、入国などの事、一向候ハて、た、御馬」被下之、めつらしき御馬にてハ候ハね共、如此之趣たるへし」と、被仰出候、馬一疋^{栗毛}見所不珍候へ共、折節到来候間遣之候、「猶貞孝可伝語候也、
月日

赤松左京大夫とのへ

一 畠山右衛門督殿へ 御内書両通被成候也、
禁中御修理料五千疋京進、神妙候、猶常興「可申候也、
十一月廿四日 御判

右衛門督とのへ

一 就普広院殿百年忌千疋到来、喜入候、猶常興可「申候也、
十一月廿五日 御判

右衛門督とのへ

一 就妙安西堂久在国、従相国寺可上洛之由申候、然者「加意見、急度
帰寺肝要候、猶常興可申候也、
七月廿五日 御判

尼子伊予守とのへ

御料紙引合御立文、如常中を被封、御上卷上下ひねる、
右筆貞孝、

副状

一 就妙安西堂長々在国、為相国寺上洛事被申候間、被成「御内書候、
被加意見、早速帰寺肝要旨、得其意可令「申由、被仰出候、急度可
被仰詞事可然存候、恐々謹言、
七月廿五日 沙弥常興判

尼子伊予守殿

料昏鳥子半切也、

一 八朔^{天文七}

御太刀一腰^金

御練貫五重

小高檀紙十帖

御馬一疋^{鶴毛}

佐々木彈正少弼

一 六角霜台への御返事御目錄、毎年之儀式也、引合「一枚おりて注申之、御返

御太刀一腰^{則光}

御香合

一 堆朱

御盆 一枚同

以上 うハかきニハ六角霜台と付也、

一 愚札文言事

貴札令拜見候、抑八朔御札、以目錄御進上之段、則致「披露候處、
能々得其意可令申由、被仰出候、仍為御返御太刀「一腰^{則光}・御香
合一 堆朱・御盆一枚^同御給候、玆重候、「可得御意候、恐々謹言、
八月朔日 沙弥常興

謹上 六角殿

一 右金吾へ之返札事

就八朔御祝儀、太刀一腰御進上之段、則令披露之候、仍「為御返御
太刀御拝領候、玆重存候、猶木沢左京亮可被「申候、可得御意候、
恐々謹言、
八月十三日 沙弥常興

謹上 右衛門督殿

大館入道^{うゑ}

御報

一 朝倉方へ之御内書 誰人被調候哉、不審令存候

就渡唐船帰朝到来之間、錦一疋 赤紋四季花・羅一疋 紺紋雲織金・紗一疋 胸背麒麟 遣之候、」猶晴光可申候也、

二月十一日 御判

朝倉彈正左衛門入道とのへ

右何も無相違候

晴光判

大宮ら

しるし

朱印

従四位下源晴光